

第6章 C1区の検出遺構と出土遺物

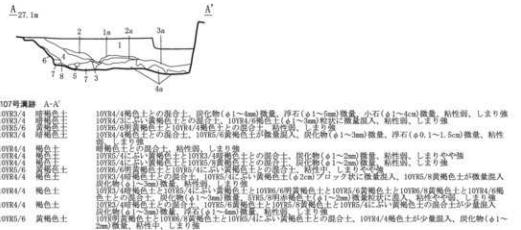
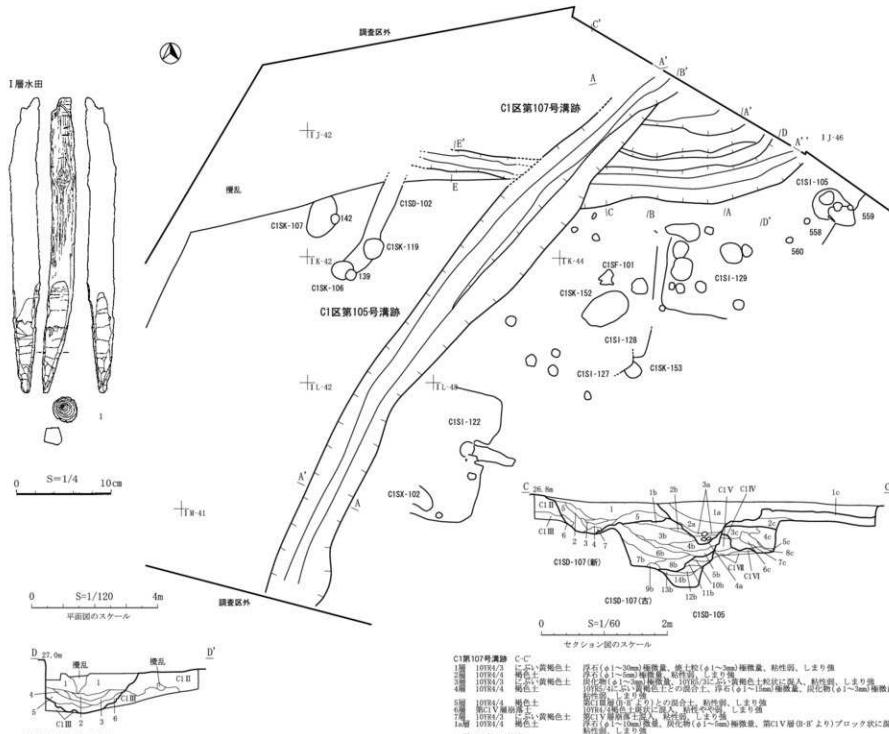


図132 C1区溝跡（2）

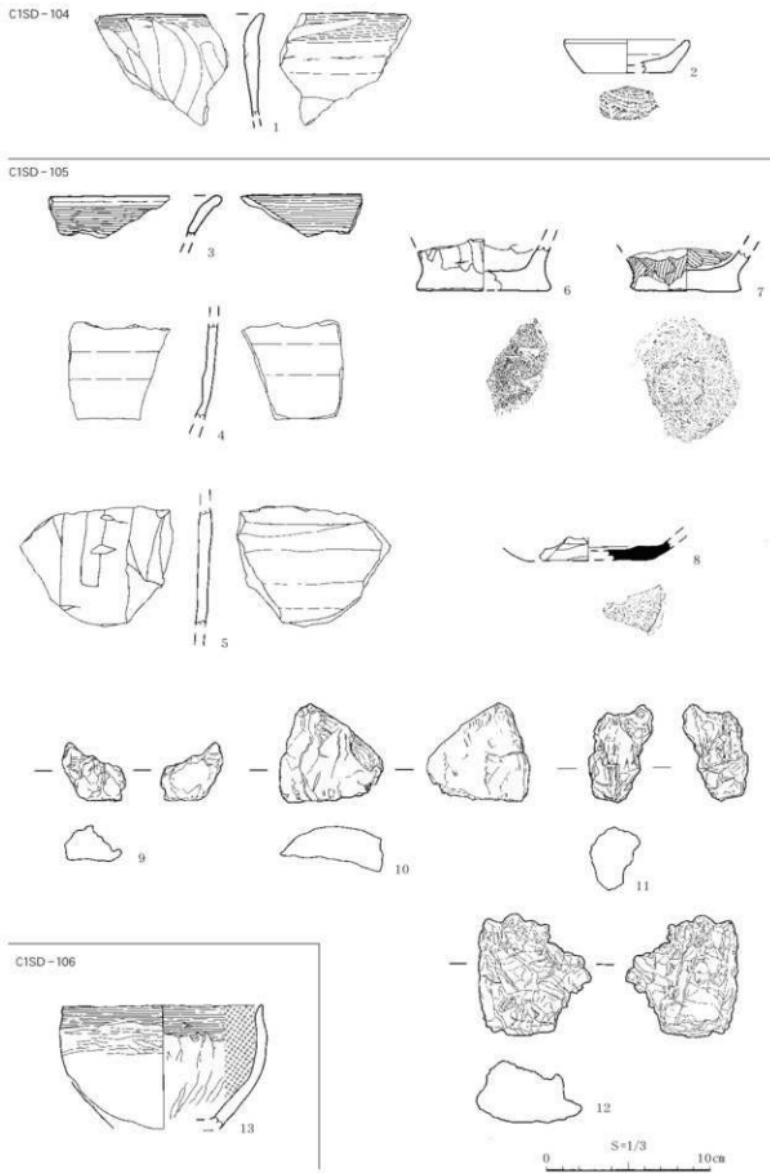


図133 C1区溝跡出土遺物（1）

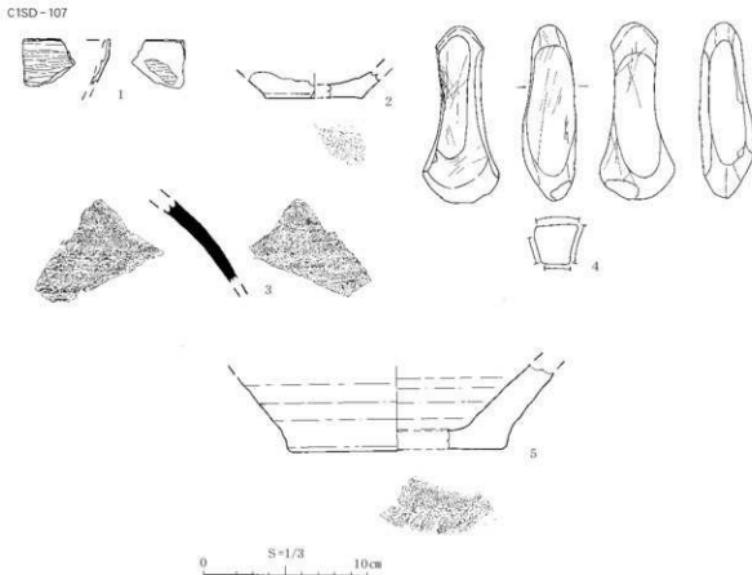


図134 C1区溝跡出土遺物（2）

## 第7節 焼土遺構

第101号焼土遺構（C1 S F-1）（図103）

【位置・確認】IK-44グリッドに位置している。第128号竪穴住居跡確認面で焼土の拭がりとして確認されている。

【重複】第128号竪穴住居跡内に位置しているが、明確な新旧関係は不明である。同時存在の可能性も考えられる。

【形態・規模】平面形は不整形を呈する。長軸50cm、短軸40cm、深さは6cmを測る。

【壁・底面】基本層序第C1Ⅲ層を壁・底面としている。

【堆積土】1層の単層である。焼土ブロックが混在している。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが、竪穴住居内の炉跡の可能性も考えられる。

(笠森)

## 第8節 性格不明遺構

第101号性格不明遺構 (C1S X-101) (図135)

【位置・確認】 I Q-46グリッドに位置する。基本層序第C1 I 層直下、第C1 II 層中で検出した。

【重複】 第151号土坑と重複しており、これよりも古い。

【形態・規模】 大部分が調査区外にあるため、全体形状は不明である。

【堆積土】 にぶい黄色土を主体とする。色調が漸移的であり、自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】 堆積土中より土師器の細片が出土している。

【小結】 検出層位、遺構の重複関係から、10世紀後半以降、12世紀以前に帰属するものと考えられる。

(齊藤)

第102号性格不明遺構 (C1S X-102) (図135)

【位置・確認】 I M-43グリッド他に位置する。第122号竪穴住居跡床面の下部で検出した。

【重複】 第122号竪穴住居跡と重複しており、これよりも古い。

【形態・規模】 遺構の西側部分が擾乱によって失われているため、全体形状は不明である。ピット状の掘方内部で焼土を検出しておらず、カマド煙道部の可能性も考えられる。

【堆積土】 2層に焼土がみられ、炭化物が混入する。焼土の状態はブロック状であり、現地性のものではない。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 検出層位、ならびに遺構の重複関係から、10世紀後半以降、12世紀以前に帰属するものと考えられる。

(齊藤)

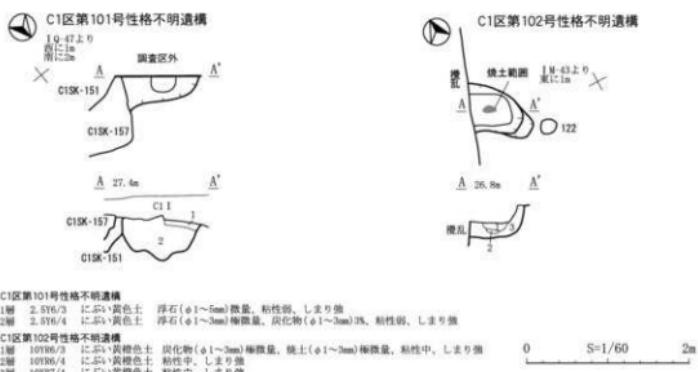


図135 C1区性格不明遺構

## 第9節 遺構外出土遺物

C1区の遺構外からは、土師器・須恵器・陶磁器・土製品・金属製品が出土している。C1区における調査前の土地利用状況は畑地で、深耕による擾乱が基本層序第C1Ⅲ層まで及んでいる箇所がある。遺構外出土遺物は基本層序第C1Ⅰ層や擾乱層からの出土が多くを占める。

### 1 古代の土器（図136・137・138・139）

遺構外から出土した土師器・須恵器の破片総量はコンテナ3箱分に相当する。C1区内全域の畑耕作土層（第C1Ⅰ層）から出土しており、第C1Ⅱ層以下からの出土はほとんどみられない。形状の復原が可能で時期判別可能な資料を中心に選別を行い、一部を実測・図示した。

土師器壺については、内外面に横方向の顯著なミガキが加えられ、体部に段状の区画が作られるもの（図136-2～6）と外面に粘土紐の接合痕を残し、口縁部および内面に入念なナデ調整が加えられているもの（図136-1,7,8,10,11）が主体をなし、ロクロ成形（図136-9）は稀である。

図136-2～6はいずれも細片状態であるため、正確な器形復原に基づく時期判定は困難であるが、8世紀代以前の年代が考えられる。また、粗雑な印象を与える手づくね成形の壺の一群については、底部に筵編圧痕（図136-1）、ないし木葉痕がつく。これらの外面粘土紐接合部には指頭圧痕が残り、無調整である。五輪野遺跡、水木館遺跡に類例がみられ、白頭山苦小牧火山灰降下以後の年代が与えられる。また、ロクロ成形の壺底部には基本的に回転糸切り痕がみられるが、静止糸切り痕もわずかに含まれる。

土師器甕については、口縁部にヨコナデ、胴部に縦方向のケズリとヘラナデを加えたものが大半を占め、小型甕の割合が比較的高い。また、口縁部の形状についても、屈曲が弱く、幅の短いものが多く、10世紀後半が大半を占めるとみられる。例外的な資料としては、ロクロ成形によって仕上げられているもの（図137-1）や粘土紐を貼り付け、隆帯状の装飾を付加したもの（図137-2）があり、前者については、9世紀代に遡る可能性がある。また図136-13は口縁部に横走する4条の沈線がみられ、8世紀代の甕、あるいは10世紀後半の擦文土器の可能性がある。また、この他に、内黒甕（図138-11）や耳皿？（図138-14）、把手付土器（図138-15）も出土している。

須恵器は、壺（図139-1～4）と甕（図139-5）がみられる。図139-1は底径に比して器高が低く、底部内面には右方向に満巻く粘土紐の接合痕と顯著なロクロ目がみられる。底部外面の切り離しは回転ヘラ切りによる。図139-2は底部を回転ヘラ切りの後に高台を加えたもので、底部外面にはヘラ状工具によってケズリ調整が加えられている。いずれも産地は不明であるが、胎土の螢光X線分析から、日本海側の産地が推定されている（第9章第20節）。

（齊藤）

### 2 中世以降の陶磁器・土器（図139）

遺構外から出土した中世陶磁器・土器は8点、近世の陶磁器は17点、近現代の陶磁器は24点出土しており、中世土器の瓦質捕鉢（図139-6）、中世陶器の珠洲壺甕類（図139-7）を図示した。中世の陶磁器では、この外に釉が白濁する龍泉窯系の青磁碗体部破片や、古瀬戸瓶子の体部破片、珠洲壺甕類の体部破片、前述した瓦質土器の同一個体と思われる破片があるが、いずれも細片で時期不明の

ものであり、掲載はしていない。

瓦質捕鉢は、外面と胎土が黒色で口縁端部がやや内傾し面を取るもので、内面には鉢目が直線的に口縁端部付近まで施されるものである。珠洲壺甕類は、体部破片であり、外面の叩目の密度や胎土の状況から、13世紀後半から15世紀前半にかけてのものと思われる。

近世の可能性がある陶磁器のうち陶器は明石・堺産と思われる擂鉢が出土しているが、数量的に少ない。磁器では碗・皿・瓶類が出土しており、肥前産の碗が比較的多く出土している。  
(工藤)

### 3 擦文土器？・土製品（図139）

図139-8は刷毛目状の条痕が外面にみられ、擦文土器ないしは8世紀代以前の土師器甕と考えられる。また、図139-9は土師器片の中心に内外面から回転穿孔を加えたものであるが、貫通はしていない。用途不明の土製品である。  
(齊藤)

### 4 金属製品（図139-10・11）

遺構外から出土し図示できた金属製品は非常に少ない。製品としては香炉が1点（図139-10）と煙管が1点（図139-11）、いずれも耕作土中から出土している。図139-10は密教法具の一つの火舎（香炉）と考えられる金属製品である。中心から約80°程外側に折れ、脚も1本欠失した状態で出土している。本来は輝が付く上皿に3本の脚が付随していたものと考えられる。同じく付隨していたと思われる蓋も今回の調査では出土していない。皿部分の直径は約50mm、輝部分までの直径は約66mm、輝から皿底部までの深さは9mm程度である。器の厚さは全体が0.5mmとかなり薄く造られている。脚は皿底部に穿孔された孔に凸部を差し込んで固定している様子が見られる。比較的小型の製品で、持ち運んで使用した置き香炉の可能性が高いものと思われる。畠耕作土中からの出土ということもあり、帰属年代については不明な点が多いが、古代～中世以降の所産の可能性が高いものと思われる。材質は蛍光X線分析の結果、銅であることが判明している（第9章第23節参照）。遺物の出土地点は中世の頃に寺院（天徳寺）があった場所との伝承がある。発掘調査による火舎の出土例としては、新潟県阿賀野市（旧安田町）の横峰経塚の埋葬品に見ることができる。図139-11は煙管の雁首。火皿及び吸い口を欠失している。雁首の断面はほぼ円形を呈している。火皿の接合部分もかなり破損しており、脂返の反り具合も不明である。雁首の小口付近には雁首と吸い口をつなぐ羅宇の一部が見られる。断面の観察から、羅宇には竹材が使われているものと思われる。雁首・羅宇共に材質の分析は行っていない。その他、耕作土中から鉄滓や輪型滓の破片が5点出土しているが図示はしていない。5点共に金属反応は見られなかった。  
(笠森)

### 5 まとめ

C1区における遺構外では、古代の土師器・須恵器、中世の陶磁器が出土している。古代の土師器・須恵器の年代は10世紀後半～11世紀末頃と8世紀代に集中する。中世の遺物は少なく、時期や用途別の傾向は特に認められない。また近世や近現代の陶磁器の出土数が少ないと見られ、近世以降のC1区は、居住地として使用された可能性が薄いと思われる。

(担当者一同)

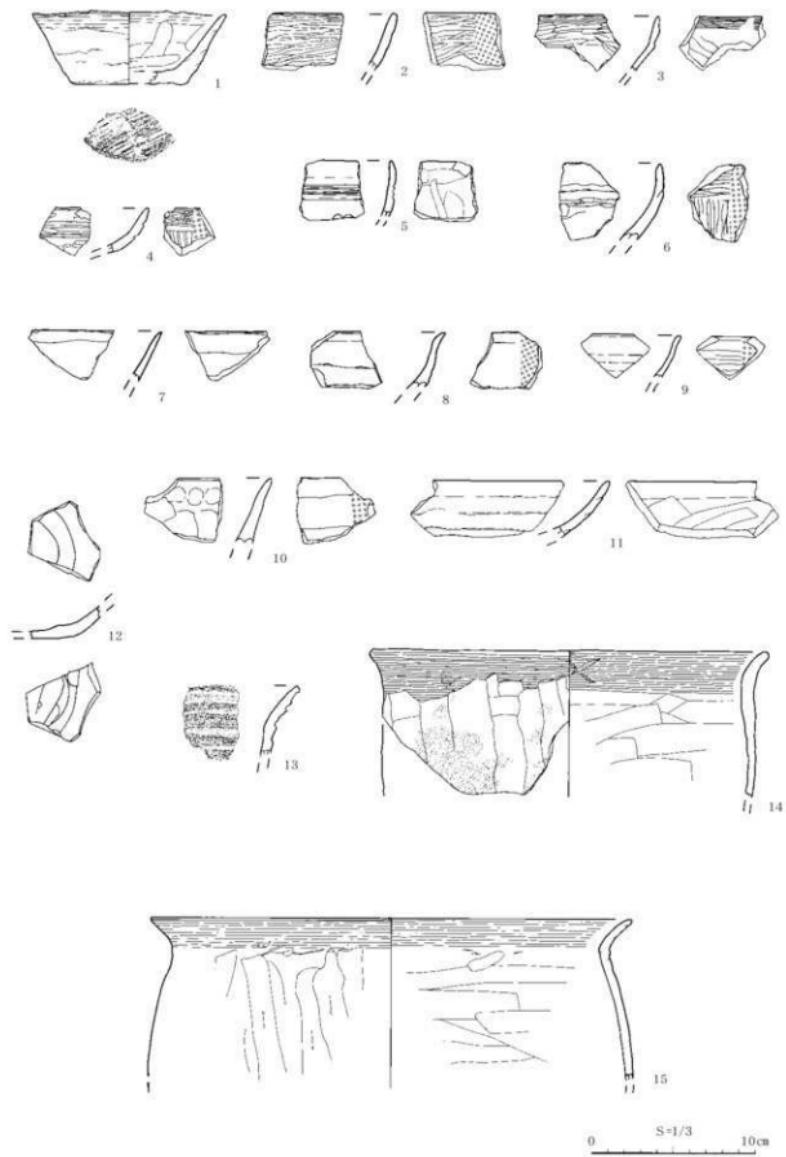


図136 C1区遺構外出土遺物（1）

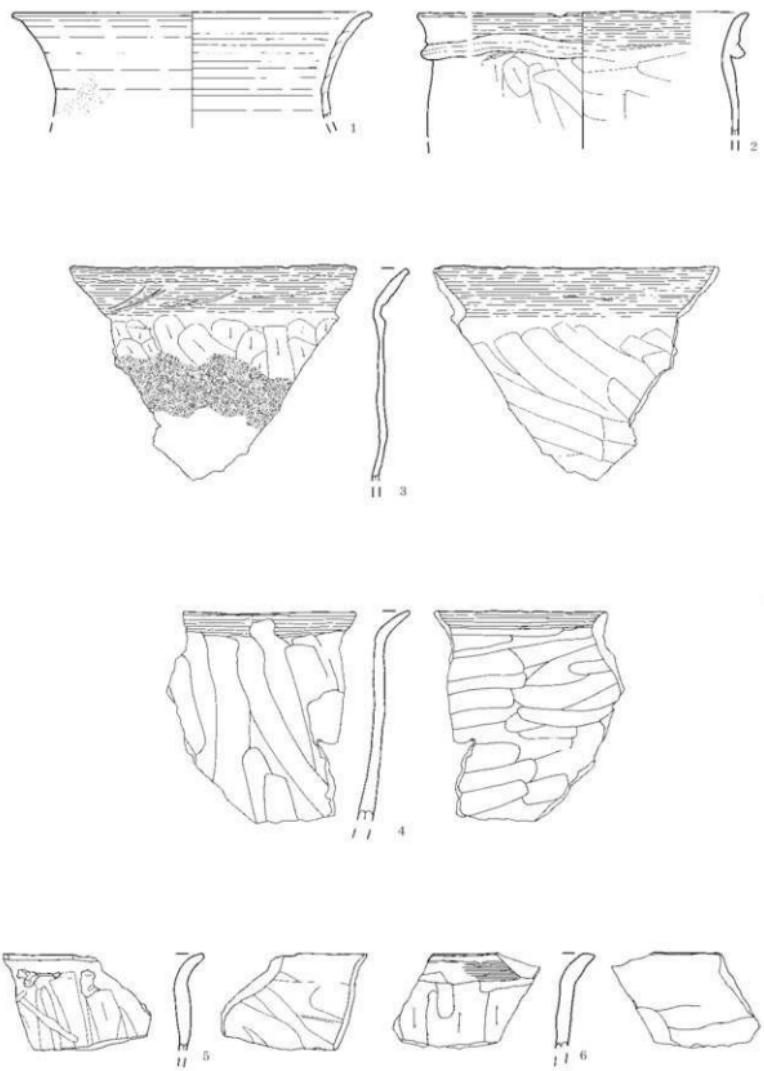


図137 C1区遺構外出土遺物（2）

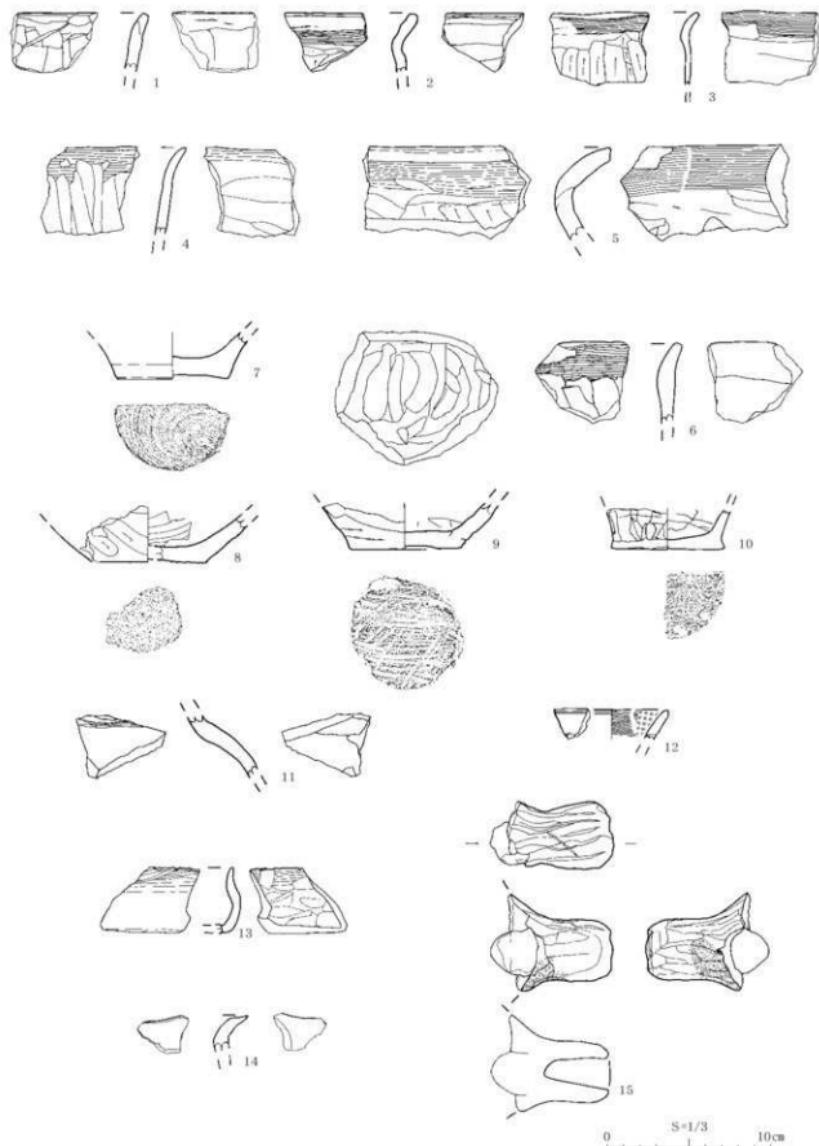


図138 C1区遺構外出土遺物（3）

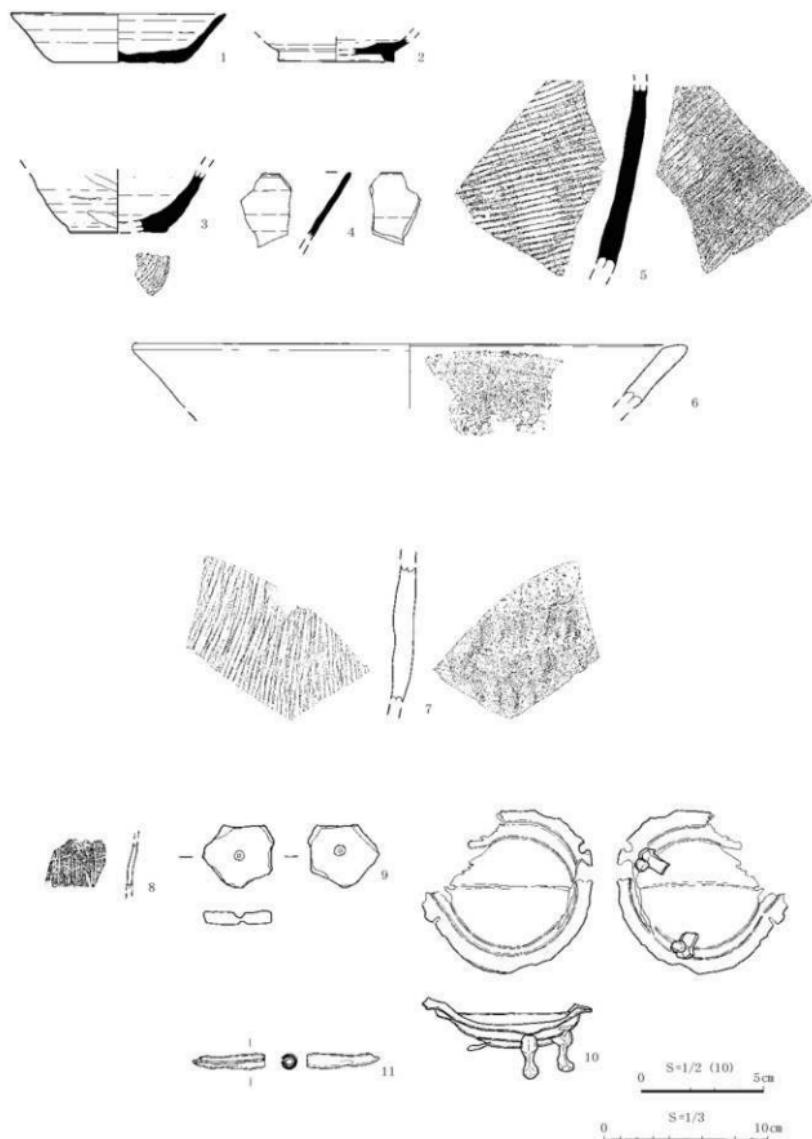


図139 C1区遺構外出土遺物（4）

## 第7章 D区の検出遺構と出土遺物

### 第1節 D区の概要

前川遺跡D区は調査区の南東部、平成2年度の調査区である村道畠中諒訪堂線を挟んだ東西両側に位置している。現況は村道より東側は畑地及び水田、西側も同様に畑地及び水田であった。畑地は微高地の端部、水田はそれより一段低い低地部分に拡がっている。畑地の標高は27.1m前後で現在の村道との比高差はあまり見られない。一方水田は標高26m前後で、村道よりかなり低い場所に位置していることが分かる。村道より東側の畑地は南側で一部盛り土がなされていた。村道より西側の畑地は大部分で盛り土が行われており、その前にはかなりの掘削を伴う土取り行為が行われている様子が確認されている。水田は全て圃場整備後のもので水路も含め整然と区画されている。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、竪穴遺構4基、掘立柱建物跡1棟、土坑8基、井戸跡2基、溝跡11条、濠跡5条、ピット多数、沼跡・河川跡等である。遺物は遺構内外から土師器・須恵器を中心に弥生土器、石器、陶磁器、木製品等が出土している。

国道102号バイパスへの取り付け道路である村道畠中諒訪堂線を挟んで東側は平成2年度に調査された区域に接しており、今回の調査では同一の遺構も検出されている。それらの遺構に関しては今回検出された遺構の記述内に当時の遺構番号等を付記している。西側は今回の調査区が平成2年度に遺構が検出された微高地の端部から35m程南側へ離れていたと同時に大部分が盛り土だったこともあり同一の遺構は検出されていない。

### 第2節 竪穴住居跡・竪穴遺構

#### 第1号竪穴住居跡 (D S I - 1) (図140・146)

【位置・確認】 I I - 66・67グリッドに位置している。第2・7・8号竪穴住居跡検出面で確認した。カマド部分のみの検出である。

【重複】 第2・7・8号竪穴住居跡と重複している。カマドの残存状況や堆積土の観察から、本遺構が一番新しいものと考えられる。

【形態・規模】 竪穴住居跡としての規模は不明である。

【堆積土】 調査区際の堆積土の観察から2層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【壁・床面】 調査区際の堆積土の状況から、壁は床面からやや急に立ち上がっていたものと考えられる。床面は貼り床で、ほぼ平坦に造られていた様子が認められる。

【柱穴】 貼り床の下に柱穴と思われるピットが認められる。本遺構に伴うかどうかは不明である。

【壁溝】 不明である。

【カマド】 東壁に付随していたものと考えられる。煙道部は半地下式を呈しており、推定東壁から約120cm程突出していたものと思われる。袖部もほとんど調査区外に存在しているため、カマドとしての全容も伺い知ることもできなかった。火床面は不整形を呈していたものと思われるが明瞭ではない。焚き口部前面に灰溜まりと考えられる捕り鉢状の落ち込みが認められる。落ち込みの一部も調査区外

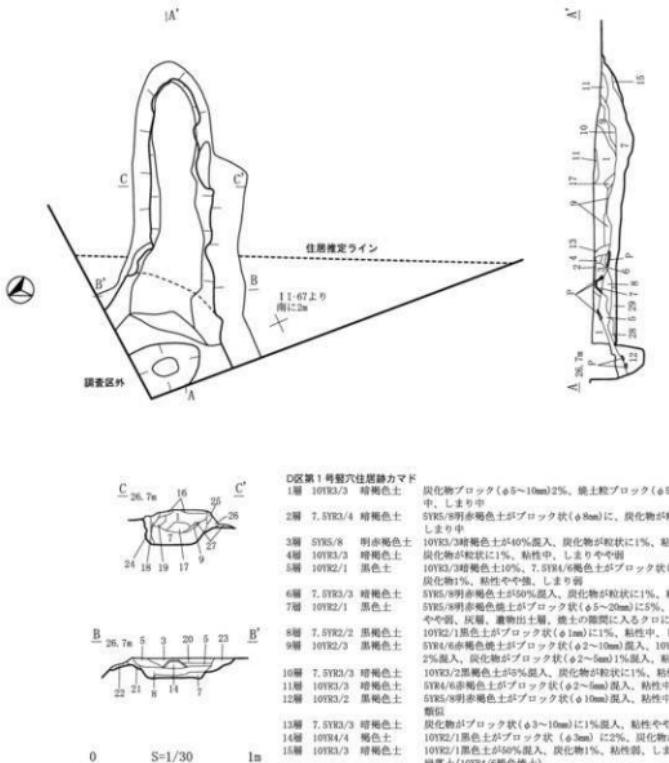


図140 D区竪穴住居跡（1）

に存在しているため全体の規模は不明である。深さは最大28cmを測る。カマドの軸方位はN-110°-Eを測るものと推測される。

【その他の施設】不明である。

【出土遺物】遺物はカマド焚き口部周辺から出土している。土師器を中心に須恵器や石製品が出土している。石製品は、外面に擦痕を有する不明石製品であり、1層から出土している。掲載はしていない。

【小結】出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡の一部と考えられる。10世紀後半・白頭山苦小牧火山灰降下後の可能性が高い。

(笹森)

#### 第2号竪穴住居跡 (D S I - 2) (図141・142・146~150)

【位置・確認】II-66・67グリッド他に位置している。第1・7号竪穴住居跡、第8号竪穴造構検出面で確認した。

【重複】第1・7号竪穴住居跡、第8号竪穴造構、第7・8号土坑と重複している。第7号竪穴住居跡、第8号竪穴造構より新しく、第1号竪穴住居跡より古いものと考えられる。第7号土坑とは同時期か新しい可能性がある。

【形態・規模】大半が調査区外に存在しているため、全容を伺い知ることはできない。竪穴住居としての規模は不明である。

【堆積土】掘方を含めると16層に分層できた。掘方以外は自然堆積の様相を呈している。

【壁・床面】壁は床面より緩やかに立ち上がっている。床は貼り床で硬く締まっている。

【柱穴】検出された床面の範囲では見つかっていない。

【壁溝】検出されなかった。

【カマド】造り替えられたものと考えられ、新旧2基のカマドが存在している。新しいカマドAは南東壁の中央部に位置していたものと考えられる。煙道部は半地下式を呈しており、南東壁から約90cm程突出している。焚き口部前面に灰溜まりと考えられる挿り鉢状の落ち込みが認められる。深さは最大26cmを測る。カマドの軸方位はN-115°-Eを測る。古いカマドBも南東壁に造られている。新しいカマドAのやや南寄りで検出された。

【その他の施設】不明である。

【出土遺物】遺物はカマド焚き口部分を中心に出土している。土師器や須恵器が主体をなす。灰溜まりピットの覆土から、外面が被熱により赤褐色を呈する直径20~30cmの大礫が出土している。掘方堆積土からは、片面に炭化物が付着した礫や釘状鉄製品、流動滓や楕円滓が出土している。

【小結】出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と考えられる。カマド焚き口から出土した木炭については放射性炭素年代測定を行っており、980±30yrBPという結果が得られている。詳細については第9章第1節に掲載している。

(笹森)

#### 第3号竪穴住居跡 (D S I - 3) (図143・151)

【位置・確認】IK-66グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認し

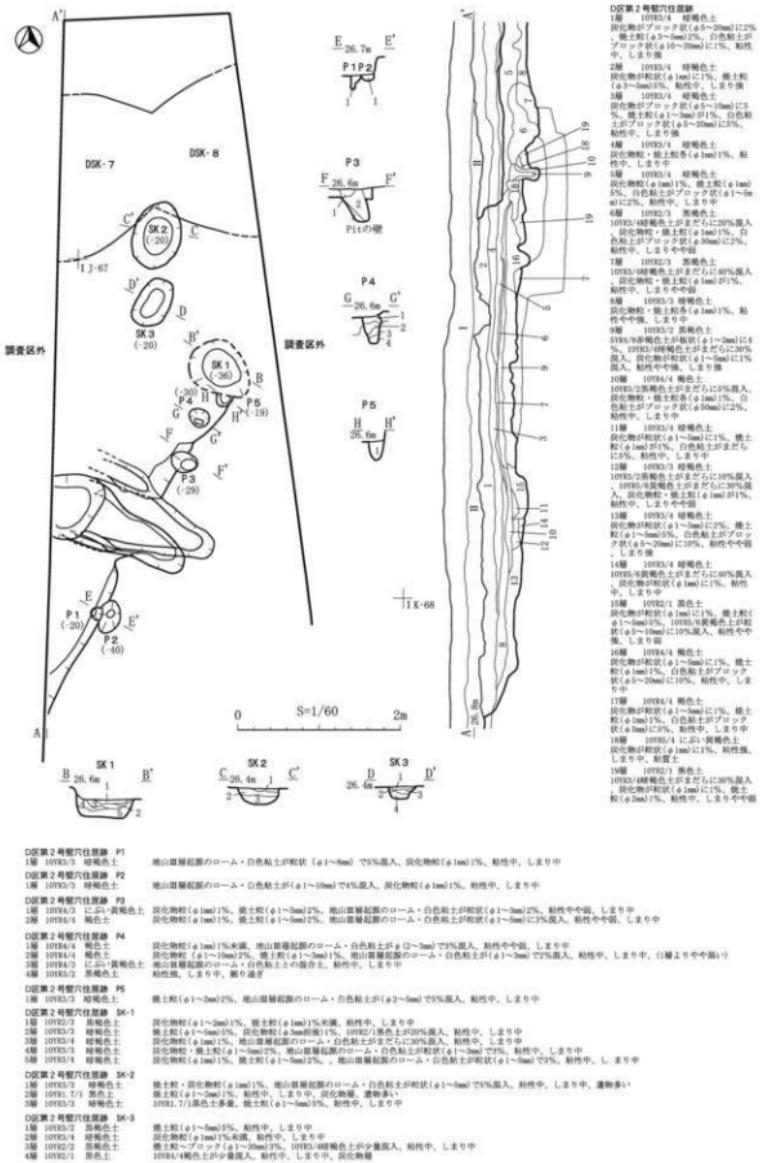
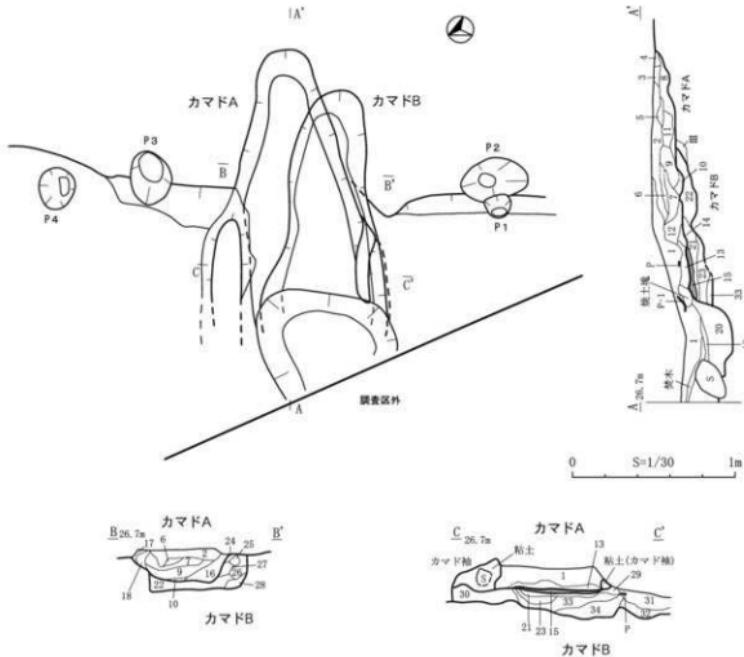


図141 D区豎穴住居跡（2）



D区2号堅穴住居跡カマド A・B	
1層	10YR8/3 にべり 黄褐色土
2層	10YR2/3 時褐色土
3層	5YR4/8 赤褐色土
4層	10YR2/9 時褐色土
5層	10YR2/3 時褐色土
6層	10YR2/3 黑褐色土
7層	10YR2/2 黑褐色土
8層	10YR3/3 喻褐色土
9層	10YR2/2 黑褐色土
10層	5YR4/8 赤褐色土
11層	10YR3/3 喻褐色土
12層	7.5YR3/3 喻褐色土
13層	10YR2/3 黑褐色土
14層	7.5YR3/2 喻褐色土
15層	7.5YR4/4 黒色土
16層	10YR2/3 黑褐色土
17層	7.5YR3/3 喻褐色土
18層	10YR2/3 黑褐色土
19層	10YR3/3 喻褐色土
20層	10YR2/3 黑褐色土
21層	7.5YR2/3 黑褐色土
22層	10YR3/3 喻褐色土
23層	10YR3/4 黑褐色土
24層	10YR2/3 喻褐色土
25層	10YR3/3 喻褐色土
26層	10YR5/4 にべり 黄褐色土
27層	7.5YR3/3 喻褐色土
28層	10YR2/3 黑褐色土
29層	10YR2/3 喻褐色土
30層	10YR2/3 喻褐色土
31層	10YR2/3 喻褐色土
32層	10YR2/3 黑褐色土
33層	10YR2/2 黑褐色土
34層	10YR3/3 喻褐色土
1層	燒土粒(φ2~5mm)2%、炭化物粒(φ1mm)1%、7.5YR3/3時褐色土が層下部に10%混入。10YR2/1黑色土が層下部に7%混入、粘性中、しまり中、層面上に炭化物粒、しまり少、層面上に炭化物粒。
2層	燒土粒(φ1~10mm)5%、炭化物粒(φ1mm)1%未満、粘性中、しまり中、10YR2/3時褐色土が50%混入、粘性中、しまり少、燒土層
3層	燒土粒(φ2~3mm)1%、粘性中、しまり少、燒土層
4層	燒土粒(φ2~4mm)30%、粘性中、しまり中、燒土層
5層	燒土粒+ブロック(φ2~4cm)30%、粘性中、しまり中、燒土層
6層	燒土粒(φ2~3mm)40%、炭化物粒(φ1mm)1%、粘性中、しまりや弱、燒土層
7層	燒土粒(φ1~10mm)4%、燒山田屋起源のローム(φ1~3mm)2%混入、粘性中、しまり中、燒土粒(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1mm)1%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が(φ2~5mm)で3%混入、粘性中、しまり中
8層	燒土粒(φ1~10mm)5%、粘性中、しまり中
9層	燒土粒(φ1~10mm)5%、粘性中、しまり中
10層	10YR2/2 黑褐色土が30%、焼土層
11層	燒土粒(φ1~10mm)5%、焼山田屋起源の白色粘土が(φ1~3mm)で3%混入、10YR2/2黒褐色土がまだらに15%混入、粘性中、しまり中
12層	燒土粒(φ1~10mm)5%、炭化物粒(φ2mm)1%、焼山田屋起源の白色粘土がφ5mm前後で1%混入、粘性中、しまり中
13層	燒土粒(φ1~10mm)5%、白色粘土がまだらに1%混入、燒土粒(φ1mm)1%、粘性中、しまり弱、炭化物層
14層	燒土粒(φ1~10mm)1%、燒土層
15層	燒土粒(φ1~10mm)1%、燒土層
16層	燒土粒(φ2~15mm)4%、炭化物粒(φ1mm)1%、燒山田屋起源の白色粘土が(φ1~2mm)1%、粘性中、しまり中
17層	燒土粒(φ2~10mm)20%、粘性中、しまり中
18層	燒土粒(φ2~10mm)5%、粘性中、しまり中
19層	燒土粒(φ1mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%、粘性中、しまり中、粘土質、火床面
20層	燒山田屋起源の白色粘土がまだらに1%混入、燒土粒(φ1mm)1%、粘性中、しまり弱、炭化物層
21層	燒土粒(φ1~2mm)1%、焼山田屋起源の白色粘土が(φ1~2mm)で1%混入、燒土粒(φ1mm)1%、粘性中、しまり中
22層	燒土粒(φ1~2mm)1%、燒山田屋起源の白色粘土が(φ1~2mm)で1%混入、燒土粒(φ1mm)1%、粘性中、しまり中
23層	燒土粒+炭化物粒(φ1mm)1%、焼山田屋起源のローム・白色粘土がブロック状(φ1~15mm)で7%、粘性中、しまり中
24層	燒土粒+炭化物粒(φ1mm)1%、粘性弱、しまり強
25層	炭化物粒(φ1mm)1%、粘性弱、しまり強
26層	燒土粒(φ1~2mm)2%、粘性中、10YR2/3時褐色土との混合土、粘性弱、しまり強
27層	燒土粒(φ1~10mm)3%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ2mm)で5%混入、粘性中、しまり中
28層	燒土粒(φ1~2mm)2%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ1mm)1%、10YR2/2時褐色土との混合土、粘性中、しまり中
29層	燒土粒(φ1~2mm)2%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ1mm)1%、10YR2/3時褐色土との混合土、粘性中、しまり中
30層	燒土粒(φ1~2mm)2%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ2mm)で5%混入、粘性中、しまり中
31層	燒土粒(φ1~2mm)1%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ1~5mm)で3%混入、粘性中、しまり中
32層	燒土粒(φ1~2mm)1%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ1~2mm)で3%混入、粘性中、しまり中
33層	10YR4/4褐色土が20%混じる、燒土粒(φ1mm)1%、粘性中、しまりやや弱
34層	燒土粒(φ1mm)1%、焼山田屋起源のローム・白色粘土が粒状(φ1~3mm)で3%、粘性中、しまり中

図142 D区堅穴住居跡（3）

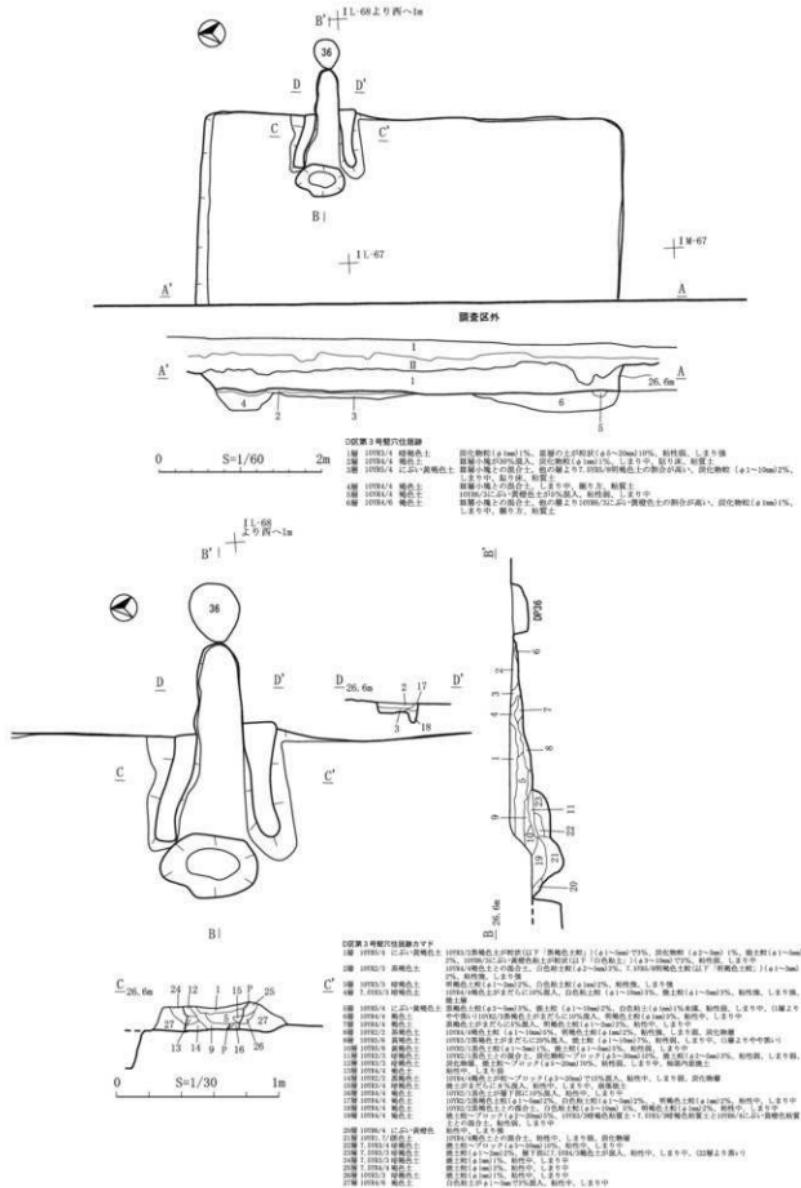


図143 D区竪穴住居跡（4）

た。平成2年度に調査が行われた遺構番号27と同一の遺構と考えられる。

【重複】平成18年度の調査区では他遺構との重複は認められない。

【形態・規模】平面形は方形を呈していたものと思われる。推定長軸620cm、推定短軸580cm、壁高は最大で25cmを測る。

【堆積土】掘方を含めると6層に分層できた。2~6層は掘方埋め土及び貼り床を構成している。1層は暗褐色土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は貼り床及び地床が混在する。

【柱穴】検出されなかった。

【壁溝】検出されなかった。

【カマド】東壁やや北寄りに1基検出された。煙道部は半地下式を呈しており、壁から東側に約50cm程突出している。袖部は比較的良好に残存している。人為的に壊された様子は認められない。火床面は不明瞭で、その前面に灰溜まりと考えられる捕り鉢状の落ち込みを有している。灰溜まりは南北長径60cm、東西短径38cmの卵形を呈し、深さは最大17cmを測る。カマドの軸方位はN-90°-Eを測る。  
【その他の施設】検出されなかった。

【出土遺物】カマド部分を中心に土師器が出土しているが細片が多い。平成2年度の調査では須恵器片、鉄鏃片(遺物観察表では釘)、すり石を示している。

【小結】出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と考えられる。

(笹森)

#### 第4号竪穴遺構 (D S I - 4) (図144)

【位置・確認】IL-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】第21号掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複している。本遺構が古い可能性が高い。

【形態・規模】大部分が調査区外に位置しているため、全容を伺い知ることはできない。平面形は方形を呈するものと思われる。壁高は最大で12cmを測る。

【堆積土】1層の単層である。暗褐色土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【壁・床面】壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面は貼り床で、5層の硬化面を確認した。

【柱穴】ピットが7基検出された。すべてが本遺構に伴うものかは不明である。ピット5~7は第21号掘立柱建物跡を構成する可能性が高い。

【壁溝】一部で2条の溝が検出されている。本遺構の壁周溝の可能性が高い。

【カマド】検出されなかった。調査区外に存在しているものと思われる。

【その他の施設】検出されなかった。

【出土遺物】土師器片や須恵器片が出土している。

【小結】検出状況や出土遺物から、平安時代の竪穴遺構と考えられる。床面の構築状況から数回の建て替えが予想される。

(笹森)

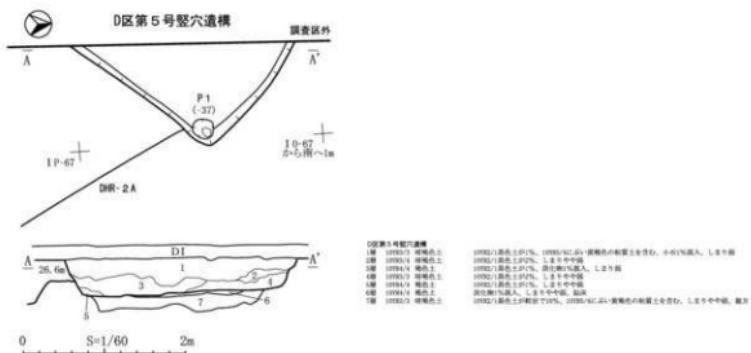
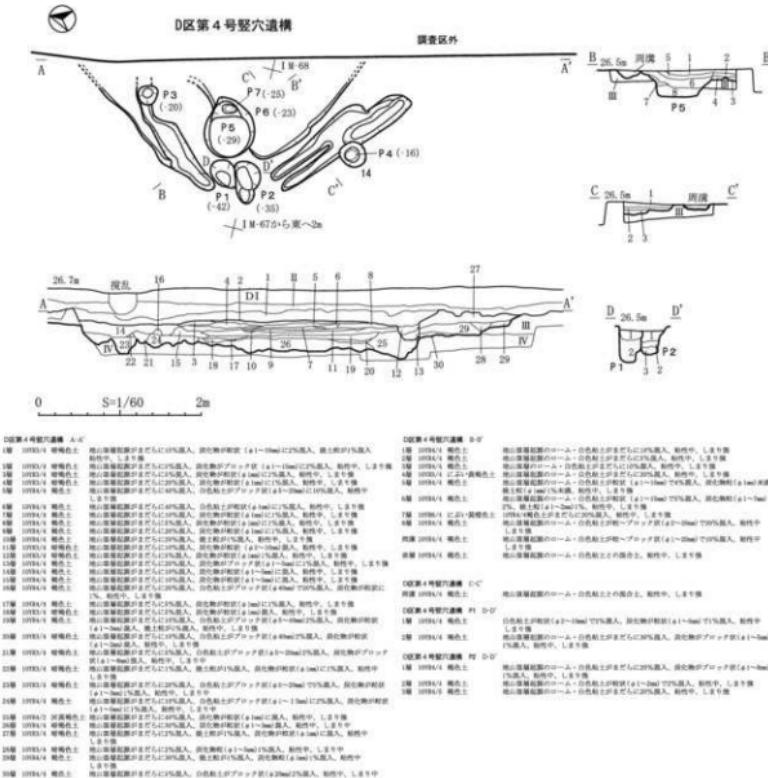


図144 D区豎穴遺構(1)

第5号竪穴遺構 (D S I - 5) (図144・151)

【位置・確認】 I O・I P-66グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中及び第2号濠跡A検出面で確認した。

【重複】 D区第2号濠跡Aと重複している。新旧関係は堆積土の状況から、本遺構が新しいことが確認できる。

【形態・規模】 大部分が調査区外に位置しているため、全容を伺い知ることはできない。確認できた1辺は最大280cmを測る。平面形は多少隅丸の方形を呈するものと思われる。壁高は最大で45cmを測る。

【堆積土】 挖方を含めると7層に分層できた。掘方及び貼り床を除き自然堆積の様相を呈している。堆積土6層が貼り床、7層は堀方埋め土である。

【壁・床面】 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は一部に貼り床が施される。

【柱穴】 南東コーナー部に1基、柱穴と思われるビットが検出されている。径22~28cm、深さは37cmを測る。

【壁溝】 検出されなかった。

【カマド】 検出されなかった。調査区外に存在しているものと思われる。

【その他の施設】 検出されなかった。

【出土遺物】 土師器の細片や須恵器が出土している。

【小結】 詳細な時期は不明であるが、出土遺物から平安時代の可能性が高い。濠跡埋没後であることから10世紀後半~11世紀代の可能性が高い。

(笹森)

第6号竪穴遺構 (D S I - 6) (図145・151)

【位置・確認】 I J・I K-66グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】 認められない。

【形態・規模】 大部分が調査区外に位置しているため、全容を伺い知ることはできない。平面形は方形を呈していたものと思われる。壁高は最大で14cmを測る。

【堆積土】 2層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【壁・床面】 壁は床面から緩やかに立ち上がっている。掘方の埋め土を床面としている。明確な硬化面は見られなかった。

【柱穴】 柱穴と考えられるビットは検出されなかった。

【壁溝】 検出されなかった。

【カマド】 検出されなかった。調査区外に存在しているものと思われる。

【その他の施設】 検出されなかった。

【出土遺物】 堆積土中から土師器片が、掘方埋め土から流動滓が出土している。

【小結】 出土遺物から、平安時代の竪穴遺構と考えられる。

(笹森)

## 第7号竪穴住居跡 (D S I - 7) (図145・151)

- 【位置・確認】IH-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。
- 【重複】第1・2号竪穴住居跡、第8号竪穴遺構と重複している。堆積土の観察から第1・2号竪穴住居跡より古い。第8号竪穴遺構との新旧関係は途中に第2号竪穴住居跡が存在するため不明である。
- 【形態・規模】大部分が調査区外に存在に位置しているため、全容を伺い知ることはできない。壁高は最大で40cmを測る。
- 【堆積土】11層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。
- 【壁・床面】壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面は貼り床で、最大5回貼り替えられていることが確認できた。
- 【柱穴】柱穴と考えられるビットは検出されなかった。
- 【壁溝】検出されなかった。
- 【カマド】検出されなかったが、壁面の堆積土第11層はカマドに付随する灰溜まりビット覆土の可能性が高い。
- 【その他の施設】検出されなかった。
- 【出土遺物】堆積土中から土師器片が出土している。
- 【小結】出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と考えられる。

(笹森)

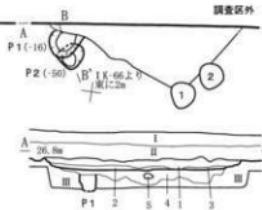
## 第8号竪穴遺構 (D S I - 8) (図145・151)

- 【位置・確認】II-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。
- 【重複】第2・7号竪穴住居跡、第7・8号土坑と重複している。新旧関係は堆積土の観察から第2号竪穴住居跡より古いことが分かる。第7号竪穴住居跡との新旧関係は途中に第2号竪穴住居跡が存在するため明確には分からない。第7・8号土坑とは同時期か新しい可能性がある。
- 【形態・規模】遺構の大半が新しい遺構に壊されているため、全容を伺い知ることはできない。確認できる壁高は最大で3~4cmを測る。
- 【堆積土】調査区東壁での観察で、掘方を含め8層に分層できた。掘方以外は自然堆積の様相を呈している。
- 【壁・床面】壁は床面からやや急に立ち上がっている。床面は貼り床で堅緻である。貼り床は2枚検出されている。
- 【柱穴】本遺構に伴うと考えられる柱穴は6基検出されている。1基は重複している。
- 【壁溝】南東隅に逆L字状に幅広の溝跡が検出されている。コーナー部にビットを有している。
- 【カマド】検出されなかった。調査区外に存在していた可能性が高い。
- 【その他の施設】検出されなかった。
- 【出土遺物】土師器片が出土している。
- 【小結】出土遺物から、平安時代の竪穴遺構と考えられる。貼り床の枚数から、新旧2時期あった可能性が高い。

(笹森)



## D区第6号竪穴遺構



## D区第6号竪穴遺構 P1・2

P1 1層 10YR2/3 黒褐色土	炭化物粒(φ2~10mm)3%, 塗土粒(φ1~5mm)2%, 白色粘土粒(φ1~2mm)1%, 粘性中, しまり中
P2 1層 10YR4/4 黄褐色土	炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中
P2 2層 10YR4/4 黄褐色土	炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中
P2 3層 10YR3/3 墓褐色土	炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中
P1 1層 10YR2/3 黒褐色土	まだらに10%混入, 粘性中, しまり中

炭化物粒(φ2~10mm)3%, 塗土粒(φ1~5mm)2%, 白色粘土粒(φ1~2mm)1%, 粘性中, しまり中  
地山面層起源の白色粘土粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中  
地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)1%, 粘性中, しまり中  
地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中  
地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)1%, 粘性中, しまり中  
地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

## D区第7号竪穴住居跡

1層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒, 塗土粒各(φ1mm)1%, ローム, 白色粘土粒(φ1~5mm)2%, 粘性中, しまり中

2層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒, 塗土粒各(φ1~2mm)1%, ローム, 白色粘土粒(φ1~5mm)2%, 粘性中, しまり中

3層 10YR3/2 黒褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

4層 10YR3/2 墓褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, ローム, 白色粘土粒(φ1~5mm)3%, 粘性中, しまり中

7層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

10層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

11層 10YR4/4 黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

12層 10YR4/4 黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

13層 10YR5/4 にぶい黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)1%, 地山面層起源のローム, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

## D区第8号竪穴遺構

1層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ2~5mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)3%, ローム粒, 白色粘土粒(φ1~10mm)5%, 粘性中, しまり中

2層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ2~3mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)3%, ローム粒, 白色粘土粒(φ1~10mm)5%, 粘性中, しまり中

3層 10YR2/2 黑褐色土

炭化物粒(φ2~3mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)3%, ローム粒, 白色粘土粒(φ1~10mm)5%, 粘性中, しまり中

4層 10YR4/4 黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)2%, 白色粘土粒(φ1~2mm)2%, 粘性中, しまり中

5層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)2%, 白色粘土粒(φ1~10mm)2%, 粘性中, しまり中

6層 10YR4/4 黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)2%, 白色粘土粒(φ1~10mm)2%, 粘性中, しまり中

7層 10YR4/4 黄褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~3mm)2%, 白色粘土粒(φ1~10mm)2%, 粘性中, しまり中

## D区第7号竪穴住居跡 SK-1

①層 10YR3/3 墓褐色土

塗土粒(φ1mm)1%, 白色粘土粒(φ1~5mm)3%, 粘性中, しまり中

②層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~5mm)3%, 粘性中, しまり中

③層 7. SYR3/2 墓褐色土

炭化物粒(φ2~3mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)3%, 粘性中, しまり中

④層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ1mm)1%未満, 塗土粒(φ1~5mm)3%, 粘性中, しまり中

⑤層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ2~3mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)3%, 白色粘土粒(φ1~15mm)10%, 10YR3/2墓褐色土(φ2~10mm)2%, 白色粘土粒(φ1~20mm)5%, 粘性中, しまり中

⑥層 10YR3/3 墓褐色土

炭化物粒(φ2~3mm)2%, 塗土粒(φ1~5mm)2%, 白色粘土粒(φ1~50mm)15%, 粘性中, しまり中

## D区第7号竪穴住居跡 SK-1(-48)

1 I-67より  
東に2m

P7 (-13)  
P6 (-16)

調査区分

## D区第8号竪穴遺構

P1 (-25)

DS1-1

DS1-7 II

C 26.8m I C'

2 3 4 5 6 7 8 9

SK 1

0 S=1/60 2m

図145 D区竪穴住居跡（5）・竪穴遺構（2）

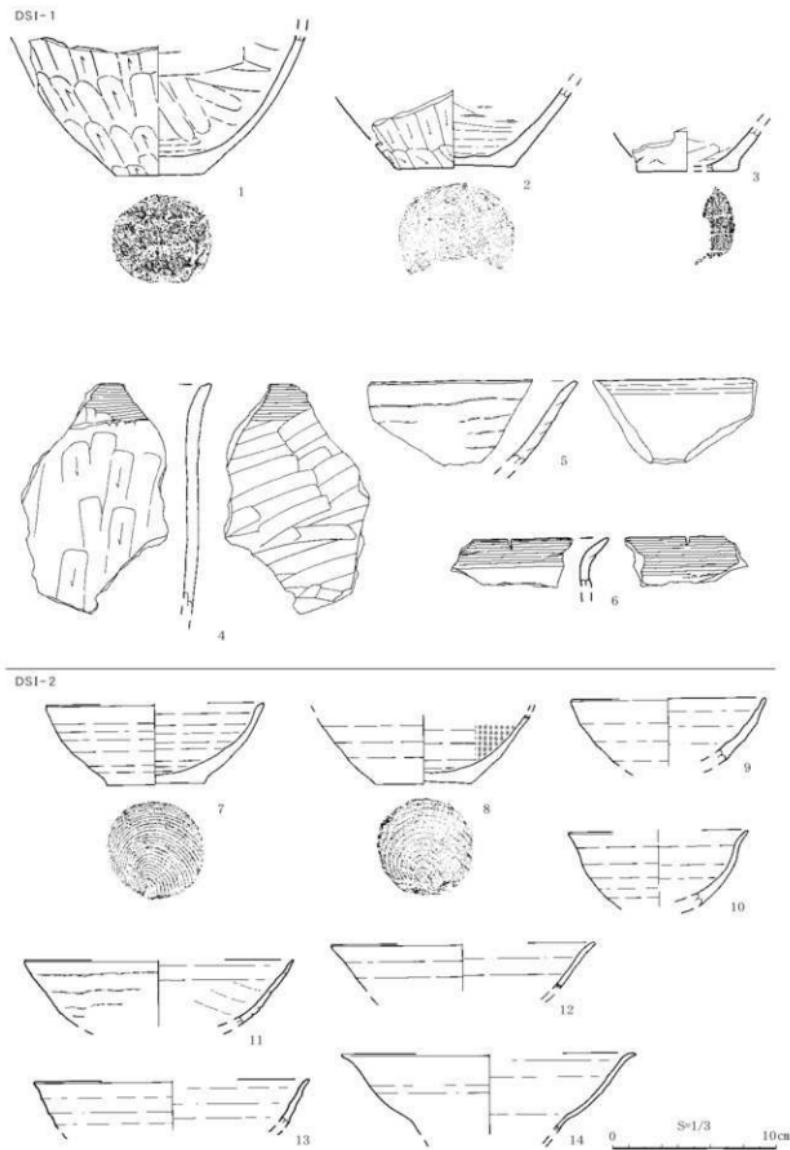


図146 D区竪穴住居跡出土遺物（1）

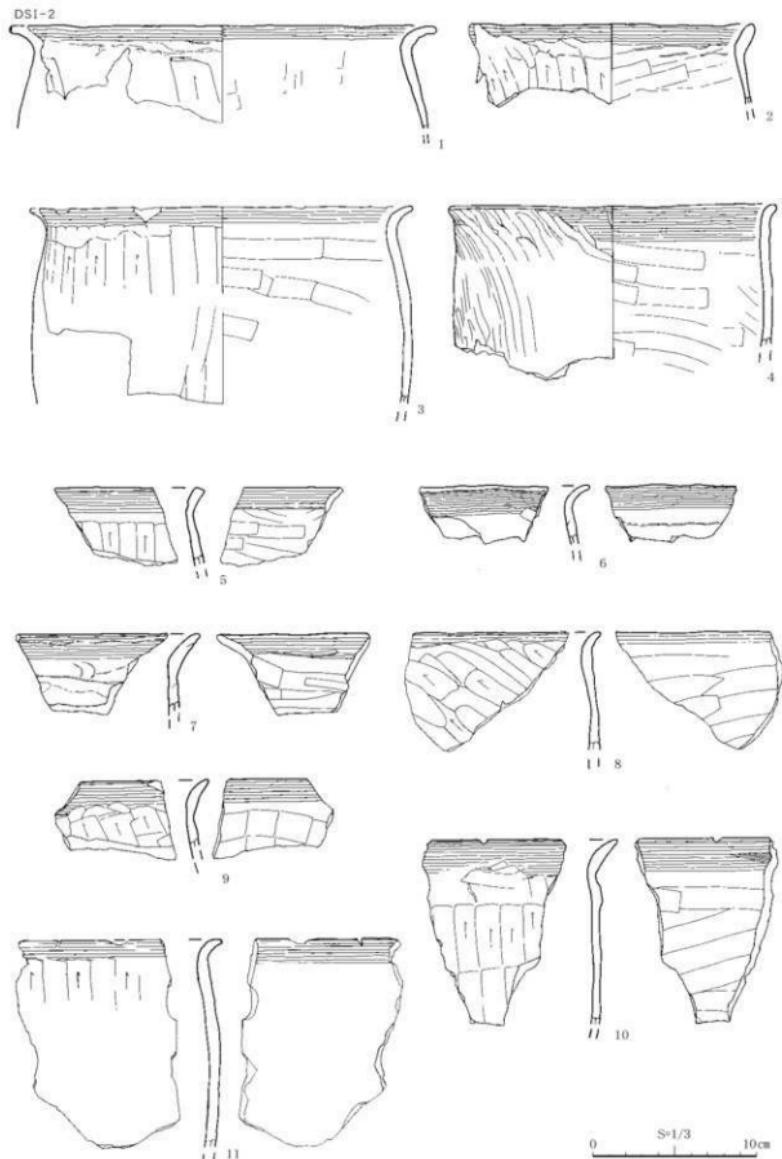


図147 D区竪穴住居跡出土遺物（2）

DSI-2

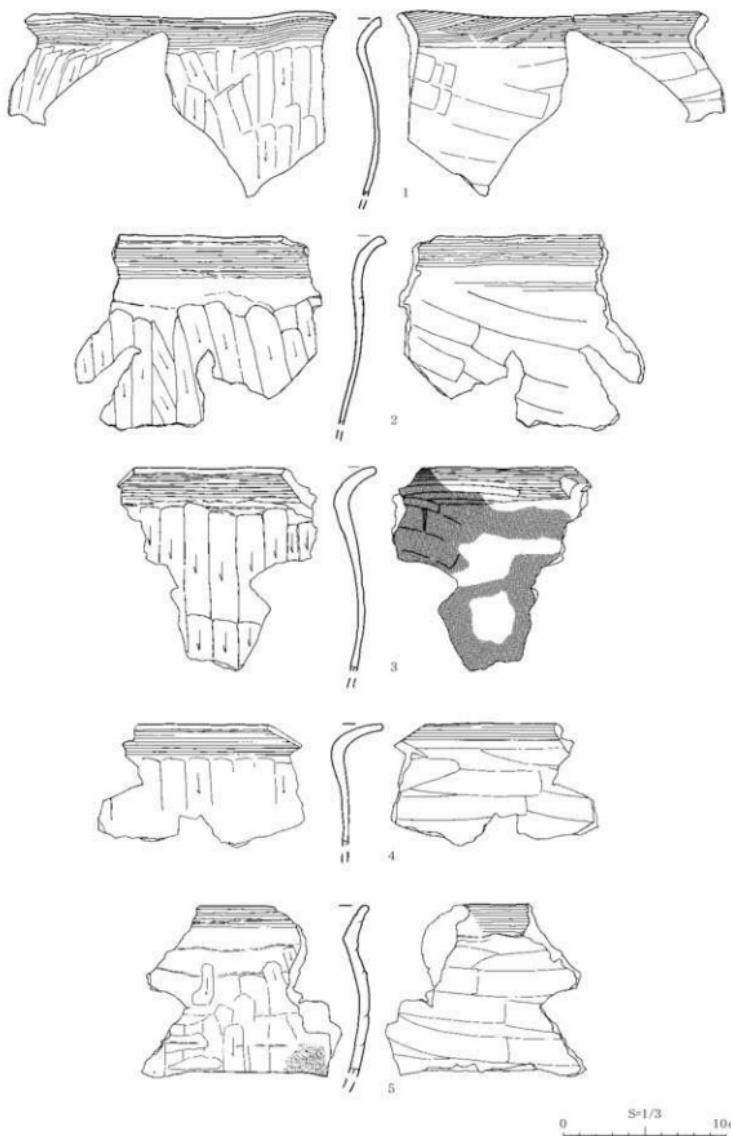


図148 D区竪穴住居跡出土遺物（3）

DSI-2

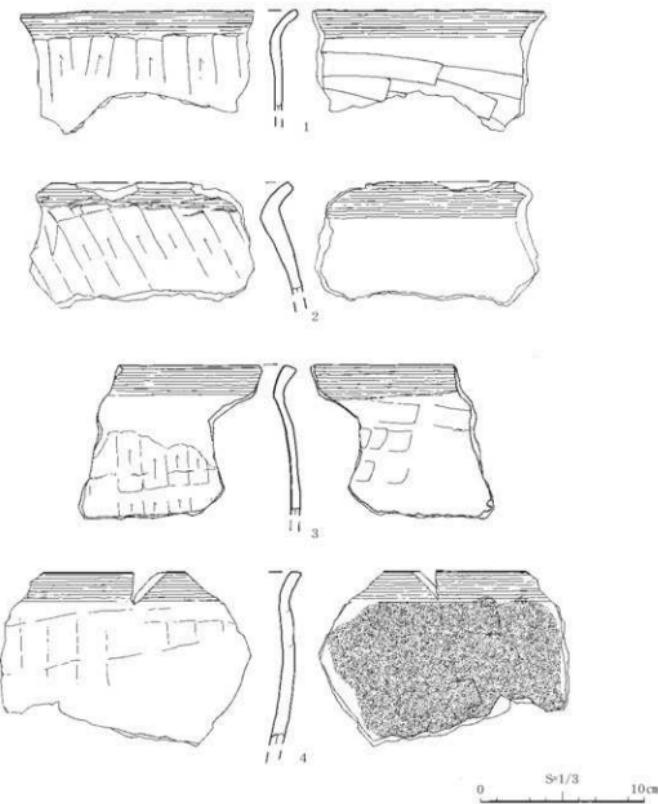


図149 D区竪穴住居跡出土遺物（4）

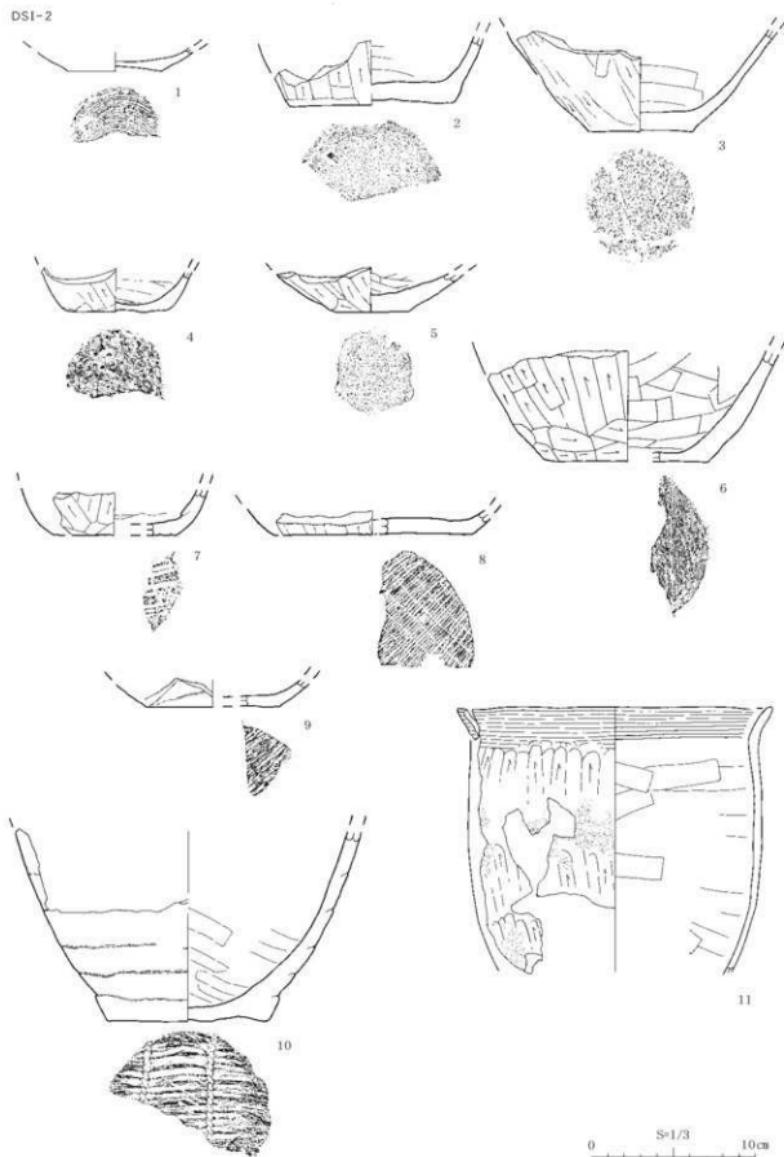


図150 D区竪穴住居跡出土遺物（5）

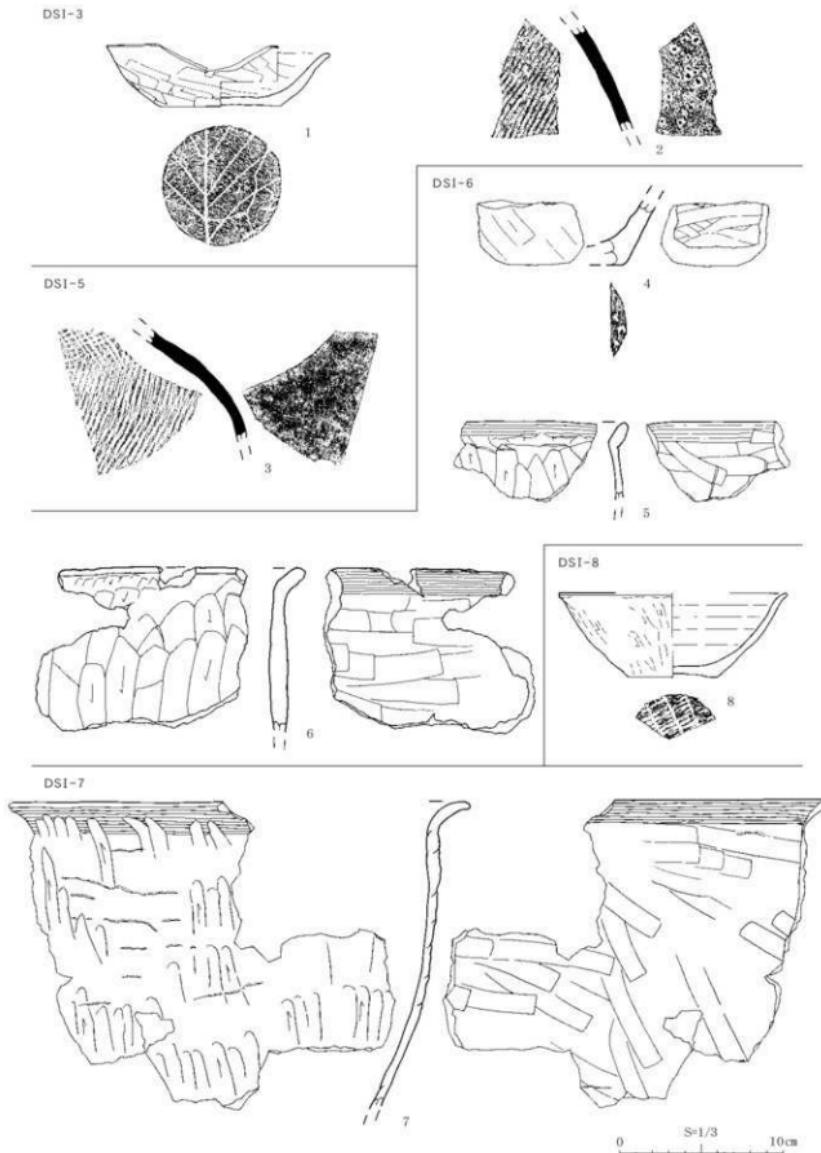


图151 D区竖穴住居跡出土遺物（6）・竖穴遺構出土遺物（1）

### 第3節 挖立柱建物跡・ピット

第21号掘立柱建物跡 (DSB-21) (図152)

【位置・確認】 I L-67グリッド他に位置する。

【重複】 第4号竪穴遺構と重複する。本遺構が新しい可能性が高い。

【構造・規模】 構造は桁行3間(6.825~6.851mm)、梁間1間(2.445~2.280mm)を測る建物跡である。総計6基の柱穴を検出した。主軸方位はN-4.6°-Eである。

【柱穴】 柱穴の規模は長径20.0~72.0cm、短径18.0~61.0cm、深さは8.0~28.4cmを測る。柱痕を検出したピットはない。

【柱間寸法】 桁行間で1m62cm~2m64cm、梁行間で2m28cm~2m45cmを測る。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 遺構の重複関係から、中世段階の可能性が高い。

(笹森)

ピット (DP) (図152・付図2)

D区で検出されたピットは総計57基である。その内第21号掘立柱建物跡を構成する5基を除くと52基となる。I I -67グリッド他に位置し、大部分が微高地部分から確認されている。他遺構確認面にも存在していた可能性が高いが、検出することはできなかった。平面形はほぼ円形を呈している。径10~74cm、深さは4~43cmを測る。柱痕が検出されたピットはない。遺物はピット10とピット11より土師器环の体~底部片が1点ずつ出土している。出土遺物から、古代~中世にかけて造られたピットと考えられるが、第21号掘立柱建物跡以外は、建物を構成するような検出状況ではない。調査区の広さも影響している可能性がある。

(笹森)

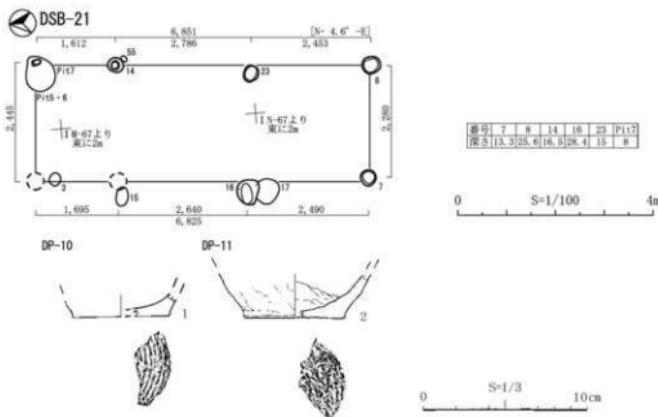


図152 D区掘立柱建物跡・ピット出土遺物

## 第4節 土坑

### 第1号土坑（D SK-1）（図153）

【位置・確認】 I Q-67グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】認められない。

【形態・規模】 平面形は隅丸の方形を呈している。長軸86cm、短軸80cm、深さは9cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦に造られている。

【堆積土】 1層の単層である。暗褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 詳細については不明である。

(笹森)

### 第2号土坑（D SK-2）（図153）

【位置・確認】 I L・M-66・67グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】 第15号ピットと重複している。新旧関係は本造構が古い。

【形態・規模】 全長は192cm、深さは18cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面から急に立ち上がっている。底面は平坦である。

【堆積土】 1層の単層である。暗褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 土坑と呼称したが、連続したピットの可能性が高い。詳細については不明である。

(笹森)

### 第3号土坑（D SK-3）（図153）

【位置・確認】 I Q-68グリッドに位置している。第2号濠跡Aの検出面で確認した。

【重複】 第2号濠跡Aと重複している。本造構が新しい。

【形態・規模】 平面形は隅丸の長方形を呈する。長軸82cm、短軸50cm、深さは26cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面から急に立ち上がっている。底面はやや傾斜を持って造られている。

【堆積土】 1層の単層である。暗褐色土を主体とした人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 詳細については不明であるが造構の重複関係から、中世以降の可能性が高い。

(笹森)

### 第4号土坑（D SK-4）（図153）

【位置・確認】 I K-67グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】 第31号ピットと重複している。本造構が古い。

【形態・規模】 東側が調査区域外に延びている。平面形は不整な円形を呈するものと思われる。短径は

78cm、深さは16cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から北西方向ではやや急に、南東方向では緩やかに立ち上がっている。底面は北西方向が1段低くなっている。

【堆積土】3層に分層できた。褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが遺構の重複関係から、古代～中世の可能性が高い。

(笹森)

#### 第5号土坑（D SK-5）（図153）

【位置・確認】IN-66・67グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。

【重複】第2号溝跡・第24～26、28号ピットと重複している。いずれの遺構よりも本遺構が古い。

【形態・規模】西側が調査区外に延びており全容を伺い知ることはできない。深さは30cmを測る。

【壁・底面】壁は底面からやや急に立ち上がっている。底面は凹凸が著しい。

【堆積土】3層に分層できた。褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが遺構の重複関係から、古代～中世の可能性が高い。

(笹森)

#### 第6号土坑（D SK-6）（図160）

【位置・確認】IP-68グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層中で確認した。東側の大半が調査区外に存在する。

【重複】第5号溝跡と重複している。土層断面の観察から、本遺構が古いことが確認できる。

【形態・規模】前述しているように全容を伺い知ることはできない。平面は円形を呈するものと思われる。確認できた長さは上面で172cm、深さは30cmを測る。

【壁・底面】壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦に造られている。

【堆積土】3層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが遺構の重複関係から、古代～中世の可能性が高い。

(笹森)

#### 第7号土坑（D SK-7）（図154）

【位置・確認】II・IJ-66グリッド他に位置している。第2号竪穴住居跡掘り方精査時に確認した。西側の約半分が調査区外に存在する。

【重複】第1・2号竪穴住居跡及び第8号土坑と重複している。土層断面の観察から、第1・2号竪穴住居跡より古いことが確認できる。第8号土坑との関係は不明であるが同時存在の可能性もある。

【形態・規模】前述しているように全容を伺い知ることはできない。平面形はやや不整な円形を呈する

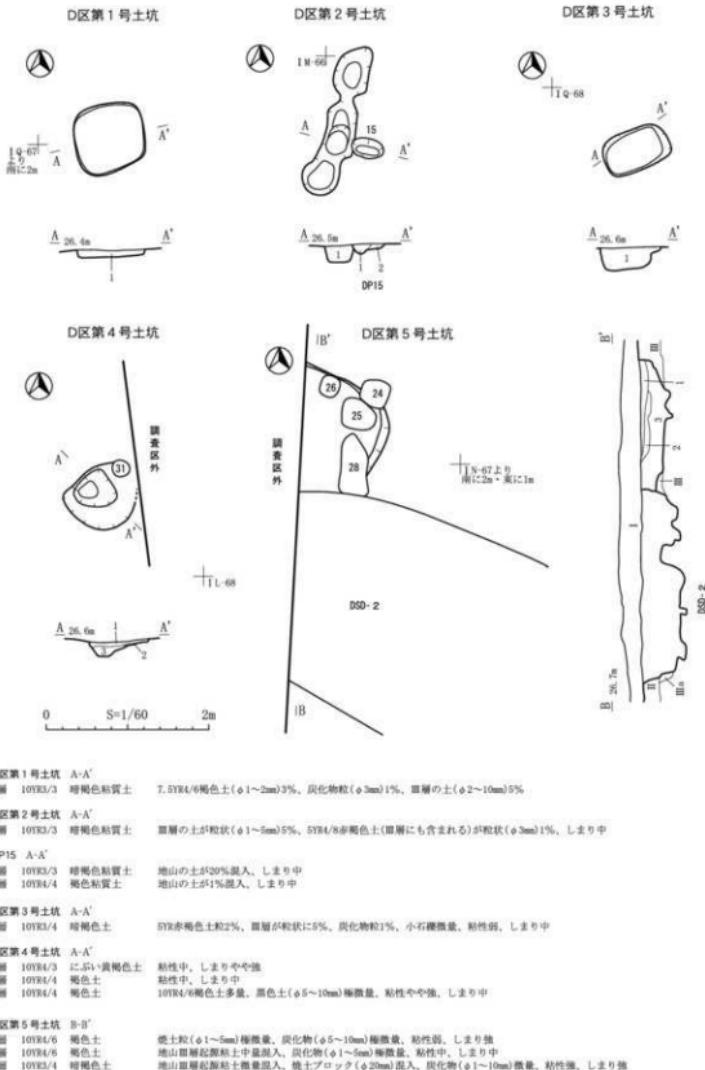


図153 D区土坑 (1)

ものと思われる。確認できた長軸は上面で200cm、深さは約30cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は平坦に造られている。

【堆積土】1層の単層である。黒褐色土を主体とし炭化物や焼土粒が混入する人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが、平安時代の可能性が高い。竪穴住居跡に付随する土坑の可能性も考えられる。

(笹森)

#### 第8号土坑（D SK-8）（図154）

【位置・確認】II-67グリッド他に位置している。第7・8号竪穴住居跡掘り方精査時に確認した。東側の約半分が調査区外に存在する。

【重複】第7・8号竪穴住居跡及び第7号土坑と重複している。土層断面の観察から、第7・8号竪穴住居跡より古いことが確認できる。第7号土坑との関係は不明であるが同時存在の可能性もある。

【形態・規模】前述しているように全容を伺い知ることはできない。平面形はやや不整な円形を呈するものと思われる。確認できた長軸は上面で190cm、深さは約20cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は平坦に造られている。

【堆積土】1層の単層である。にぶい黄褐色土が主体で、平成2年調査時の基本層序Ⅲ層に由来する白色粘土を含む人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明であるが、平安時代の可能性が高い。竪穴住居跡に付随する土坑の可能性も考えられる。

(笹森)

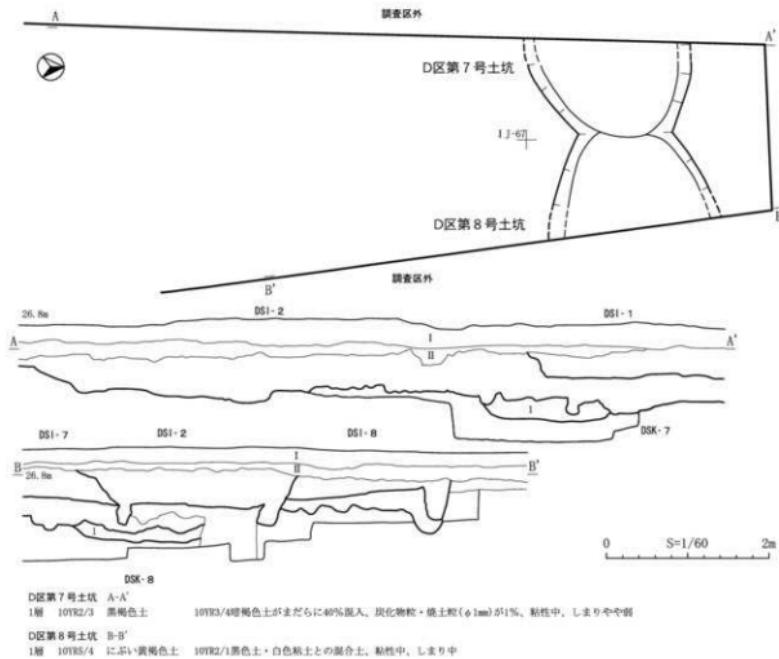


図154 D区土坑（2）

## 第5節 井戸跡

第1号井戸跡 (DSE-1) (図155)

【位置・確認】 IS・T-56グリッドに位置している。基本層序第C1X層上面で確認した。

【重複】認められないが第2号井戸跡に近接する。

【形態・規模】平面形は円形を呈する。上面径110cm、底面径66~80cm、深さは92cmを測る。

【壁・底面】基本層序第C1X層及び第C1X層以下を壁や底面としている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり開口部でやや開く。底面は起伏を持ちながら南側にやや傾斜している。

【堆積土】2層に分層できた。黒色及び褐灰色土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中から須恵器片と砥石が出土している。図示できた遺物は1点。図155-1は須恵器甕の口縁~肩部片。推定口径は30.6cmを測る。外面には格子状の敲き目が施されている。砥石は砥面を4面有するものであり、炭化物が一部に付着するものである。中砥若しくは仕上げ砥と思われる。掲載はしていない。

【小結】形態や出土遺物より、平安時代の井戸跡と考えられる。

(笹森)

第2号井戸跡 (DSE-2) (図155・156・157)

【位置・確認】 IT-56グリッドに位置している。基本層序第C1X層上面で確認した。

【重複】認められないが第1号井戸跡に近接する。

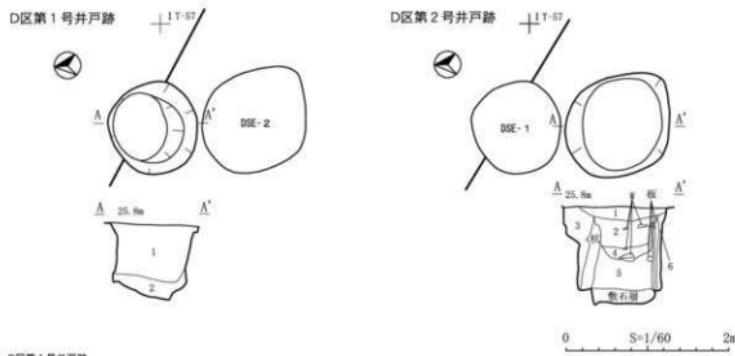
【形態・規模】平面形はやや不整な円形を呈する。上面径128~147cm、底面径97~115cm、深さは102cmを測る。本遺構は内側から井戸枠が検出されている。井戸枠は木組方形縦板組隅柱横桟型と呼ばれているものである。四隅に柱を立て、横桟を隅柱に穿けた隣穴に差し込み固定している。横桟の外側に縦板を差し込み土砂の流入を防ぐとともに埋め土の土圧によって固定していたものと思われる。【壁・底面】基本層序第C1X層及びそれ以下の層を壁や底面としている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり開口部でやや開く。底面には厚さ15~20cm程に径が数cm程の玉砂利が平坦に敷き詰められていた。湧水をさらに浄化するための施設と考えられる。

【堆積土】縦板の外側を含め6層に分層できた。縦板外側の埋め土以外は黒褐色土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中から中世のかわらけ(土師器皿)が出土している(図155-2)。図157-3は斎串、或いは木筒状の形をした木製品。完形品で長さ47.6cm、幅3.8cm、厚さは0.6cmを測り、比較的大型のものである。また、底面直上の堆積土サンプル(248g)より、イネ、アサを主体とする植物遺体が検出されている(第9章第17節)。

【小結】形態や出土遺物より、中世の井戸跡と考えられる。隅柱3の丸木材(図155-2)と井戸枠21の縦板材(図156-6)については放射性炭素年代測定を行っており、隅柱3は $830 \pm 30$ yrBP、井戸枠21は $890 \pm 30$ yrBPという結果が得られている。詳細については第9章第3節に掲載している。

(笹森)



D区第1号井戸跡

1層 10YR2/1 黒色土 10YR4/1純灰色土多量、炭化物(φ1~20mm)微量、粘性弱、しまり中  
2層 10YR5/1 細灰色土 粘性弱、しまり中

D区第2号井戸跡

1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/2灰黄褐色土、10YR5/6黄褐色土多量、炭化物(φ1~10mm)微量、粘性弱、しまり強  
2層 10YR3/1 黑褐色土 10YR1.7/1黑色土多量、炭化物(φ1~25mm)微量、非常にソフト、有機質遺物多量に含む、粘性弱、しまりなし  
3層 10YR5/1 細灰色土 7.5YR2/1黑色土多量、粘性やや強、しまり中  
4層 10YR3/1 黑褐色土 10YR1.7/1黑色土多量、炭化物(φ1~25mm)微量、2層と同質だが厚真にて色調判断、粘性弱、しまり中  
5層 10YR2/2 黑褐色土 4層より細まった。やや明るい色調の粘土、粘性あり、しまりあり  
6層 10YR4/4 極灰色土 ローム多量、井戸壁込土、粘性あり、しまりあり

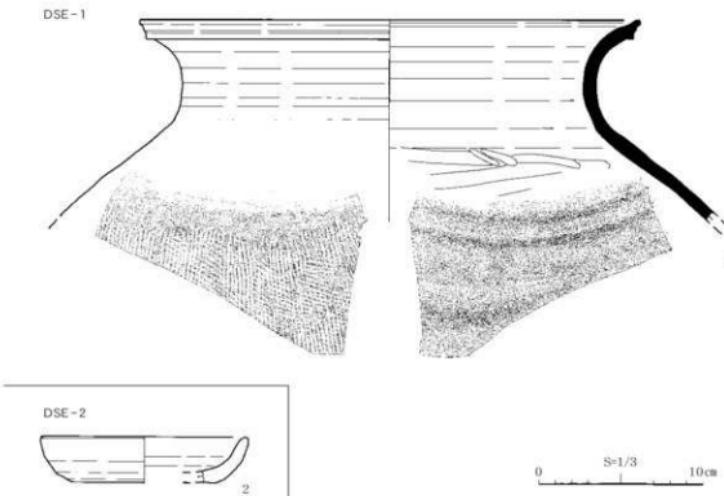


図155 D区井戸跡・出土遺物（1）

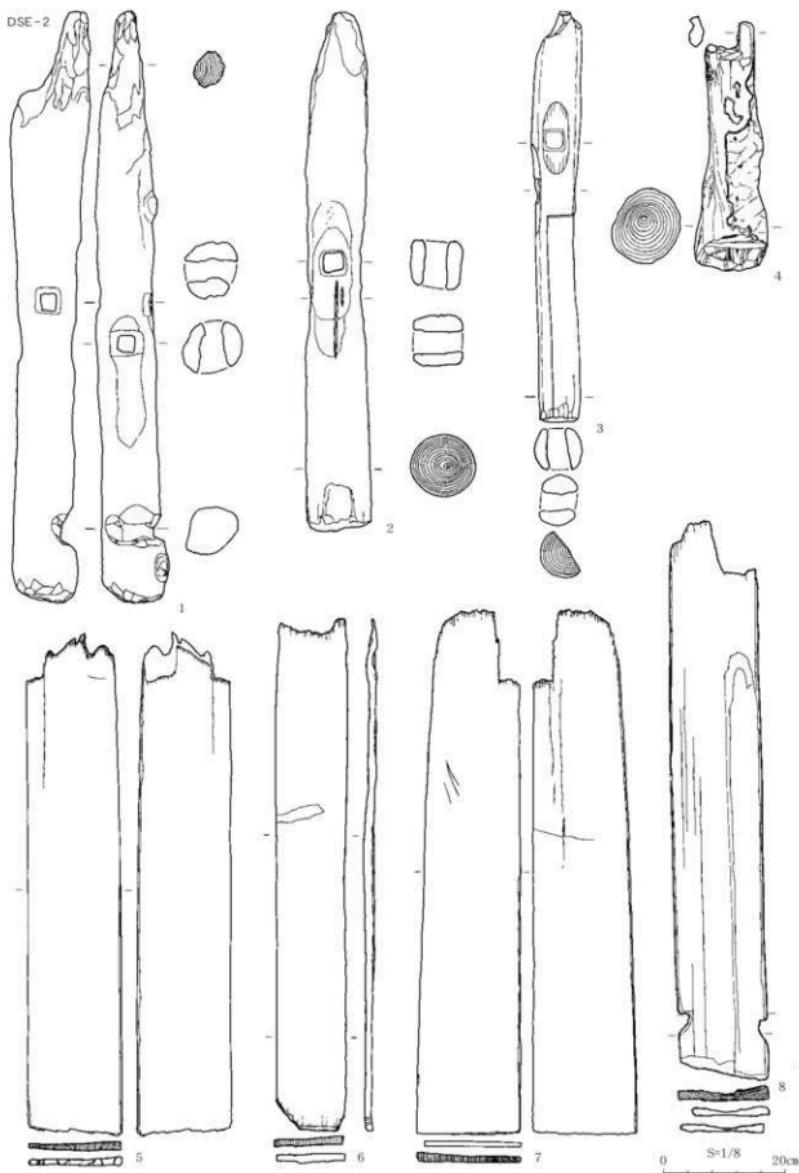


図156 D区井戸跡出土遺物（2）

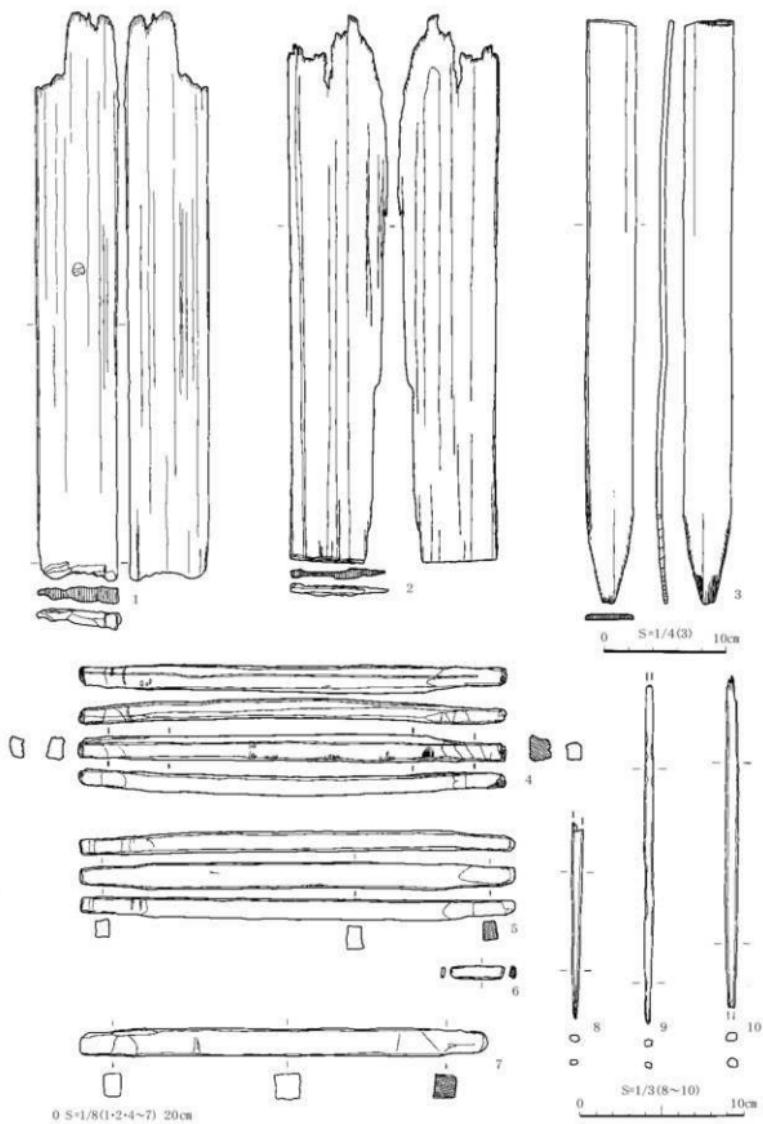


図157 D区井戸跡出土遺物（3）

## 第6節 溝跡

### 第1号溝跡（DSD-1）（図158）

【位置・確認】 IL-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第8・23号ピットと重複している。本遺構が古いことが確認できた。

【形態・規模】 中央部付近で逆L字状に屈曲する。上面幅110～166cm、底面幅40～82cm、深さは50～86cmを測る。

【壁・底面】 基本層序第Ⅲ・Ⅳ・V・VI層を壁や底面としている。壁は底面から途中に段を有しながらやや急に立ち上がっている。底面は掲底状を呈し、やや起伏を持っている。

【堆積土】 13層に分層できた。にぶい黄褐色土を主体として自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中から土師器・須恵器片・土製品・石製品が出土している。図158-7は土製紡錘車。断面の形状は長方形である。図158-8は土玉。約半分を欠失する。孔は1孔認められ貫通している。砥石は砥面を4面有するものであり、石質から仕上げ砥と思われる。掲載はしていない。

【小結】 溝跡と呼称したが形状や堆積土の状況から判断すると風倒木痕の可能性が高い。

(笹森)

### 第2号溝跡（DSD-2）（図159）

【位置・確認】 IO-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。平成2年調査時の遺構番号53と同一の遺構と思われる。

【重複】 第5号土坑及び第28号ピットと重複している。堆積土の観察から本遺構が両遺構より新しいことが確認できた。

【形態・規模】 北西方向から南東方向に延び、東側は調査区外まで延びる。確認できた全長は約7.5m、上面幅は約3mを測る。

【壁・底面】 基本層序第Ⅲ・Ⅳ層を壁・底面としている。壁は底面からやや急に立ち上がっている。断面の形状は不整で、底面は平面図では表現ができない程凹凸が激しい。

【堆積土】 3～6層に分層できた。第Ⅲ層由来の白色粘土を主体とし、全体的に人為堆積の様相を呈している。

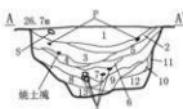
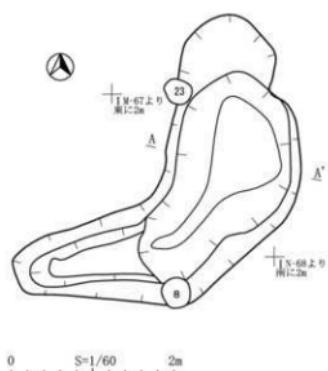
【出土遺物】 堆積土上層より、近世磁器破片が1点出土している。肥前産染付碗であり、掲載はしていない。

【小結】 詳細については不明であるが、4～5列に何かが作付けされていた痕跡、烟跡の可能性が高いものと考えられる

(笹森)

### 第3号溝跡（DSD-3）（図160）

【位置・確認】 IO-67グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。



## D区第1号溝跡

1層	10YR4/4	褐色粘土	10YR6/4に似る、黄褐色粘土(φ10~50mm)少量、他土(φ2~10mm)微量、浮石(φ3~10mm)極微量、炭化物(φ1~5mm)微量、粘性中、しまり強
2層	10YR4/3	に似る黄褐色粘土	10YR6/3(2.5m)に似る黄褐色粘土(φ5~30mm)微量、浮石(φ2~5mm)微量、炭化物(φ1~3mm)極微量、他土(φ1~3mm)微量、粘性強
3層	10YR4/3	に似る黄褐色土	10YR4/4褐色土(φ5~10mm)少量、5.5mに似る黄褐色粘土(φ10~30mm)少量、7.5mに似る黄褐色粘土(φ5~20mm)微量、他土(φ1~3mm)微量、炭化物(φ5~15mm)微量、他土(φ1~3mm)微量、粘性中、しまり強
4層	10YR4/3	に似る黄褐色土	10YR6/4(4.5m)に似る黄褐色粘土(φ10~35mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、他土(φ1~3mm)微量、粘性中、しまり強
5層	10YR4/4	褐色粘土	7.5mに似る黄褐色土(φ5~15mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、他土(φ1~5mm)微量、粘性やや強、しまり強
6層	10YR4/3	に似る黄褐色土	7.5mに似る黄褐色土(φ5~20mm)微量、炭化物(φ1~3mm)微量、他土(φ1~10mm)微量、粘性中、しまり強
7層	10YR4/3	に似る黄褐色土	10YR6/3(3.5m)に似る黄褐色粘土多量、7.5mに似る黄褐色粘土(φ1~20mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、他土(φ1~5mm)微量、粘性中、しまり強
8層	10YR4/3	に似る黄褐色粘土	2.5mに似る黄褐色土(φ5~15mm)微量、10YR6/4に似る黄褐色粘土(φ5~20mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、粘性強、しまり強
9層	10YR4/2	灰黃褐色粘土	10YR6/4(4.5m)に似る黄褐色粘土(φ5~20mm)少量、10YR6/6(8m)に似る黄褐色土(φ5~15mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、他土(φ2~5mm)微量、粘性強、しまり強
10層	10YR4/4	褐色粘土	10YR6/2(灰黃褐色粘土)に似る、炭化物(φ1~15mm)微量、粘性強、しまり強
11層	10YR5/2	灰黃褐色粘土	Ⅲ層小塊状、粘性強、しまり強
12層	10YR4/2	灰黃褐色粘土	10YR6/3(3.5m)に似る黄褐色粘土(φ5~20mm)微量、10YR6/6(8m)に似る黄褐色土(φ5~10mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量、他土(φ1~5mm)微量、粘性強、しまり強
13層	10YR4/3	に似る黄褐色粘土	10YR6/6(褐色粘土)に似る、炭化物(φ1~5mm)微量、粘性強、しまり強

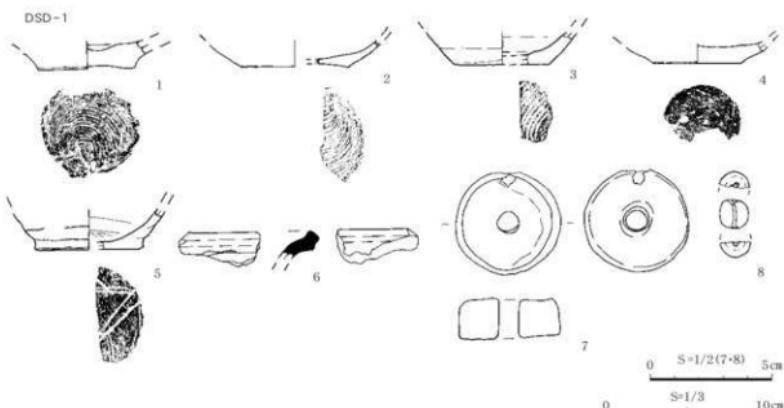


図158 D区溝跡 (1)・出土遺物 (1)

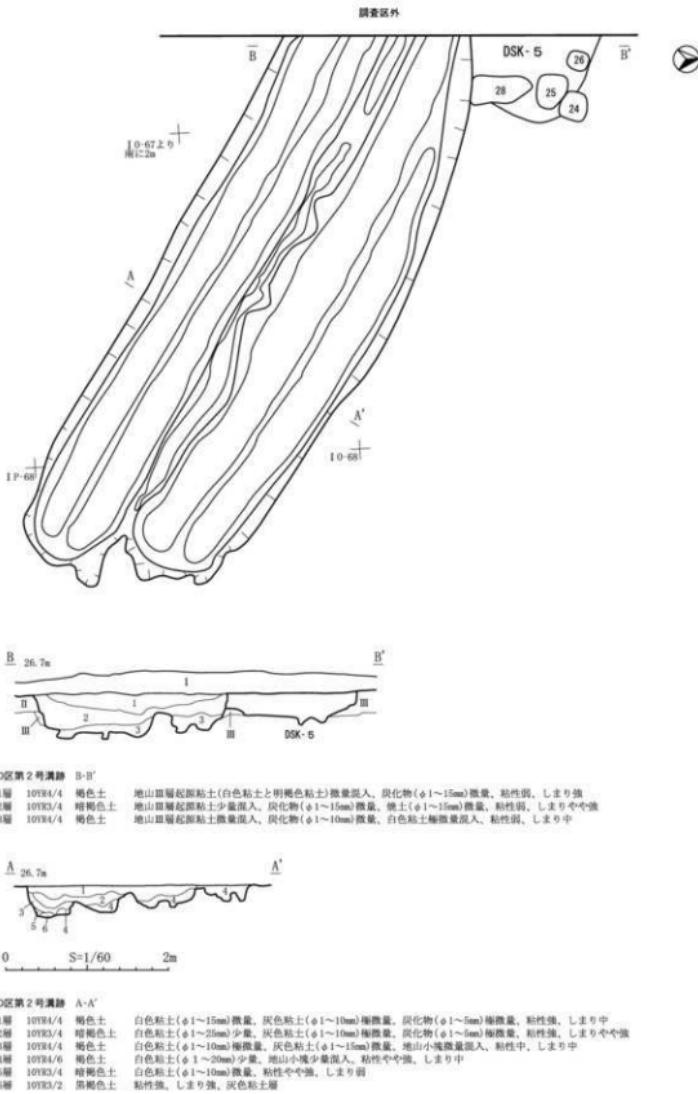


図159 D区溝跡 (2)

【重複】認められない。

【形態・規模】東西方向に延び、東側は調査区外まで延びる。確認できた全長は1.6m、上面幅は50cm、深さは34cmを測る。

【壁・底面】基本層序第Ⅲ・Ⅳ層を壁・底面としている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦に造られている。

【堆積土】2層に分層できた。第Ⅲ層が主体でブロック状に混入し人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明である。

(笹森)

#### 第4号溝跡（D S D - 4）(図160)

【位置・確認】IP-68グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。

【重複】第5号溝跡及び第45・46号ピットと重複している。検出状況から、本遺構が全ての遺構より古いことが確認できた。

【形態・規模】南西方向から北東方向に延び、北東側が第5号溝跡と重複する。確認できた全長は182cm、上面幅は72cm、深さは10cmを測る。

【壁・底面】基本層序第Ⅲ層を壁・底面としている。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が著しい。

【堆積土】1層の単層である。褐色土主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明である。

(笹森)

#### 第5号溝跡（D S D - 5）(図160)

【位置・確認】IP-68グリッドに位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。

【重複】第4号溝跡、第6号土坑と重複している。堆積土の観察から、新旧関係は本遺構が全ての遺構より新しいものと考えられる。

【形態・規模】東側が調査区外に延びている。確認できた全長は150cm、上面幅は160cm、深さは30cmを測る。

【壁・底面】基本層序第Ⅲ層を壁・底面としている。壁は底面からやや急に立ち上がっている。底面は比較的平坦である。

【堆積土】2層に分層できた。褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細については不明である。

(笹森)

## 第6号溝跡（D S D - 6）（図161）

【位置・確認】 II F - 65グリッド他に位置している。調査区の西及び南の壁断面で確認した。

【重複】認められない。

【形態・規模】 北北西方向から南南東方向に延び、いずれも調査区外まで延びる。確認できた推定全長は約11m、推定上面幅は170～220cm、深さは約50cmを測る。上面で数本の杭が列状に並んで確認されている。

【壁・底面】 D区低地基本層序第D I d層を壁・底面としている。上面は流路により流されているためか判然としない。壁は底面から緩やかに立ち上がりっているものと思われる。断面の形状は鍋底状を呈している。

【堆積土】 2～4層に分層できた。黒褐色粘土主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 図示できるような遺物は出土していない。

【小結】 詳細については不明であるが、杭を伴う検出面等の状況から、圃場整備前に造られた水路跡の可能性が高い。

(笹森)

## 第7号溝跡（D S D - 7）（図162・163）

【位置・確認】 II M - 74グリッド他に位置している。

【重複】認められない。

【形態・規模】 確認できた全長は9m20cm、上面幅110～144cm、底面幅50～100cm、深さ100cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位で開口部に向かいやや開く。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 12層に分層できた。全体的に鉄分の混入が顕著に見られる。黒褐色の砂泥質土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土から土師器・須恵器・弥生土器の細片、上層堆積土から、中世から近現代の陶磁器破片が出土している。中世陶磁器は珠洲擂鉢の底部から体部破片であり、14世紀から15世紀にかけてのものである。近世陶磁器は一重網目文の染付や銅綠釉の陶器破片である。掲載はしていない。底面付近から木製品が出土している。

【小結】 溝跡と呼称したが、堆積土の状況から旧河道の流路と考えられる。

(笹森)

## 第8号溝跡（D S D - 8）（図162・163）

【位置・確認】 II M - 75グリッド他に位置している。崩落の危険があったため一部は精査していない。

【重複】 第9号溝跡と重複している。堆積土の観察から本遺構が新しい。

【形態・規模】 上面幅は160～180cm、深さは40cm程である。

【壁・底面】 壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は両脇から中央に向かい緩やかな傾斜を持つ。

【堆積土】 3層に分層できた。黒褐色の砂泥質土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中から木製品が出土している。

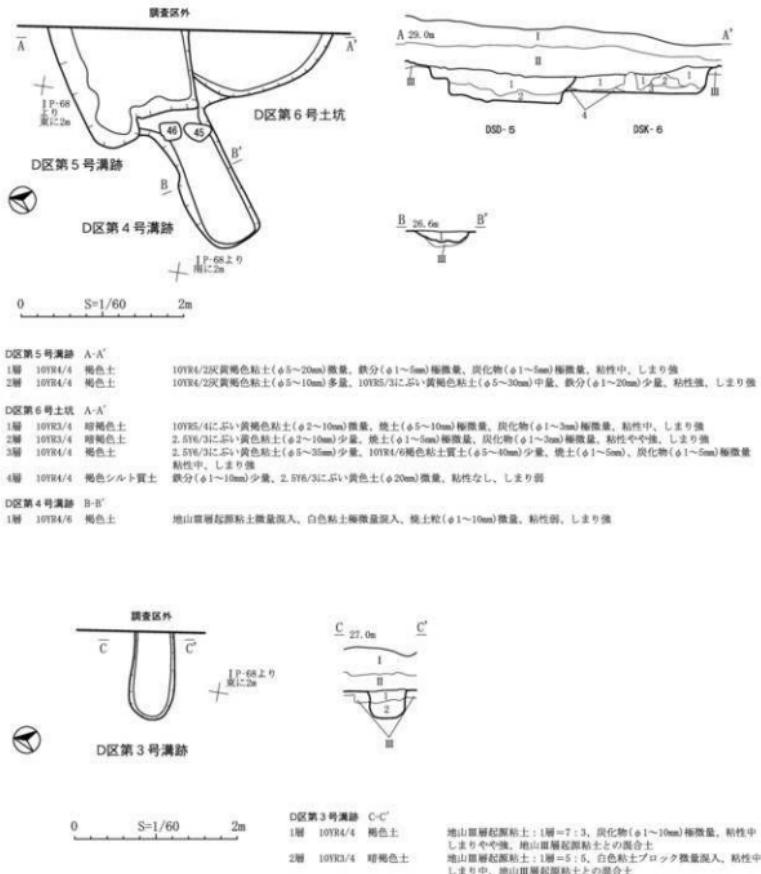


図160 D区溝跡 (3)・土坑 (3)

【小結】溝跡と呼称したが、堆積土の状況から旧河道の流路と考えられる。

(笹森)

#### 第9号溝跡 (D S D - 9) (図162)

【位置・確認】II M-75グリッド他に位置している。

【重複】第8・11号溝跡と重複している。新旧関係は両遺構より古いたことが確認できる。

【形態・規模】確認できた上面幅は170~180cm、深さは40cmを測る。

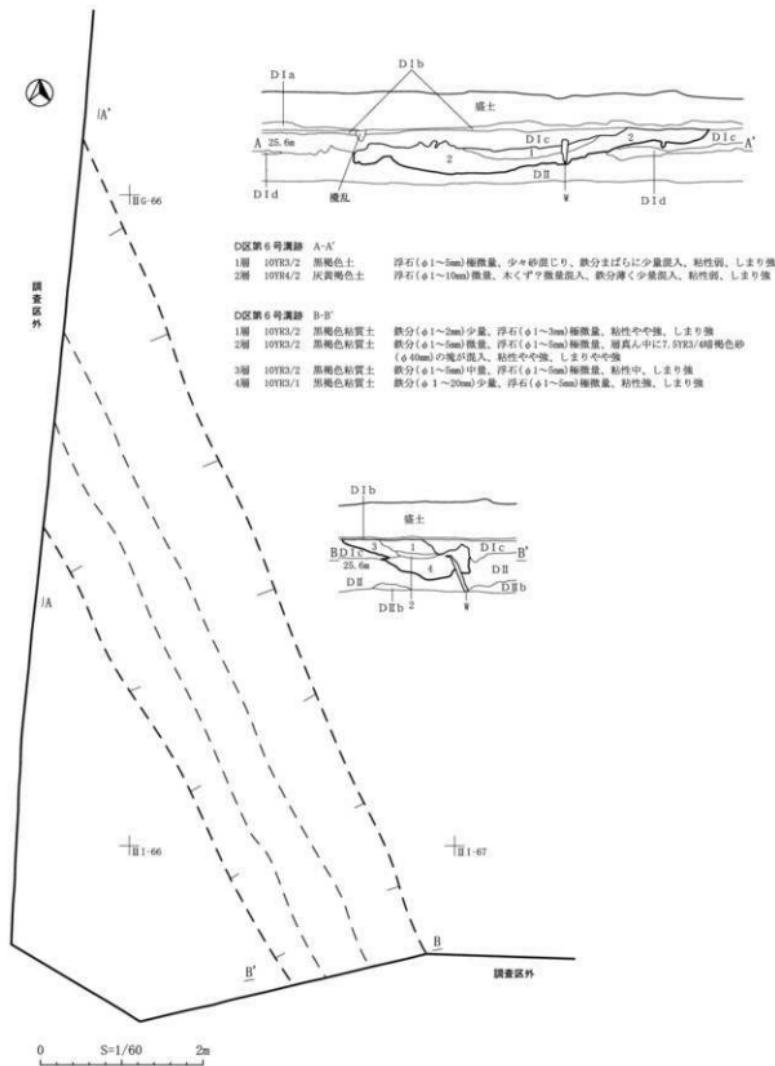


図161 D区溝跡 (4)

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は両脇から中央に向かい緩やかな傾斜を持つ。  
【堆積土】2層に分層できた。上層の水田に由来すると思われる鉄分が全体的に混入している。浮石を微量に含み自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】覆土上層からウシ・ウマ類の遊離歯片が出土している。

【小結】溝跡と呼称したが、堆積土の状況から旧河道の流路と考えられる。

(笹森)

第10号溝跡 欠番とした。

第11号溝跡 (D SD-11) (図162)

【位置・確認】II M-75グリッド他に位置している。

【重複】第9号溝跡と重複している。新旧関係は本造構が新しい。

【形態・規模】南側が調査区外に延びているため全容を窺い知ることはできない。北側も上面が削平されている。確認できた上面幅は416cm、底面幅280cm、深さは90cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】6層に分層できた。全体的に鉄分が混入している。砂泥層が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できるような遺物は出土していない。

【小結】溝跡と呼称したが、堆積土の状況から旧河道の流路と考えられる。

(笹森)

第12・13号溝跡 欠番とした。

第14号溝跡 (D SD-14) (図164)

【位置・確認】I S-66グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層で確認した。

【重複】他造構との重複は認められないが、本造構が東側に移動する形で新旧2時期あった可能性が高い。

【形態・規模】南北両端部を搅乱により欠失する。北西北西方向から南南東方向に延び、いずれも調査区城外まで延びていたものと思われる。確認できた全長は約12m、新しい溝跡Aの上面幅は90~100cm、底面幅は50~60cm、深さは14~20cmを測る。

【壁・底面】平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層を壁・底面としている。壁は底面から緩やかに立ち上がっているものと思われる。断面の形状は新旧いずれも逆台形状を呈している。

【堆積土】新しい溝跡Aは4層、古い溝跡Bは3層に分層できた。いずれも自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土師器、須恵器の小片、数点の礫と磁器が出土している。磁器は龍泉窯系青磁碗で体部外面に線描きの蓮弁文を描く、15世紀末から16世紀にかけてのものである(図164-1)。また、掘方からウシ・ウマ類の遊離歯片が出土している。

【小結】古代～中世にかけての区画溝とも考えられるが、詳細については不明である。

(笹森)

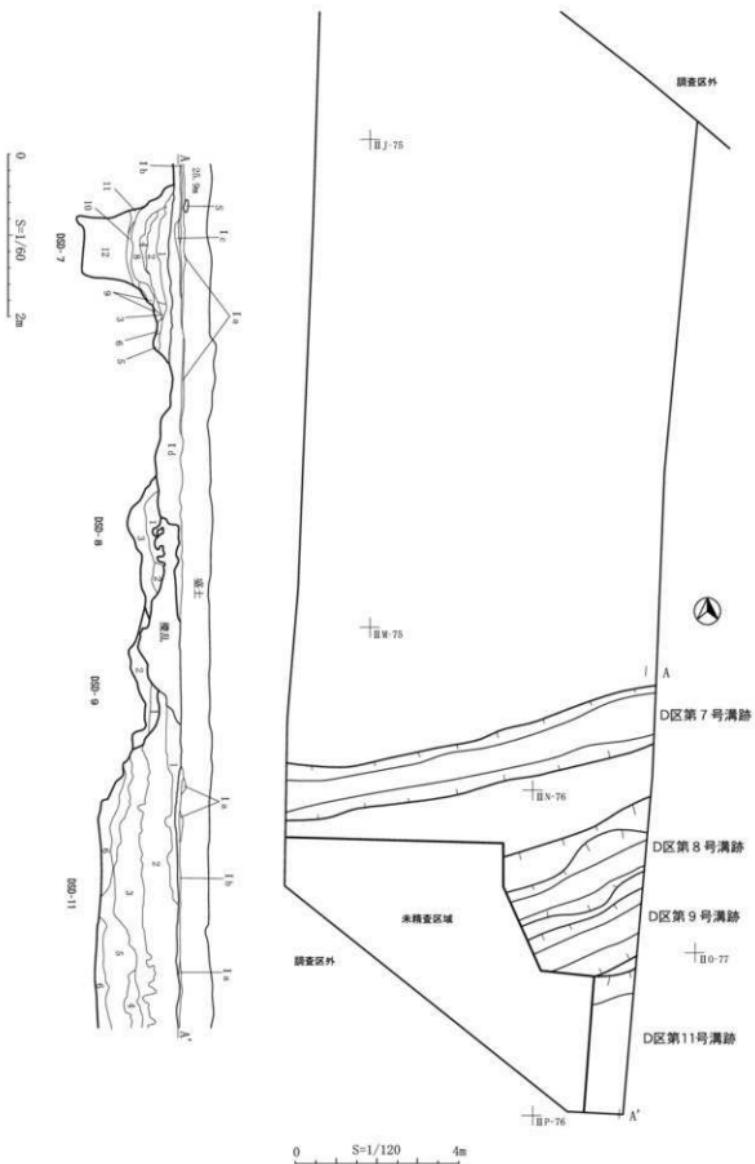


図162 D区溝跡 (5)

## D区第7号溝跡

1層	10Y3/2	黒褐色土	炭化物(φ1~10mm)極微量、浮石(φ1~10mm)極微量、鉄分まばらに少し混入。粘土含む、粘性弱。しまり強
2層	10Y3/2	黒褐色土	炭化物(φ1~2mm)極微量、浮石(φ1~15mm)微量、鉄分まばらにやや多量混入、粘性やや中。しまりやや強
3層	10Y3/2	黒褐色土	浮石(φ1~10mm)微量、小礫多量混入、粘性弱。しまり強
4層	10Y3/2	黒褐色土	炭化物(φ1~30mm)微量、鉄分微量混入、粘性やや強。しまり中
5層	10Y3/1	黒褐色土	浮石(φ1~20mm)微量、炭化物(φ1~10mm)微量、鉄分少量、鉄分少量混入、粘性弱。しまり強
6層	2.5Y3/1	黒褐色土	浮石(φ1~5mm)微量、鉄分微量混入、砂混じり、粘性弱。しまり強
7層	7.5Y3/1	黒色土	浮石(φ1~2mm)微量、鉄分微量混入、砂混じり、粘性弱。しまり強
8層	7.5Y3/2	オリーブ黒色土	浮石(φ1~20mm)微量、炭化物(φ1~10mm)微量、鉄分少量、鉄分少量混入、砂混じり、粘性弱。しまり強
9層	7.5Y3/1	黒色土	木片微量混入、粘性強。しまり弱
10層	2.5Y3/1	黒色土	木片微量混入、粘性強。しまり弱
11層	2.5Y3/1	黒褐色土	浮石(φ1~5mm)極微量、木片微量混入、粘性強。しまり中
12層	10Y3/1	黒褐色土	砂層と泥層の重なっている層

## D区第8号溝跡

1層	10Y3/2	黒褐色土	浮石(φ1~5mm)極微量、ローム(φ1~5mm)極微量、褐色粘土微量混入。鉄分中量混入、粘性中。しまり強
2層	2.5Y3/2	黒褐色土	浮石(φ1~5mm)微量、褐色粘土少量、鉄分少量、粘性中。しまり強
3層	10Y3/2	沈黙褐色土	浮石(φ1~5mm)微量、粘性強。しまり中

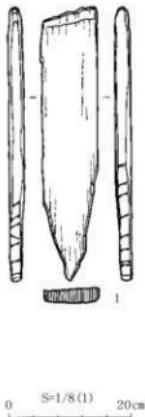
## D区第9号溝跡

1層	10Y3/2	黒褐色土	鉄分微量混入。浮石(φ1~3mm)極微量、粘性やや強。しまりやや強
2層	10Y3/1	黒色土	鉄分微量混入。浮石(φ1~5mm)極微量、粘性強。しまりやや強、粘土質土。

## D区第11号溝跡

1層	10Y3/1	褐色土	浮石(φ1~25mm)極微量、鉄分少量、粘性中。しまり強
2層	10Y3/2	灰黄褐色土	浮石(φ1~10mm)極微量、炭化物(φ1~5mm)微量、鉄分微量、粘性弱。しまり強
3層	10Y3/2	黒褐色土	浮石(φ1~10mm)極微量、鉄分少量、多量の砂混入、粘性弱。しまり中、多量の砂混じりの層
4層	5Y3/1	オリーブ黒色土	浮石(φ1~5mm)極微量、鉄分中量、中量の砂混入、粘性弱。しまり弱。中量の砂混じりの層
5層	2.5Y3/2	黒褐色土	浮石(φ1~5mm)極微量、鉄分微量、多量の砂混入、粘性中。しまり弱、多量の砂混じりの層
6層	5Y3/1	オリーブ黒色土	大小繩多量混入。粘性なし。しまり強

DSD-7



DSD-8

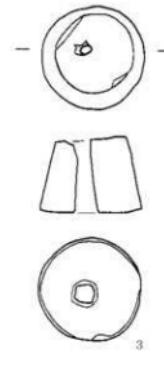
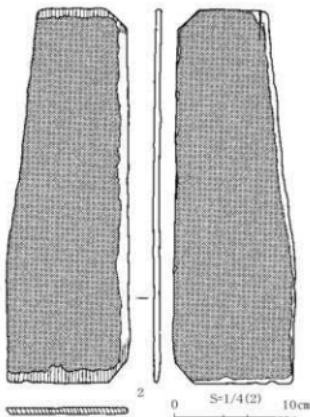


図163 D区溝跡出土遺物（2）

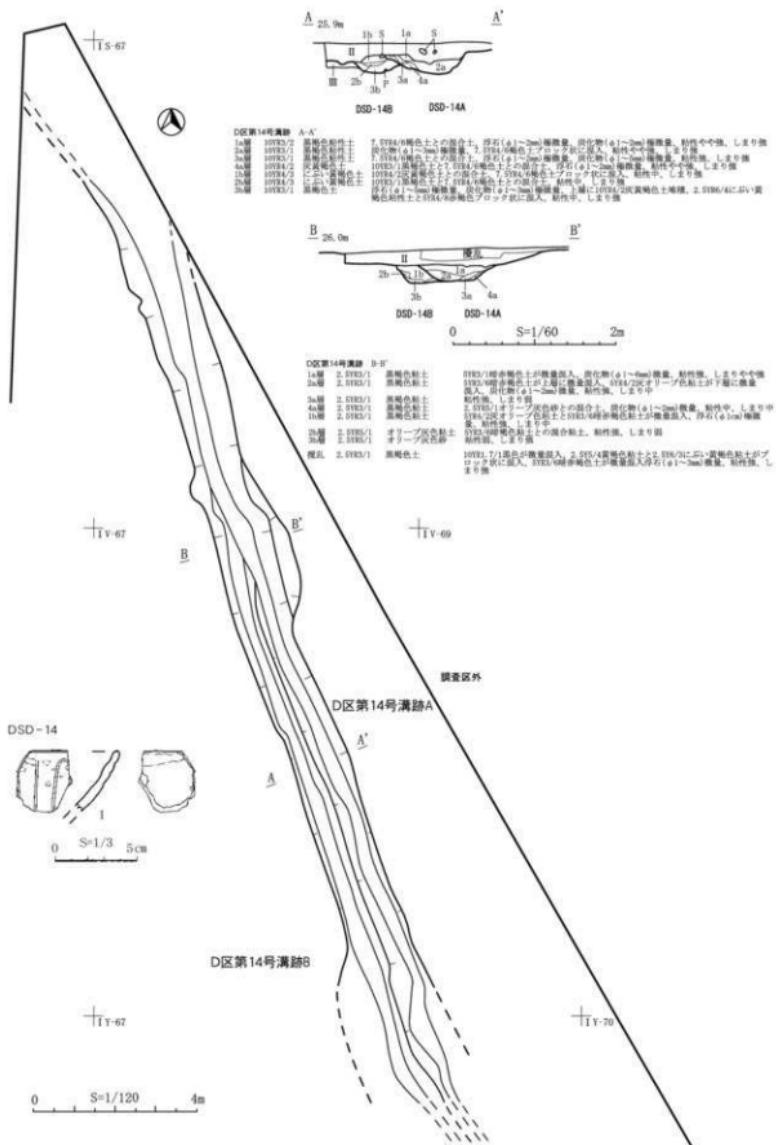


図164 D区溝跡（6）・出土遺物（3）

## 第7節 濁跡

### 第1号濁跡（DHR-1A）（図165・166・168）

【位置・確認】 I O-66グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。平面の位置関係から平成2年度調査時の遺構番号48と同一遺構と考えられる。

【重複】 第2号濁跡Aと重複している。新旧関係は本遺構が新しいことが土層の堆積状況から確認できた。第2号濁跡Aが埋没後に構築されており、両遺構間には比較的時間差があったものと考えられる。掘り込みは第2号濁跡Aよりも浅い。

【形態・規模】 平面形は幅広の溝状を呈する。上面幅300~320cm、底面幅170~180cm、深さは122~136cmを測る。北西部は平成2年度の調査区域に、南東部は平成19年度の調査予定区域に延びている。

【壁・底面】 壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦に造られている。底面幅が比較的広く、断面形は概ね逆台形状を呈している。

【ピット】 底面及び壁面からも検出されなかった。

【その他の施設】 検出されなかった。

【堆積土】 12~13層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。底部には泥の堆積層が認められ、水が溜まっていた時期もあったことが推定できる。

【出土遺物】 堆積土中から土師器・須恵器、中世から近現代の陶磁器片、板状の鉄製品が出土している。陶磁器片は上層から出土しており、隣接する第2号濁跡Aに所属する可能性もある。中世陶器は珠洲壺であり、胎土や外面叩目の状況から、13世紀前半代のものと思われる。掲載はしていない。

【小結】 堆積土中の出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。環濠を構成していた濁跡の可能性が高い。時期的には白頭山苦小牧火山灰降下後に構築されたものと思われる。 (笠森)

### 第2号濁跡A（DHR-1B）（図165・166・169・170）

【位置・確認】 I P-78グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。平成2年度調査時の遺構番号48と同一の遺構であると思われる。

【重複】 第5号竪穴遺構、第1号濁跡、第3号土坑、第1・2号性格不明遺構と重複している。新旧関係はいずれの遺構よりも本遺構が古いことが遺構の検出状況から確認できた。第1号濁跡よりも深く構築されている。

【形態・規模】 平面形はやや幅広の溝状を呈している。推定上面幅280~300cm、底面幅70~80cm、深さは173~183cmを測る。第1号濁跡同様、北西部は平成2年度の調査区域に、南東部は平成19年度の調査予定区域に延びている。

【壁・底面】 壁は底面からやや急に立ち上がっている。底面はほぼ平坦に造られている。上面幅に比べ底面幅は比較的狭く、断面の形状は逆台形や箱蓋研状を呈している。

【ピット】 底面及び壁面からも検出されなかった。

【その他の施設】 検出されなかった。

【堆積土】 20層に分層できた。下層では自然堆積、上層では人為堆積の様相を呈している。下部には泥の堆積層が認められ、水が流れたり溜まっていた時期があったことが推定できる。堆積土は遺構と

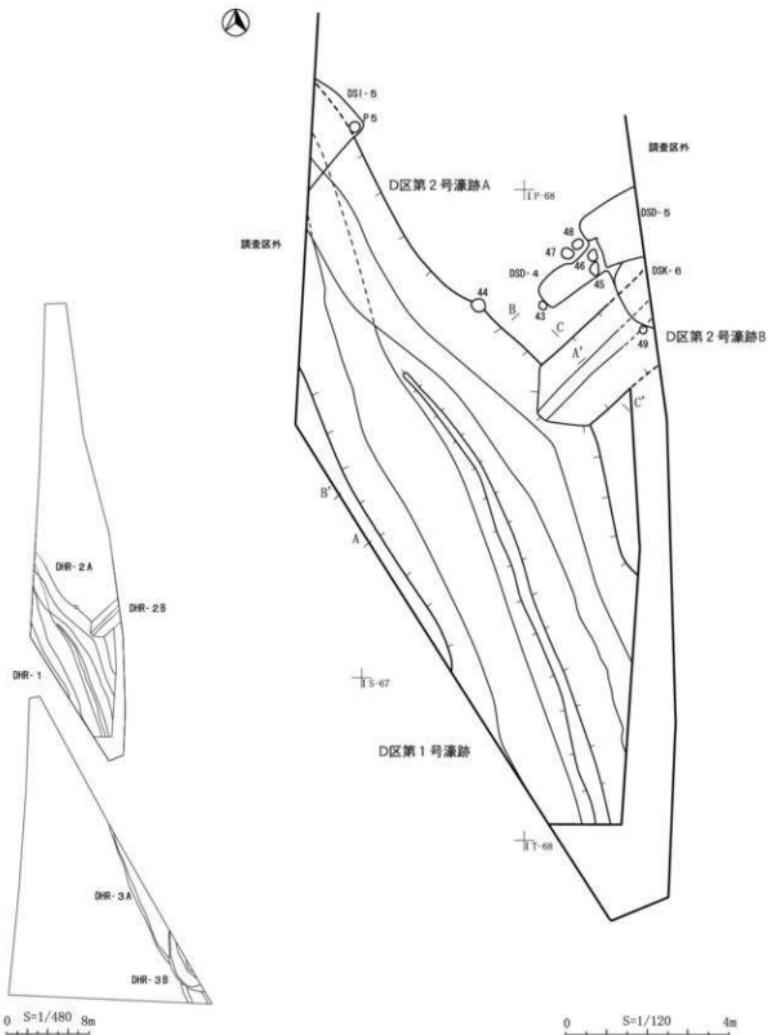


図165 D区溝跡（1）

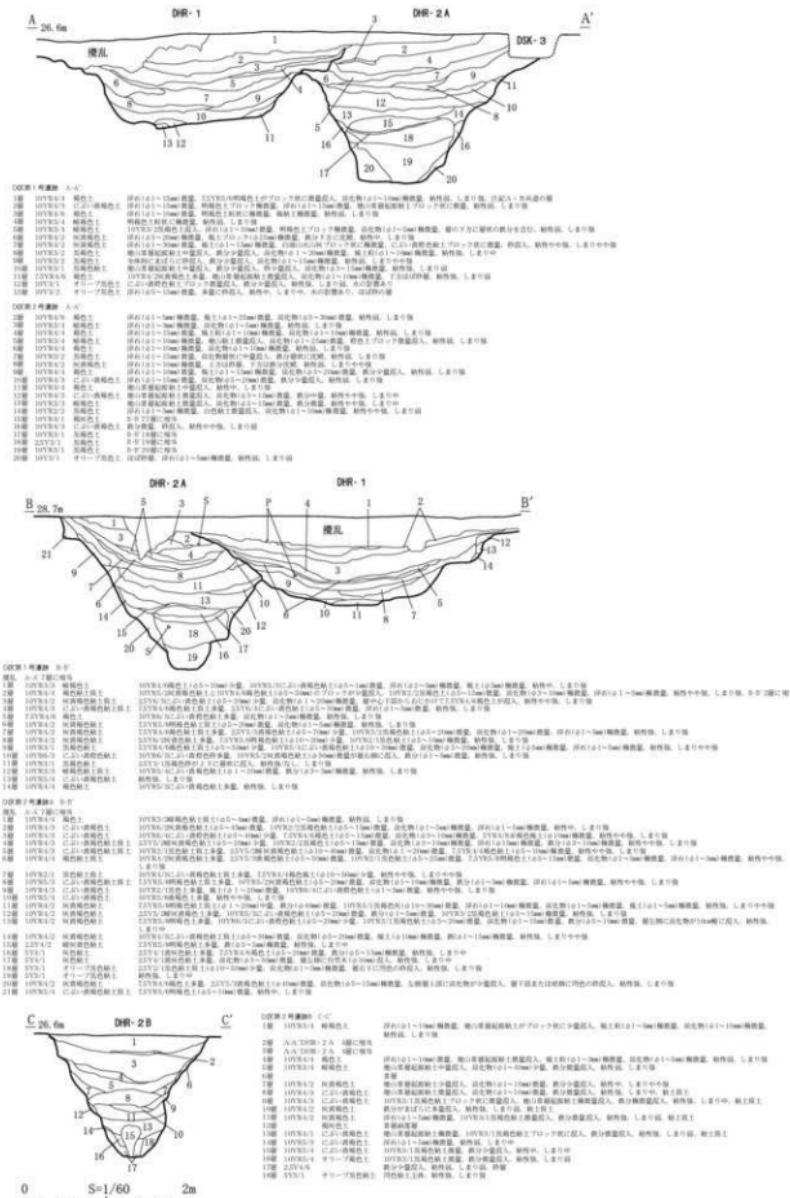


図166 D区発跡(2)

の節理面で崩落が著しい。特に調査区際では堆積土の崩落が相次いで起こっていた。

**【出土遺物】** 堆積土中から土師器・須恵器片、中世から近現代の陶磁器片、木製品、焼成粘土塊が出土している。中世陶器は13世紀頃の古瀬戸瓶子であり、泥層から出土した。図170-6は火きり白と考えられる木製品。欠損品であるが、残存部には4力所の火きり使用痕と1力所の未使用痕が見られる。スギ材が利用されている。泥層からウシ・ウマ類の上腕骨遠位端が出土している。

**【小結】** 時期判定にとまどう遺物が出土しているが、遺構の重複やその他の出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。形態から環濠を構成していた濠跡の可能性が高い。堆積土18層中から出土した木炭の放射性炭素年代測定の結果からは、 $1100 \pm 30$  yeBPという結果が得られている。詳細については第9章第1節に掲載している。

( 笹森 )

#### 第2号濠跡B (DHR-1C) (図165・166・171)

**【位置・確認】** I Q-79グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第III層上面で確認した。

**【重複】** 第2号濠跡Aと「T」字状に交差している。新旧関係はなく、同時期に存在していたものと考えられる。また、上面では第6号土坑と重複しているが、検出状況等から本遺構が古いことが判明している。掘り込みは第2号濠跡Aよりも若干浅い。

**【形態・規模】** 平面形はやや幅広の溝状を呈する。上面幅は196~210cm、底面幅は20~30cm、深さは147~157cmを測る。北東部は調査区域外に延びている。

**【壁・底面】** 壁は底面からやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦に造られている。断面の形状は上面に比べ底面幅の狭い箱型研状を呈している。

**【ピット】** 底面及び壁面からも検出されなかった。

**【その他の施設】** 検出されなかった。

**【堆積土】** 18層に分層できた。下層では自然堆積、上層では人為堆積の様相を呈している。15層はトンネル状の泥の堆積層で、管状に水が流れ、また、泥が溜まっていた時期があったことが推定できる。堆積土は遺構壁との節理面で著しく崩落する傾向が見られた。

**【出土遺物】** 堆積土中から土師器・須恵器片や陶磁器片が出土している。細片が多く、図示できた遺物は少ない。図171-16は耳皿の底部片と思われる。底部の約1/2しか残存していないが、下部に4箇所の穿孔を持つ可能性が高い。棒状の工具によって焼成前に穿孔されている状況が確認できる。図171-18は珠洲焼きのすり鉢の口縁部片。次代の遺物で、流れ込みと考えられる。

**【小結】** 堆積土中の出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。環濠を構成していた濠跡の可能性が高いと同時に、環濠の内部を再区画していた濠跡であった可能性も多い。現在の地境に沿う様に北東方向へ延びている様子が伺える。現在の地境も平安時代から連続と踏襲されていた可能性も考えられよう。

( 笹森 )

#### 第3号濠跡A (07DHR-3) (図167・172・173)

**【位置・確認】** I V-68グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第III層上面で確認した。平成19年度の調査で検出されている。

**【重複】** 第3号濠跡Bと重複している。新旧関係は本遺構が新しいことが土層の堆積状況より確認でき

た。第3号濠跡Bが埋没後に構築されており、時間差があったものと考えられる。構築状況は平成18年度に確認・精査した濠跡に類似している。掘り込みは第3号濠跡Bよりも浅い。

【形態・規模】南西側では立ち上がりを確認できたが、北東側はほとんど調査区外に延びているため底面からの立ち上がりや上場を確認することはできなかった。平面形は幅広の溝状を呈するものと考えられる。推定上面幅250～300cm、推定底面幅140～160cm、確認面からの深さは75cm前後を測る。南東部は平成18年度に調査した区域に延びているが、昨年度の調査区からは同一の遺構を検出することはできなかった。現在リング畠として利用されている微高地部分の端部を取り囲むように構築されていた可能性が高い。

【壁・底面】壁は底面からやや急に立ち上がっている。底面は一部を除きほぼ平坦に造られている。底面幅が比較的広く、断面形は概ね逆台形状を呈している。

【ピット】底面及び壁面からも検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】5層に分層できた。下層は自然堆積、上層は人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中から土師器の細片や木製品が出土している。

【小結】堆積土中の出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。検出位置並びに形態や堆積土の状況から、平成18年度に精査した第1号濠跡と同一の遺構と考えられる。環濠を構成していた濠跡の可能性が高い。

(笠森)

### 第3号濠跡B（07DHR-3）(図167・173)

【位置・確認】IX-70グリッド他に位置している。平成2年度調査時の基本層序第Ⅲ層上面で確認した。平成19年度の調査で検出されている。

【重複】第3号濠跡Aと重複している。新旧関係は本遺構が古いことが土層の堆積状況から確認できた。重複や構築状況は平成18年度に確認・精査した濠跡に類似している。第3号濠跡Aより深く構築されている。

【形態・規模】II A-70グリッド付近でほぼ90°屈曲するようにコーナーを形成している他は大部分が北東側の調査区外に延びている。平面形は幅広の溝状を呈するものと考えられる。推定上面幅340cm、底面幅100cm、確認面からの深さは150cm前後を測り、前述したように第3号濠跡Aより深く構築されている。位置的には第3号濠跡Aより内側部分を切り込んで構築されていた可能性が高い。

【壁・底面】壁は底面からやや急に立ち上がり、中～上位にかけては緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦に造られている。底面幅がやや狭く、断面形は概ね逆台形状を呈している。

【ピット】底面及び壁面からも検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】13層に分層でき下層はグラウシングしている様子が見られる。ほぼ自然堆積の様相を呈しているが、5・11層は厚さが2～3cmで炭化粒が主体の堆積層である。

【出土遺物】堆積土の下層から土師器・須恵器片、木製品等が出土している。

【小結】堆積土中の出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。検出位置並びに形態や堆積土の状況から、平成18年度に精査した第2号濠跡Aと同一の遺構と考えられる。環濠を構成していた濠跡の可能性が高い。

(笠森)

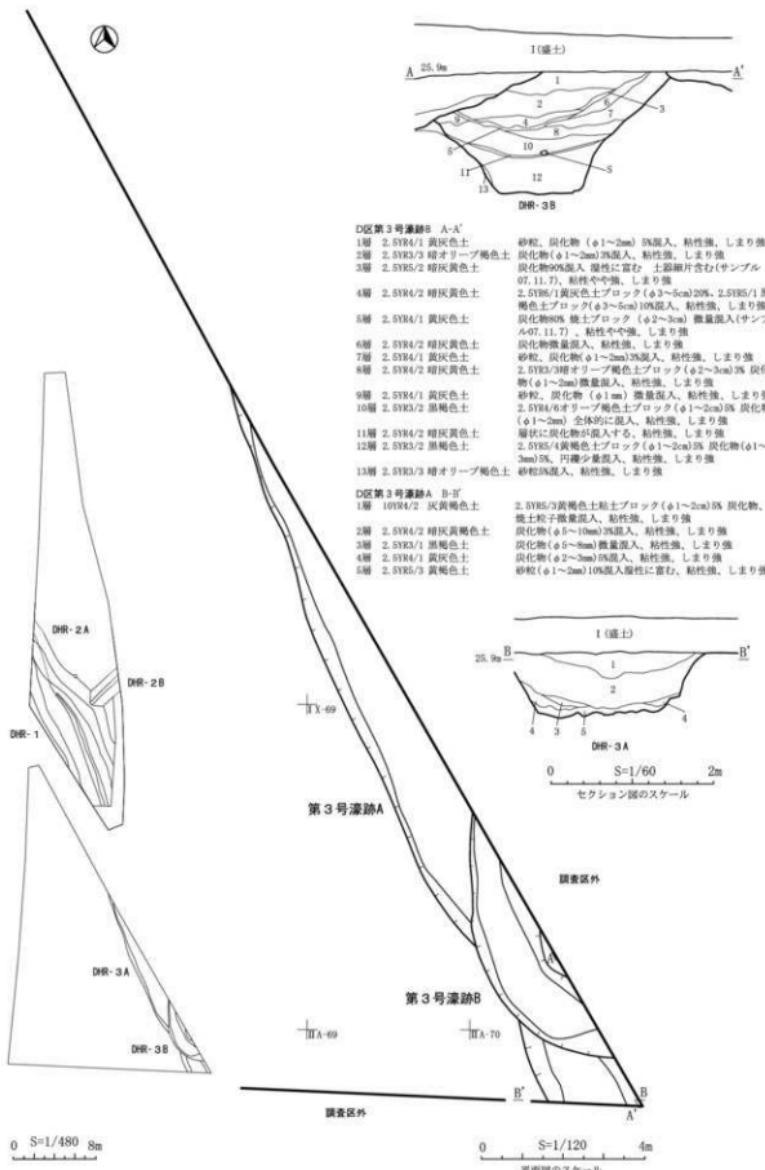


図167 D区淹跡 (3)

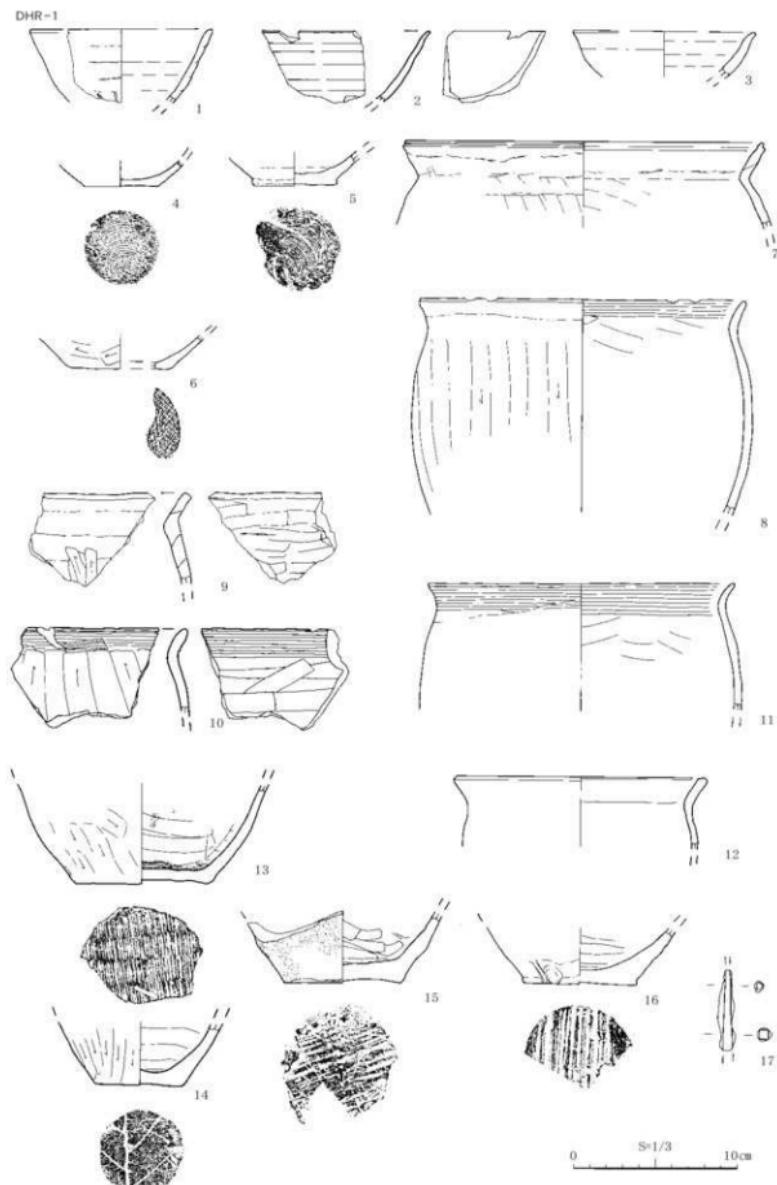


図168 D区漾跡出土遺物（1）

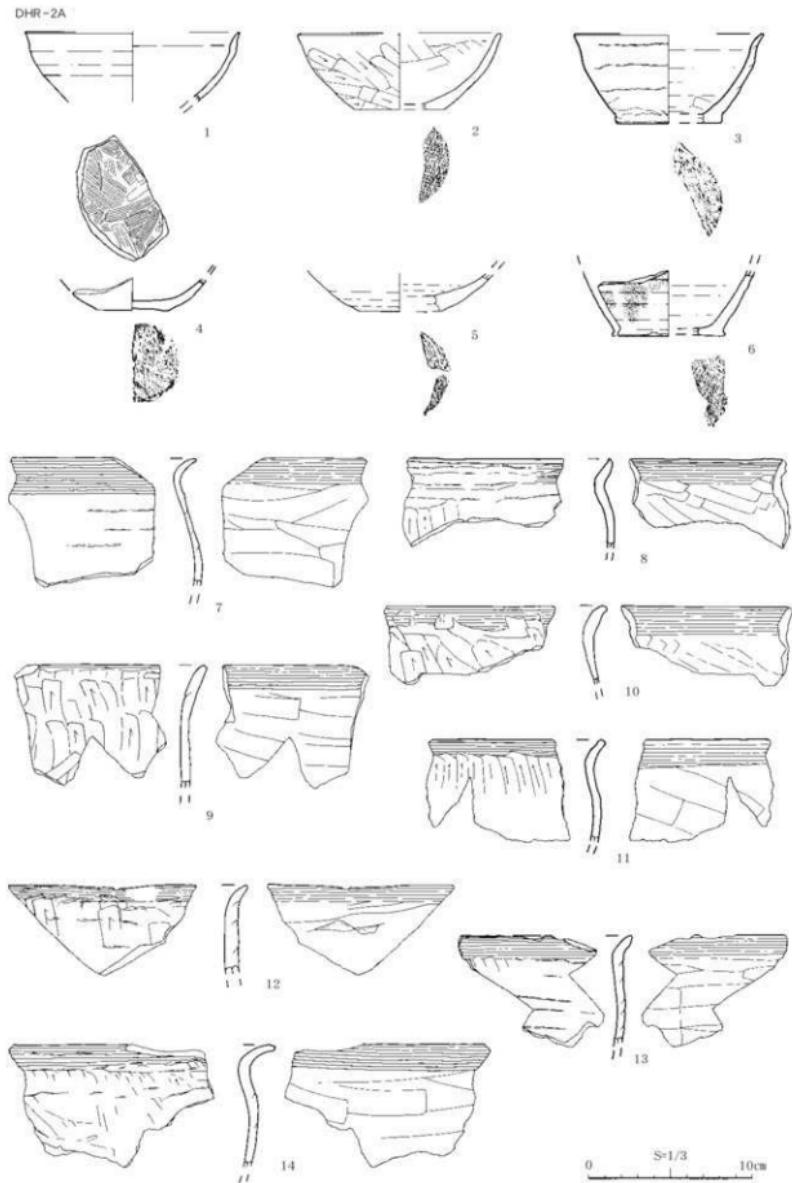


図169 D区 sondage出土遺物（2）

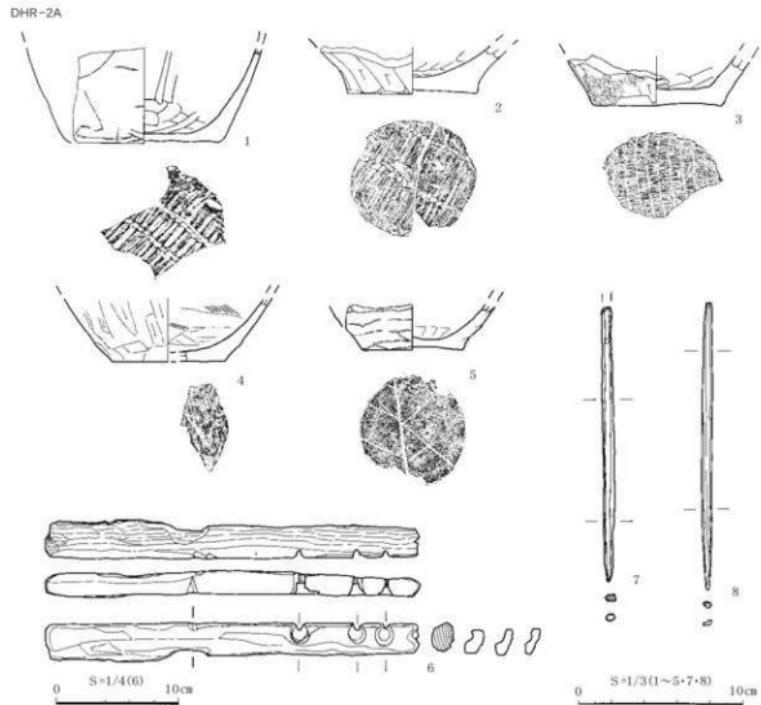


図170 D区漆跡出土遺物（3）

DHR-2B

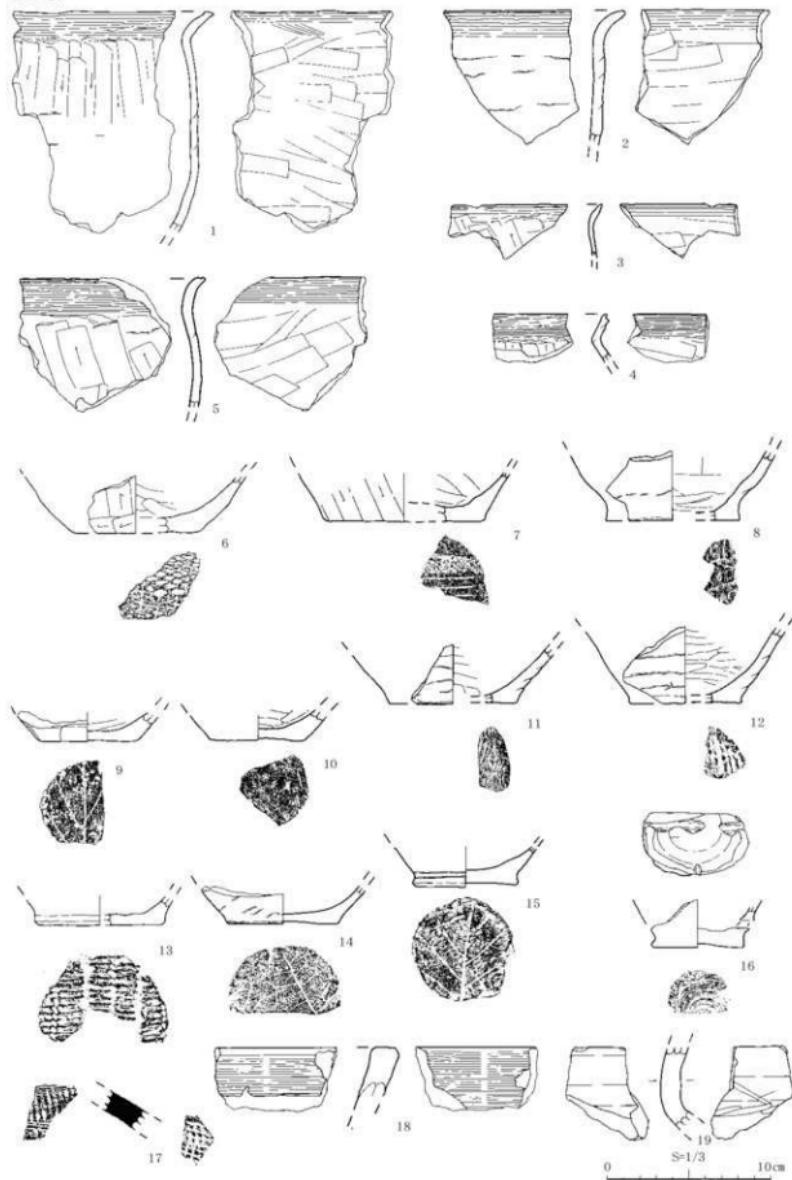


図171 D区漆跡出土遺物（4）

DHR-3B

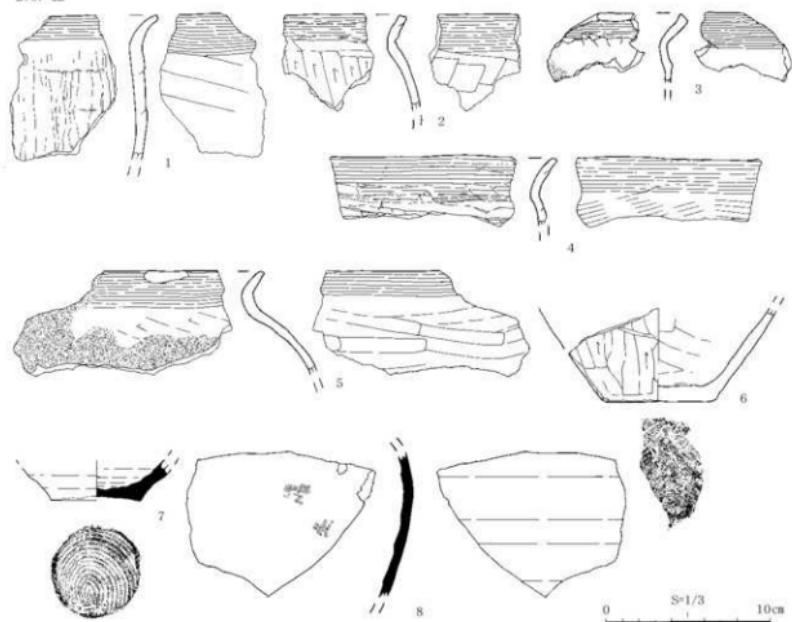


図172 D区漆跡出土遺物（5）

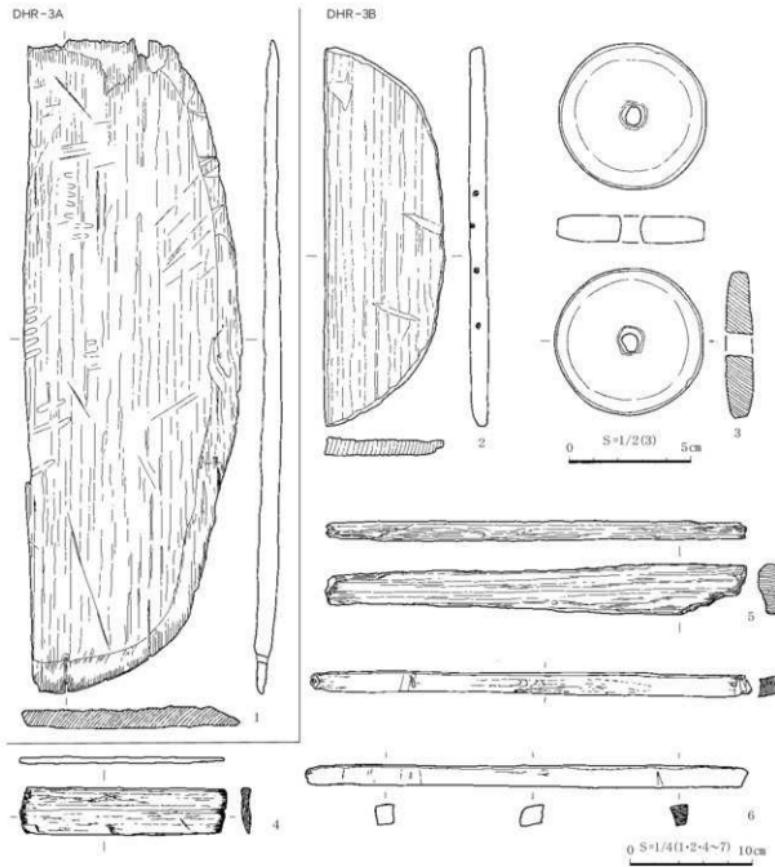


図173 D区漆跡出土遺物（6）

## 第8節 性格不明遺構

### 第1号性格不明遺構（D S X-1）（図174）

【位置・確認】 IR-68グリッドに位置している。D区第2号濠跡Aの検出面で確認した。確認面で焼土の拵がりが確認されている。

【重複】 第2号濠跡Aと重複する。第2号濠跡A検出面で遺構プランが確認されていることから、本遺構が新しい。

【形態・規模】 平面形は不整な梢円形を呈する。長径132cm、短径48cm、深さは最大17cmを測る。

【壁・底面】 遺構堆積土を壁や底面としている。壁は底面から緩やかに立ち上がりっている。底面はやや起伏を持っている。壁の一部が長めの馬蹄形状に被熱している様子が伺える。

【堆積土】 5層に分層できた。焼土ブロックが混在しており、人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中から土師器の細片が出土している。

【小結】 平安時代～中世の所産の可能性が高い。詳細については不明であるが、屋外炉・カマド状遺構の可能性も考えられる。

(笹森)

### 第2号性格不明遺構（D S X-2）（図174）

【位置・確認】 IR-68グリッドに位置している。D区第2号濠跡Aの検出面で確認した。検出面で焼土の拵がりが確認できる。

【重複】 第2号濠跡Aと重複する。第2号濠跡A検出面で遺構プランが確認されていることから、本遺構が新しい。

【形態・規模】 平面形は不整な梢円形を呈する。長径50cm、短径32cm、深さは最大で10cmを測る。

【壁・底面】 遺構堆積土を壁や底面としている。壁は底面から緩やかに立ち上がりっている。底面はやや起伏を持っている。第1号性格不明遺構のような明確な被熱部分は認められない。

【堆積土】 8層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中から土師器・須恵器片や礫が出土している。

【小結】 出土遺物から平安時代の所産の可能性が高い。詳細については不明であるが、屋外炉の可能性が高い。

(笹森)

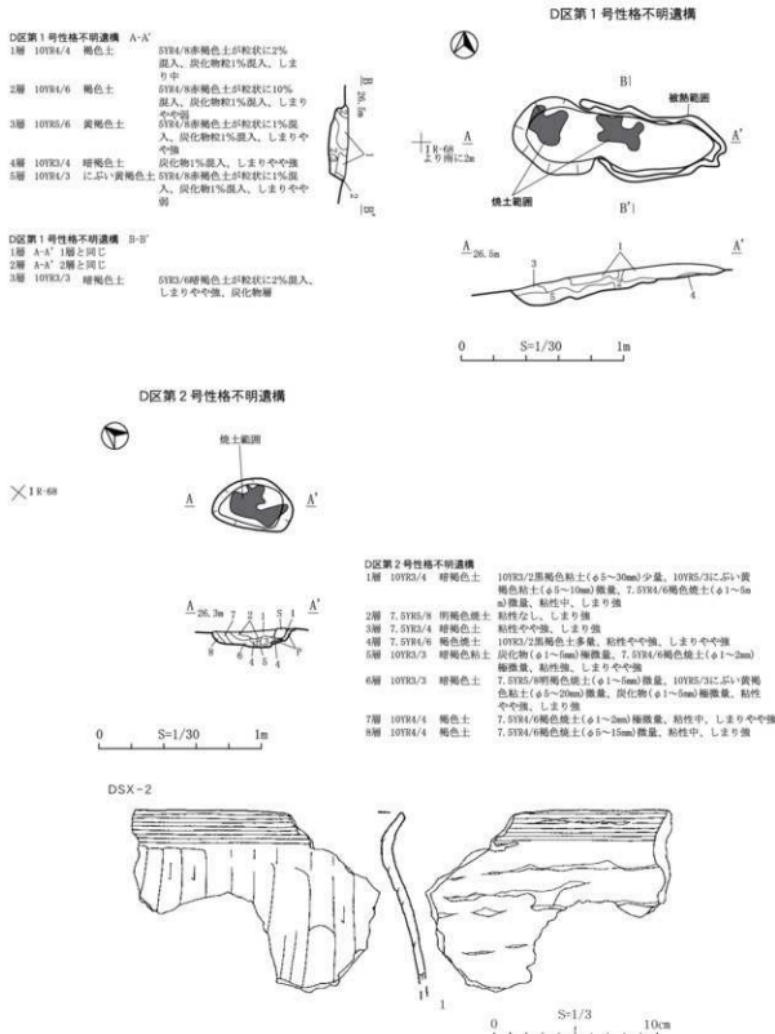


図174 D区性格不明遺構・出土遺物

## 第9節 沼跡・河川跡

### 沼跡（図175）

【位置・確認】 II A-66～II K-72グリッドにかけて位置する。標高は25m前後。圃場整備後の水田耕作土等を除去後、灰～青灰色の泥炭質土が全面に拡がる状況を確認した。

【形態】 堆積土の観察から、この区域では土層が部分的に波状を呈しながら堆積しグライ化が進んでおり、大きな流路を伴わない沼地のような状況が長時間続いている様子が見られる。調査区の南東部II F-72及びII J-69グリッド他で落ち際の肩の部分が一部検出されている他はほぼ全面が数層に渡る堆積土に覆われていた。肩の部分は第7号溝跡の北側にも認められる。

【堆積土】 圃場整備以前の堆積土は自然堆積層が主体をなす。下層の砂礫層までは6層形成されている。泥質の土が堆積層のほとんどを構成している。調査区は現在耕作中の水田に囲まれていて、調査区際では壁崩落の危険性が高かったため、砂礫層まで全面の掘り下げは行っていない。

【出土遺物】 基本層序第D II 層中から大半の遺物が出土している。出土している遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品等である。遺物については遺構外扱いで掲載している。

【小結】 堆積土の状況からD区東側の流路の影響を受けずに沼地を形成していた場所と考えられる。遺物の大半は流れ込みによるものと判断され微高地部分からの可能性が高い。上面では杭列や溝跡も見られることから、圃場整備以前にも水路や水田が造られていた可能性が考えられる。

(笹森)

### 河川跡（図176・177）

【位置・確認】 II K-78～II O-82グリッドにかけて位置する。標高は26m前後。圃場整備後の水田耕作土等を除去後、全体的に砂質の褐色土上面で広範囲に広がる落ち込みとして確認した。

【形態】 堆積土の観察から、この区域に関しては河川の流路が全体的に東側から西側へ移動している状況が確認されている。東側の肩は検出されているが、西側の肩は調査区内では見つかっていない。調査することができなかった用水路部分を含む現在使用中の農道の下に存在している可能性が高い。

【施設】 南北方向に延びる杭列が2カ所で確認されている。流路脇の土留めとして打ち込んだ可能性が高い。一時期や単位としての規模については不明である。調査区際が現在耕作している水田やU字溝を伴う用水路部分での崩落の危険性が高いため全面を調査することはできず、トレーニングでの確認にとどまった。

【堆積土】 流路の移動が伴うことから第1トレーニング内は68層に分層された。自然堆積層が主体をなす。泥及び砂が堆積層のほとんどを形成している。この区域では水は北から南方向へ流れているものと思われる。

【出土遺物】 堆積土の上層から陶器、中層や下層から土師器、須恵器、木製品等が出土している。

【小結】 堆積土上層では昭和時代の所産と思われる子供用のゴム靴等が出土していた。杭列は圃場整備前に打ち込まれたものと思われる。流路としての機能も圃場整備に伴い、或いはそれ以前に失われたものと考えられる。この地域での最後の圃場整備は1950年代に行われている。杭列を伴う流路の整備時期も昭和期、或いはそれ以前の可能性が考えられる。

(笹森)

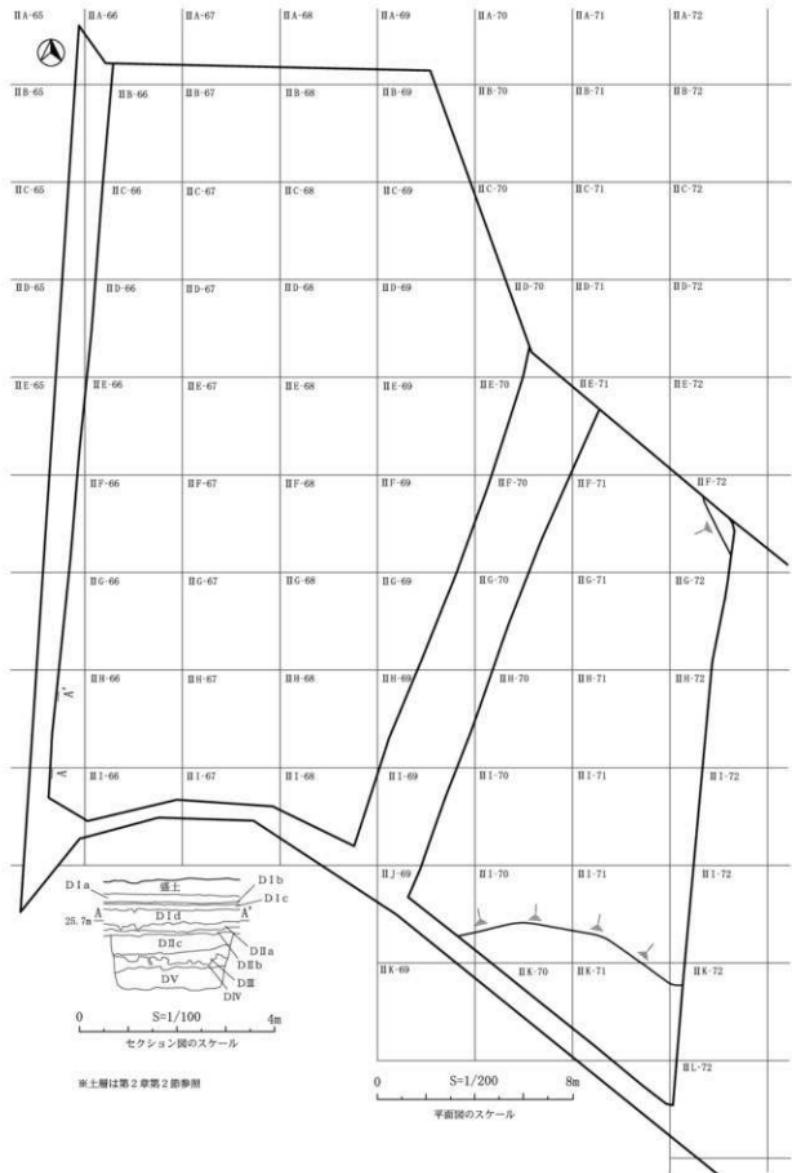
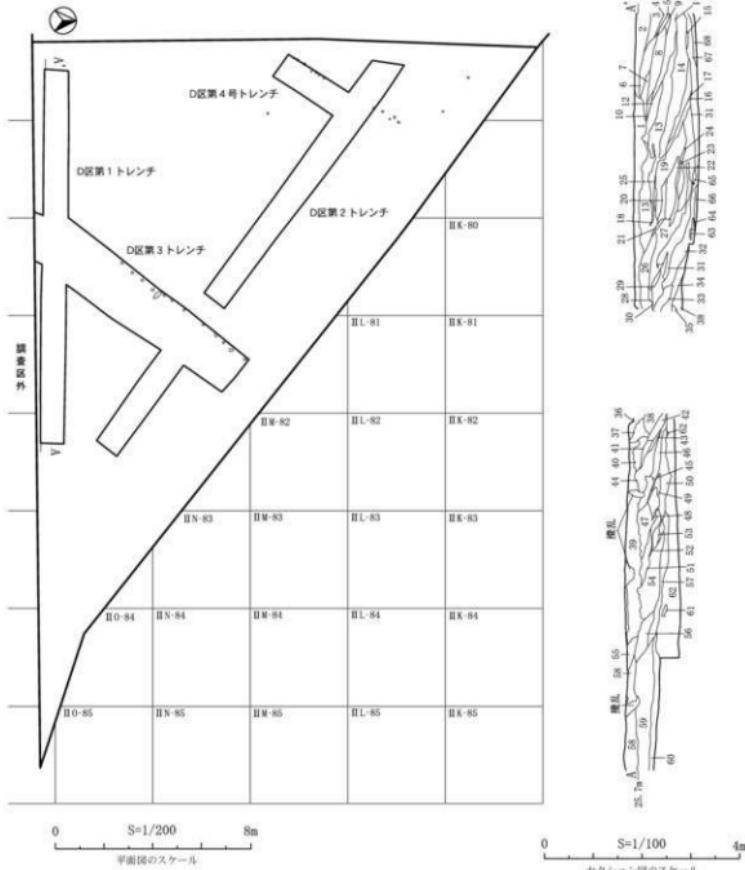


図175 D区沿跡



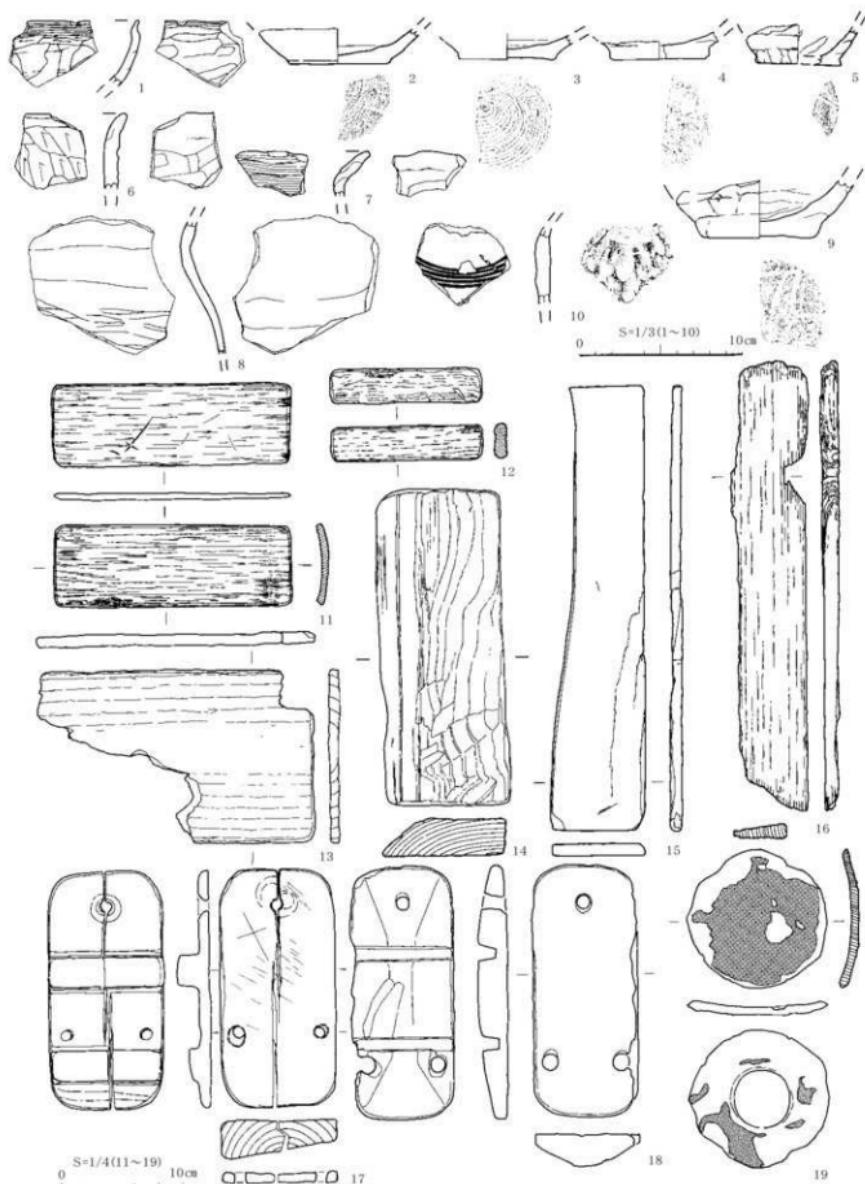


図177 D区河川跡出土遺物

## 第10節 遺構外出土遺物

D区の遺構外からは、弥生土器・土製品・土師器・須恵器・陶磁器・石器・石製品・木製品・古鉄が出土している。調査前の土地利用状況は田地及び畠地で、基本層序第D I層は近年までの水田耕作土層である。遺構外出土遺物は基本層序第D I層・D II層、平成2年度調査時の基本層序第I・II層中からの出土が多い。

### 1 弥生土器・土製品（図178～181）

弥生土器は田地からの出土が大部分を占める。全体器形を伺える遺物は少なく、ほとんどが破片資料である。器形では甕形土器が大半を占め、(台付)鉢形土器、高环形土器、壺形土器、蓋形土器が少量出土している。

甕形土器は口縁部が平縁で頸部から外反するものが大半を占める。口縁部の施文は地文が斜繩文に横位沈線や鋸歯状沈線が施されることが多い。胴部には縦位繩文が多用され、口縁部と同じく横位や鋸歯状沈線が施される他、(図178-5・13・14・29、図179-6、図180-15・24、図181-1・5・6・20) のように列点文が施されるものも多い。出土数は少ないが、(図178-9) のように頸部が長く、口縁部が緩く外反する甕も見られる。(台付)鉢形土器は11点(図178-4・9・27、図179-5・13・14、図180-4・5・13・27、図181-2・22)を図示した。図180-4・図181-22は2点共に胴部中央付近から屈曲を持ちながらや内傾して立ち上がり、波状を呈した口縁部が外反する。図179-5、図180-4・13も胴部がやや内傾して立ち上がっている。図178-4・9・図181-2は内傾せずに直線的に立ち上がって口縁部が外反している。(図179-13・14、図180-27) は(台付)鉢形土器の胴部片。3～5条の横位沈線が施される。高环形土器は8点(図178-28、図179-15・16、図180-9・10・12・22)を図示した。口縁部には図180-10のように波状を呈するものと、図178-28、図179-15・16、図180-9・12のように平縁を呈するものが見られる。いずれも内面には1～数条の沈線が施されている。外面施文には図178-28、図179-16、図180-9のように並行沈線と波状沈線を組み合わせるもの、図180-12・22のように並行沈線に鋸歯状沈線を組み合わせるものを見られる。台付の脚部は8点(図178-1・17・18、図179-2・3・22、図180-16・18)を図示した。図178-1は2条の並行沈線の下に刻み目が施されている。図178-17は2条の並行沈線が施される。脚高は低い。図178-18、図179-2・3は据部がやや広がる特徴を持つ。3及び8条の並行沈線と端部には刻み目が施される。図179-23は比較的小型の脚部。2条の波状沈線が施される。図180-18は脚下端に2条の並行沈線が施される。脚高は比較的高い。壺形土器は2点(図178-31、図181-21)を図示した。図178-31は胴部片。8条の横位沈線と上部に鋸歯状沈線が施されている。図181-21は、胴部が張り、口径が比較的小さい器形と考えられる。頸部から下に7条の横位沈線と1条の鋸歯状沈線が施されている。壺形土器と考えられる土器片は少なかったが、列点文が施された甕形土器の中にも壺形土器が含まれている可能性が高い。蓋形土器は3点(図179-4・18・19)を図示した。全て欠損品で、図179-19のみ袴部分が見られる。袴部分には5条の横位沈線が見られる。欠損部には穿孔が認められる。図179-4・18は区画内に隆帯や沈線が施される。かなり摩耗しているが、隆帯には刻目が施され、粘土粒の貼り付けも見られる。底部は5点(図179-17、図180-

11・21、図181-15・27) 図示した。外面には縦位繩文が施される。その他、土偶が1点(図179-20)出土している。図179-20は腕部のみの欠損品である。両面は2条の沈線によって区画が構成され、片面には斜繩文が充填される。欠損面には貫通する焼成前の穿孔が見られる。

(笹森)

## 2 古代の土器 (図182~184)

古代の土器は土師器と須恵器を中心に微高地部分と田地から出土している。土師器壺、土師器甕、土師器鉢、土師器把手付土器、須恵器壺、須恵器長頸壺、須恵器甕を図示した。

土師器壺は4点(図182-1~4)を図示したが、内面に黒色処理が施されるものが1点(図182-2)出土している。底部が残存するものは全て回転糸切り調整である(図182-2~4)。土師器甕は口縁部や底部を主体に14点(図182-5~7・10~21)を図示した。口縁部は比較的緩く外反するものが多数を占める。外面はヘラケズリ調整が施されるものがほとんどであるが、図182-13のように粘土紐の巻き上げ痕を残すものも少量ではあるが出土している。底部は4点(図182-18~21)図示している。底部には(図182-14)のように5条(2条+3条)の線刻が施されるもの、図182-19・20のように植物状(編物?)の圧痕を残すもの、図182-21のように木葉痕を残すものが見られ、砂底を持つものはほとんど見られない。土師器鉢は2点(図182-8・9)図示した。図182-8は外面に粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残している。口縁部は2点共に非常に緩く外反する。把手付土器は把手部を2点(図182-22・23)図示した。2点共に中空の把手である。図182-21は断面形状が長方形で、中空部も四角く造られている。器具による型押し整形と考えられる。色調から、二次焼成を受けている可能性が高い。図182-23は一部剥落しているが、全体的に丸みを帯びて造られ、中空部も丸い。接合すると思われる器部については2点共に不明である。

須恵器壺で図示できたものは1点(図183-1)。図183-1は内外面に火櫛痕が見られる。底部は回転糸切り調整。器高は6cmと比較的高く、それに比して底径は小さい。須恵器長頸壺で図示できた遺物も1点(図183-2)である。図183-2は口縁部の一部のみで、全体形状については不明である。須恵器甕は全て頸~胴部片で37点(図183-3~18・図184-1~21)図示した。外面調整には並行敲き目、格子敲き目などが見られる。内面の色調は青灰色の他、灰赤色(図184-21)、赤灰色(図183-5・18)、橙色(図183-12・図184-3)を呈するものも見られる。

(笹森)

## 3 中世以降の陶磁器 (図185)

遺構外から出土した中世陶磁器は8点、近世の可能性がある陶磁器は42点、近現代の陶磁器は18点出土しており、中世陶磁器の古瀬戸瓶子(図185-4)、珠洲系擂鉢(図185-1)、珠洲擂鉢(図185-2~3)を図示した。古瀬戸瓶子は滯水環境で堆積した土層から出土しており、口縁部と底部を失するもので、不安定な釉調で剥落しやすいうことから、13世紀頃のものと思われる。D区における中世陶磁器は、13世紀から14世紀にかけてのものが出土しており、特に13世紀代の遺物が集中してみられることが特徴である。近世陶磁器では、陶器は明石・堺産と思われる擂鉢や京焼の碗類、瀬戸美濃産の鎌茶碗破片などがあり、磁器は肥前産の碗・皿・鉢類がみられ、染付が多いが皿には青磁の

ものもある。見込みの軸を蛇の目に搔き取るものがあるものもあり、年代は江戸時代を通して17世紀から19世紀のものが出土している。

(工藤)

#### 4 石器・石製品（図185）

石器では、基本層序第D I層より、緑色凝灰岩の磨製石斧（図181-28）、小孔と小溝を有する礫が出土している。長径7.5cm、短径6cm程の扁平な礫に直径8mm、深さ6mmのほぼ真円の小孔を施すものであり、貫通はしていない。小孔内面の状況から棒状回転具の使用により穿孔したものと思われる。小溝は長さ22mm、深さ4mmであり、2条観察されるもので、板状金属具などにより刻まれたものと思われる。

(工藤)

#### 5 木製品（図185）

遺構外から出土した木製品は4点（図185-6～9）を図示した。全て基本層序第D II層中から出土している。図185-6は板状の加工品で一方を欠損している。欠損部は中央に四角い孔が空けられていたものと思われる。もう一方は端部が山形に、側面は段状に飾り加工が施されている。用材にはスギが用いられている。図185-7は箸の欠損品。角がないように丸く加工が施されている。用材にはアスナロが用いられている。図185-8は栓。やや下ぶくれの菱形を呈し、一方の端部は平坦に加工され、もう一方には括れ状の段を有している。括れを有する方が差し込まれ、栓の役目を果たしていたものと思われる。用材にはスギが用いられている。図185-9は比較的太い枝部の加工品。一方の端部が鉛状の工具によって楔状に加工がされている。

(笹森)

#### 6 古銭（図185）

遺構外から出土した古銭で図示できたものは1点（図185-5）である。図185-5は開元通寶で、初鑄年が西暦621年の唐銭である。

(笹森)

#### 7 まとめ

D区の遺構外からは、弥生時代の土器や土製品、古代の土師器・須恵器、中世～近世の陶磁器、石器・石製品・木製品・古銭が出土している。弥生土器は田地の基本層序第D II層中からの出土がほとんどで、流路を介しての流れ込みと考えられる。古代の遺物は10世紀後半（白頭山苔小牧火山灰降下以後）以降の遺物が主体をなしており、D区微高地部分の検出遺構とも整合する。中世の陶磁器は13世紀から14世紀にかけてのものが多く、他の地区では出土しない、古瀬戸前期様式瓶子（図184-4）の出土が特徴的である。近世の遺物は破片が多く、同時期の明確な遺構も確認できないことから、耕作等の影響が大きかったもの思われる。

(担当者一同)



図178 D区遺構外出土遺物（1）

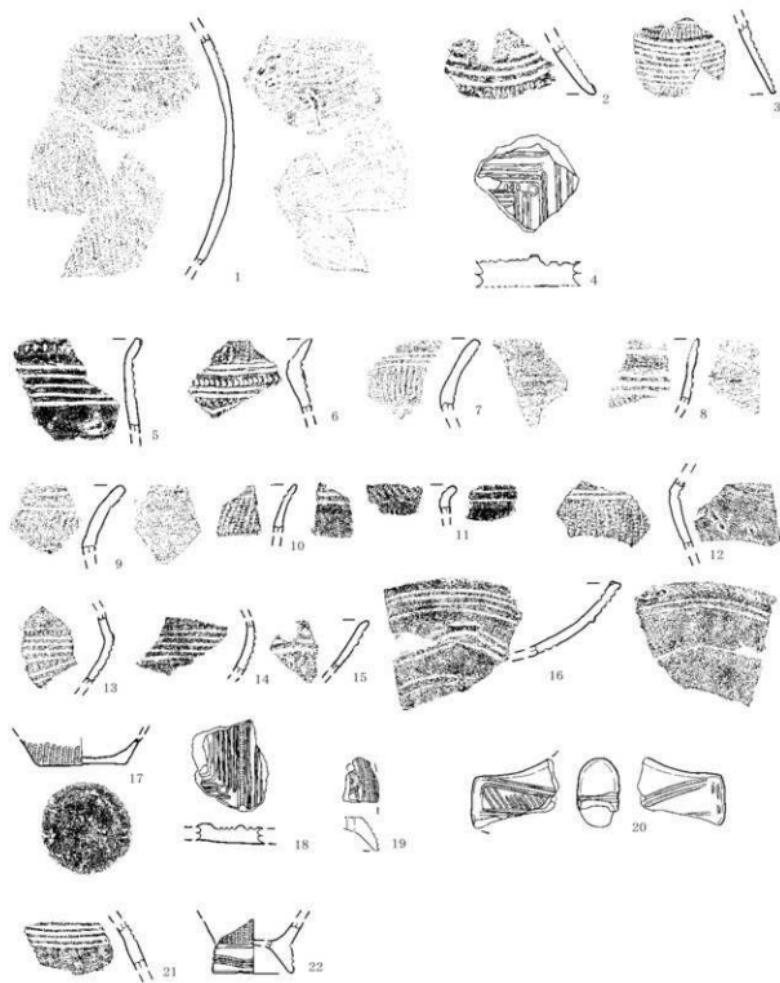


図179 D区遺構外出土遺物（2）

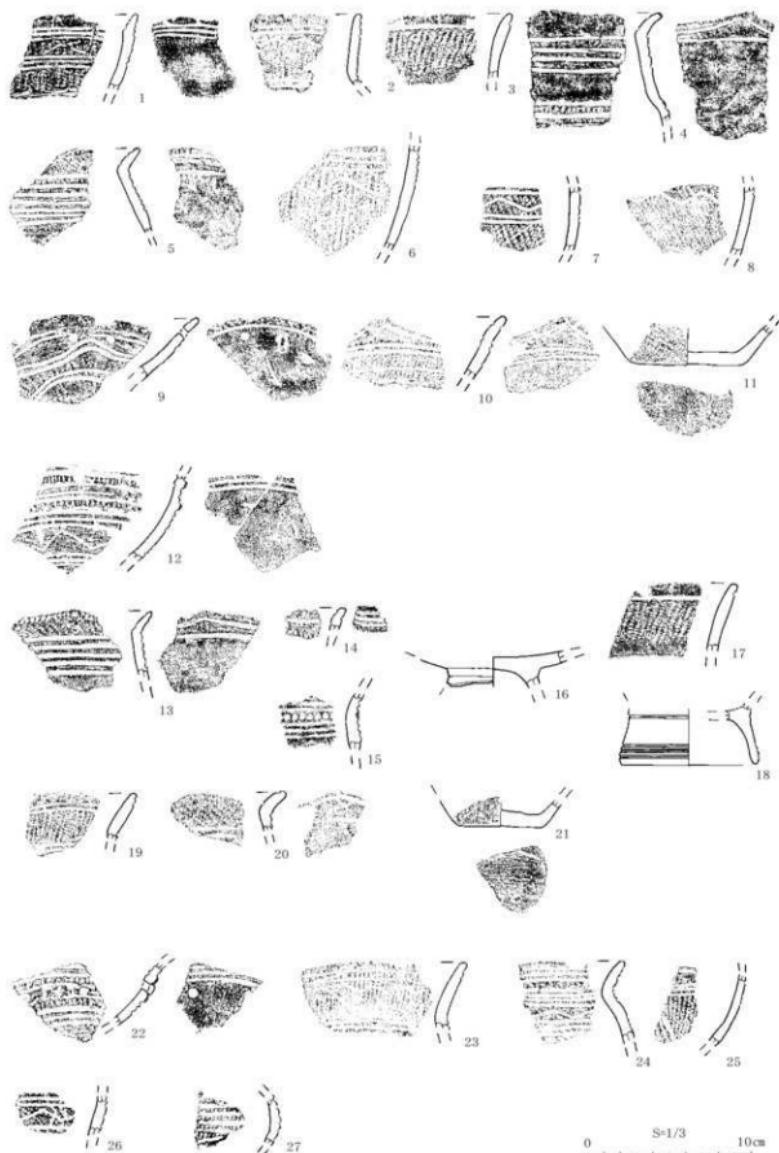


図180 D区遺構外出土遺物（3）

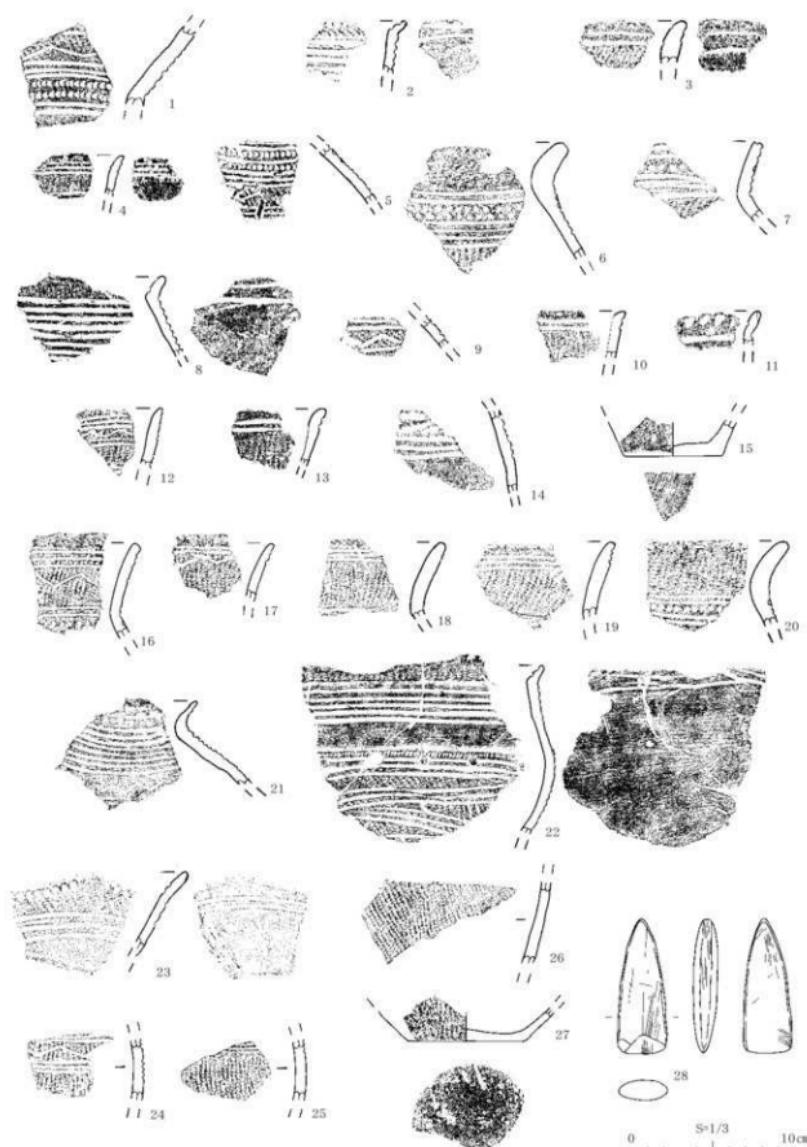


図181 D区遺構外出土遺物(4)



図182 D区遺構外出土遺物（5）

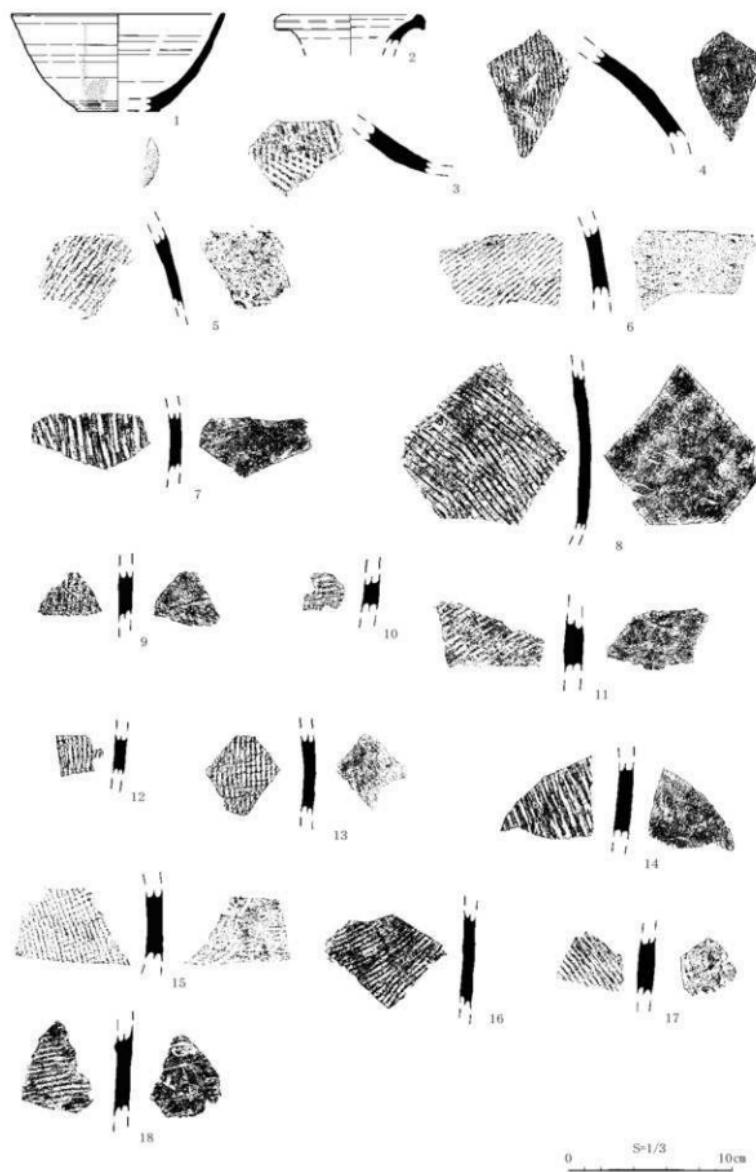


図183 D区遺構外出土遺物（6）

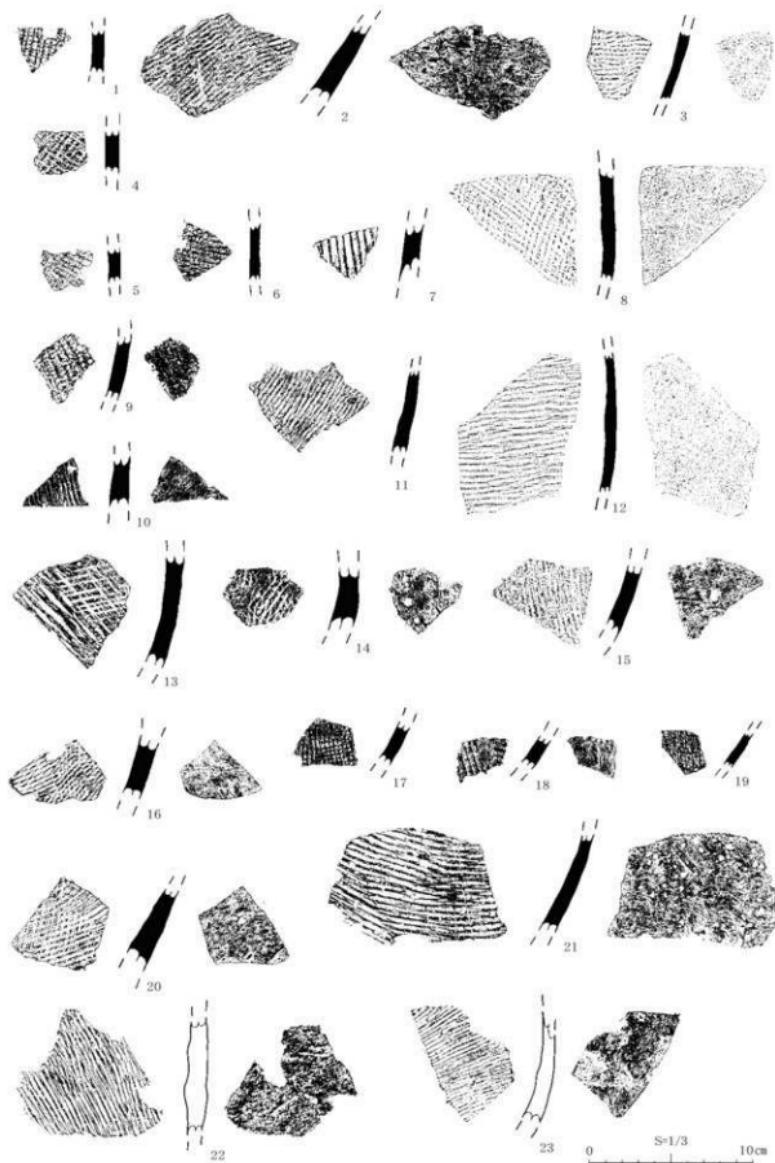


図184 D区遺構外出土遺物（7）

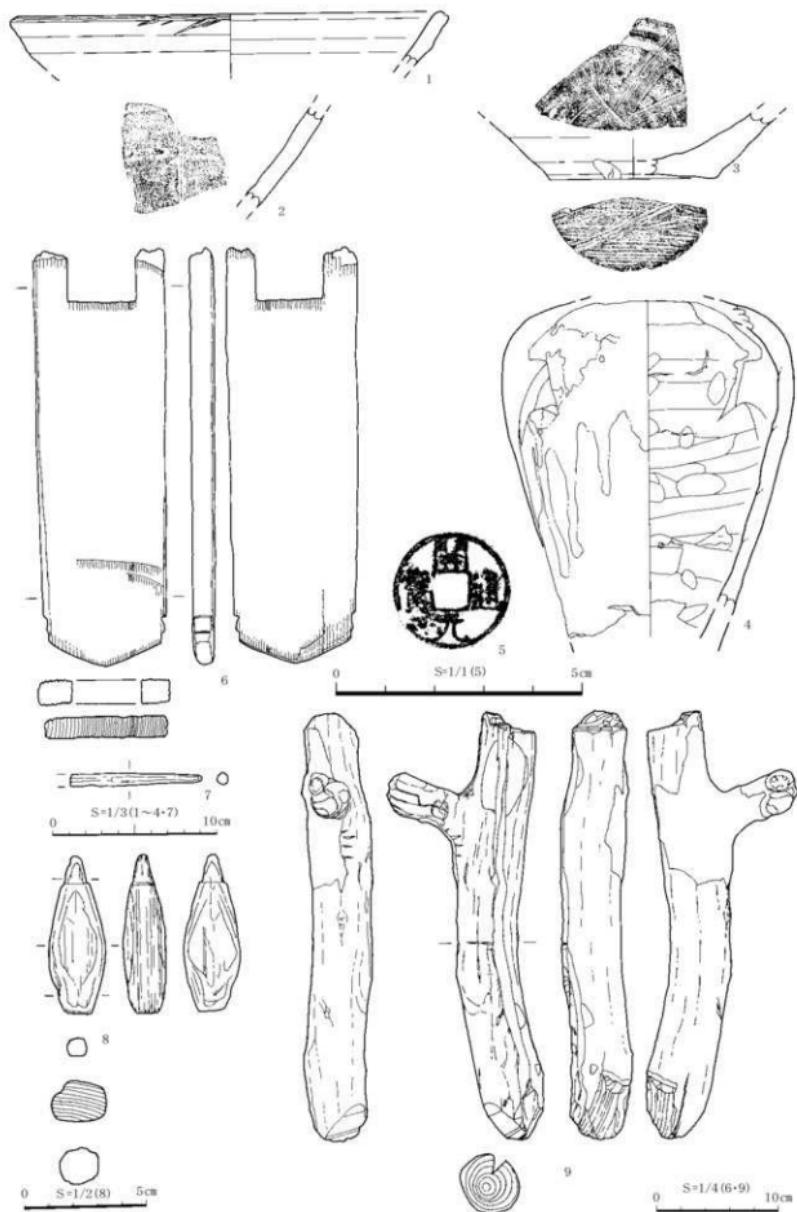


图185 D区遺構外出土遺物 (8)

## 第8章 水田遺構

### 第1節 I層水田跡

B区 I層水田跡（図186）

N-19・20、O-19・20・21、P-19・20・21・22、Q-21・22・23・24、R-23・24

【確認】現代の盛土の直下、基本層序第B I層上面で検出した。第B I層の上面は凹凸があり、これを水平に削剥する過程で黒色粘土層の畦畔状遺構が確認された。本遺構の直下には鉄分の集積によって赤色に変化した硬い土層がみられるが、土質は軽石を主体とする基本層序第B III層である。

【畦畔の状況】畦畔状遺構の色調は、周囲よりも赤みが強く、耕作土下層の床土の特徴と共通する。最終的に土層断面で確認したところ、基本層序第B I層の下部層とほぼ共通した土層内容であった。

【畦畔の規模】畦畔の上端幅は24~30cmで、下端幅は45~50cmである。畦畔の長さは確認し得た範囲では、東西23.5m、南北6mで断面形は逆台形ないしは蒲鉾形を呈する。東側および北側については不明である。鉄分の集積は下端付近、据をなす部分に顕著であり、耕作土より上部ではほとんどみられない。

【水田の範囲】A区、C区においても、表土直下に水田耕作土が検出されており、一体をなすものと考えられる。

【水田の形状と規模】確認し得た区画内の面積は76m<sup>2</sup>を測る。

【耕作土】色調から、上層と下層に二分される。上層は硬度密（25~26mm）で、マンガンを含む。下層は硬度中・密（24~25mm）を測り、上層と同様、マンガンを含む。上層は下層と比べてやや赤みが強い。また、両層とも第B III層に由来する白色軽石粒を混入しており、B区におけるI層水田跡の直下では、第B II層が欠落している。耕作土最下層では、糸状のマンガン・鉄分の沈着物に富み、硬度は極密（29mm）である。

【水口施設の状況】畦畔1には水口が3箇所確認されている。区画内の標高値から、いずれも取水口として機能したことが伺われる。畦畔1の中央に位置する水口2には抉りが2箇所連続して作られている。

【出土遺物】耕作土中から土師器・須恵器・陶磁器の小片、簪（図186-1）などが出土している。陶磁器の年代は近世～近代（19世紀）に帰属する。

【水田面の傾斜】耕作土底面の標高は25.84~25.90mで南東から北西方向に向かって傾斜している。南および西側については、水口の状況、近接する水田区画の様相が未確認であるため、詳細は不明であるが、現在も機能しているB区とC区を区切る南北方向の水路、および、調査区中央を東西に横断する水路を起点に南東から北西方向へと傾斜しているものと予想される。

【植株・足跡】稲株痕は確認できなかった。耕作土底面で蹄鉄を着装したウマの足跡が検出されている。また、これに平行して、幅10cm程度で筋状の痕跡が検出されている。歩列は東西方向に連なることから、区画の長軸を往復しながら馬耕を行っていたとみられる。

【小結】I層水田跡の廃絶年代は、空中写真記録から1950年代の耕地整理に伴うものと考えられる。耕作土の下部には十和田aテフラの泥流二次堆積層（第B III層）が確認されており、層位的上限とされる。耕作土中には、近世後半以降の陶磁器が多く含まれており、近世後半頃を上限年代とみるのが

妥当と考える。したがって、本遺構の年代は近世後半以降、1950年代までと考えられる。

(齊藤)

#### A区 Ⅰ層水田跡（図187）

【位置・確認】A区、A-1グリッド他に位置している。宅地造成に伴う盛土及び圃場整備後の水田を除去した後に灰～青灰色の堆積土（水田耕作土）を確認した。

【遺構の状況】調査区の北西隅に位置し、西側は現在使用している生活道路ということもあり、全容を伺い知ることはできなかった。南北方向からは水田区画に見られる明確な畦畔等は検出されなかった。また、東側でも畦畔・水路といった区画は検出されていない。検出状況から判断すれば、水田より東側は農道部分であった可能性が高い。水田耕作土の厚さも東側に向かい序々に薄くなり、緩やかに立ち上がって農道と思われる高まりへと続いている様子が土層断面図（図187）からも見て取れる。水田耕作土の厚さは18～24cm、不透水層（酸化鉄集積層）の厚さは3～5cmを測る。水田面としては1枚のみの検出で、確認できる1辺の長さは18mを超える。検出状況から判断すると、軸方向は調査区際の村道番号10号線にほぼ沿っていたものと思われる。

【重複】A区第1号道路跡西側側溝（ASD-22）部分と重複している。新旧関係は遺構の検出状況等から本遺構が古いことが確認できた。A区第24号溝跡とも重複していたと思われるが、明確な新旧は解らなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【出土遺物】耕作土中や不透水層（酸化鉄集積層）中からも遺物は出土していない。

【小結】耕作土を除去した酸化鉄集積層上面で、奇蹄目（ウマ）の蹄痕が多数検出されている。馬耕が行われていた頃の水田と考えられる。明確な時期は不明であるが、1950年代の大規模な圃場整備が行われる前の水田であることに相違はない。田舎館村の民俗資料館には昭和年代に馬耕が行われている様子が写された写真が保管されている。馬の蹄痕と同じ面では細い筋状の溝も検出されている。これは馬鋤によって付けられた跡と推定される。

本水田跡に伴う不透水層（酸化鉄集積層）の下部には基本層序第BⅢa・BⅢb層の堆積や第BⅣ層水田跡は認められない。道路際の堆積土の状況から見ても基本層序第BⅢa・BⅢb層、BⅣ層の堆積は認められない。周辺の状況から判断すれば、この区域での基本層序第BⅢa・BⅢb層や第BⅣ層は後世の耕地整備等に伴い削平されていた可能性が高いものと判断される。

(笹森)

#### C1区 Ⅰ層水田跡（図132）

【位置・確認】C1区、I-I-44グリッド他に位置している。幾重にも堆積した農道と思われる硬化部分を除去した後、灰～青灰色の堆積土（水田耕作土）を確認した。

【遺構の状況】調査区の際に位置し、全体を検出することはできなかった。耕作土の厚さは最大で30cm、不透水層（酸化鉄集積層）の厚さは2～6cmを測る。面での検出はほとんどできず、断面のみの検出にとどまった。

【重複】前代の遺構と重複しており、全ての遺構より新しいことが確認されている。また、水田跡の上

には農道が造られており、それよりは古いことが判明している。

【その他の施設】畦畔や水路等の区画は検出されなかった。

【出土遺物】水田耕作土中から端部に加工が施された杭が1本出土している。その他の遺物は出土していない。

【小結】この付近での大規模な圃場整備は前述しているように1950年代に行われている。農道は昭和23(1948)年に撮影された航空写真に写し出されており、それより以前の水田であることには相違ない。

(笹森)

#### I層水田第1号水路跡（図59・186）

【位置・確認】B区、O-16グリッド他に位置している。基本層序第B II～III a層上面で確認した。コンクリート製のU字溝を伴う現代の用水路の直下で検出されている。

【重複】第2・9・10号豎穴構造、第11号掘立柱建物跡、第34号土坑、第11・20・37・55号溝跡、第1号円形周溝、第126・364・367・381・607号ピット等と重複している。全ての遺構より新しいことが遺構の検出状況等から確認できる。

【形状・規模】大部分が用水路の直下や、調査区外に存在するため全容を伺い知ることはできない。確認できた全長は約38m、幅は最大で105cm、深さは同じく最大で30cmを測る。I層水田の畦畔に沿うように北西から南東方向へ延びている状況が確認できる。

【堆積土】1層の単層である。灰黄褐色土を主体とし、浮石や褐色土が混入する。

【出土遺物】堆積土上部から土器の細片が出土しているが図示できるような遺物ではない。

【小結】検出層位や状況から、B区I層水田跡と同時期に機能していた水路跡の可能性が高い。

(笹森)

#### I層水田第2号水路跡（図188）

【位置・確認】A区、E-4グリッド外に位置している。平成17年度試掘調査第5トレンチで確認されている。表土除去後の基本層序第B II a層上面で確認した。コンクリート製のU字溝を伴う用水路にはほぼ沿った状態で検出された。用水路の南側にはその痕跡を窺うことはできない。

【遺構の状況】東西方向に延びるやや幅広の溝状を呈していたものと考えられる。南側は現況でも段差を持っており、耕地整備等によりかなり削平を受けている様子が窺える。

【重複】B IV層水田跡、第10・11号溝跡と重複している。堆積土の状況から、すべての遺構より新しいことが確認できる。

【堆積土】4～9層に分層できた。一部で人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】底面より土師器（かわらけ）が出土している。てづくね成形であり、内面はナデ調整が施されるが外面は無調整である。胎土は橙色であり、12世紀後半から13世紀のものと思われる。細片のため図示はしていない。

【小結】底面からの出土遺物から中世の所産の可能性も考えられる。また、コンクリート製のU字溝が設置される前の用水路とも考えられ、圃場整備前のA区I層水田跡と同時期に機能していた可能性も考えられる。

(笹森)

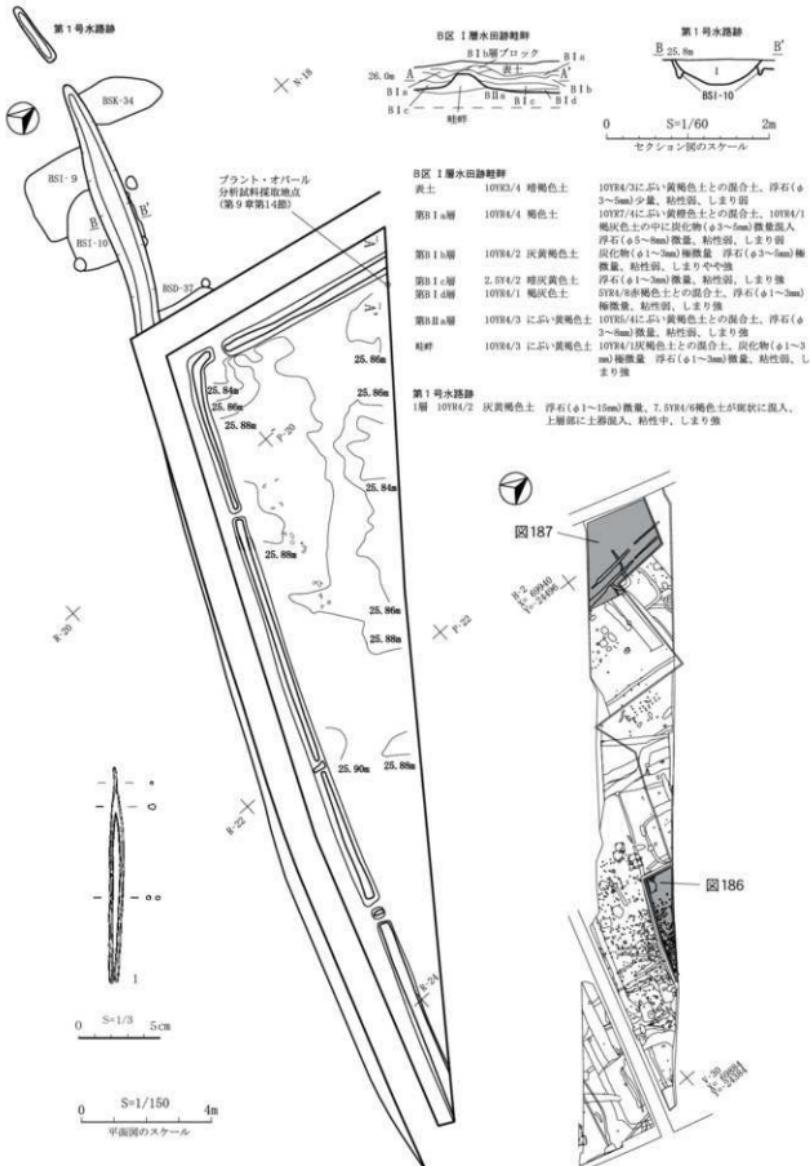
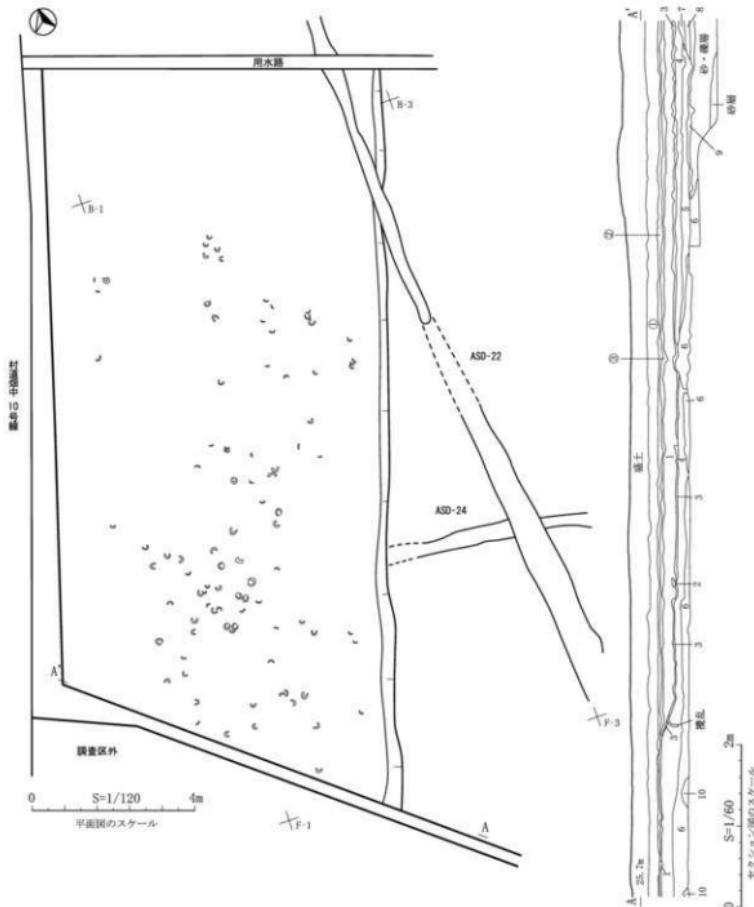


図186 I層水田跡 (1)



A区 I層水田跡セクション A-A'

- ①層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 7. SYR6/8明褐色土との混合土。浮石(φ1~2mm)微量、炭化物(φ1~2mm)微量、粘性弱。しまり強  
 ②層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 8. SYR7/6赤褐色土との混合土。土浮石(φ1~2mm)微量、炭化物(φ1~2mm)微量、粘性弱。しまり強  
 ③層 10YR5/6 黄褐色土 7. SYR6/6褐色土との混合土。10YR5/3にぶい黄褐色土混入。炭化物(φ1~2mm)微量、浮石(φ1~3mm)微量、粘性弱。しまり強
- 1層 10YR5/5 にぶい黄褐色土 7. SYR6/6褐色土との混合土。炭化物(φ1~5mm)微量、浮石(φ1~2mm)微量、粘性弱や弱。しまり強  
 2層 7. SYR4/6 褐色土 10YR5/3にぶい黄褐色土との混合土。粘性弱。しまり強  
 3層 7. SYR4/4 褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色土と10YR5/3にぶい黄褐色土との混合土。炭化物(φ1~5mm)微量。1a層ブロック状に混入。粘性強。しまり強  
 4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR5/3にぶい黄褐色土とSYR6/6褐色土との混合土。浮石(φ1~10mm)微量、炭化物(φ1~5mm)微量。第3層シラスブロック
- 5層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 7. SYR4/4褐色土と10YR4/4褐色土との混合土。浮石(φ1~10mm)微量。粘性や中。しまり強  
 6層 10YR5/2 にぶい黄褐色土 5YR3/2暗赤褐色土と10YR4/4褐色土との混合土。10YR2/1黑色土ブロック状に混入。粘性中。しまり強  
 7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 7. SYR2/2黒褐色土との混合土。粘性弱。しまり強  
 8層 10YR4/2 にぶい黄褐色土 10YR4/4褐色土と7. SYR2/2黒褐色土との混合土。粘性中。しまり強  
 9層 10YR4/1 にぶい黄褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土と10YR2/2黒褐色土との混合土。粘性やや強。しまり強  
 10層 10YR4/0 にぶい黄褐色土 7. SYR6/6褐色土との混合土。粘性やや弱。しまり強

①～⑩は断面整備後の水田  
 1～3はI層水田耕作土等

図 187 I層水田跡 (2)

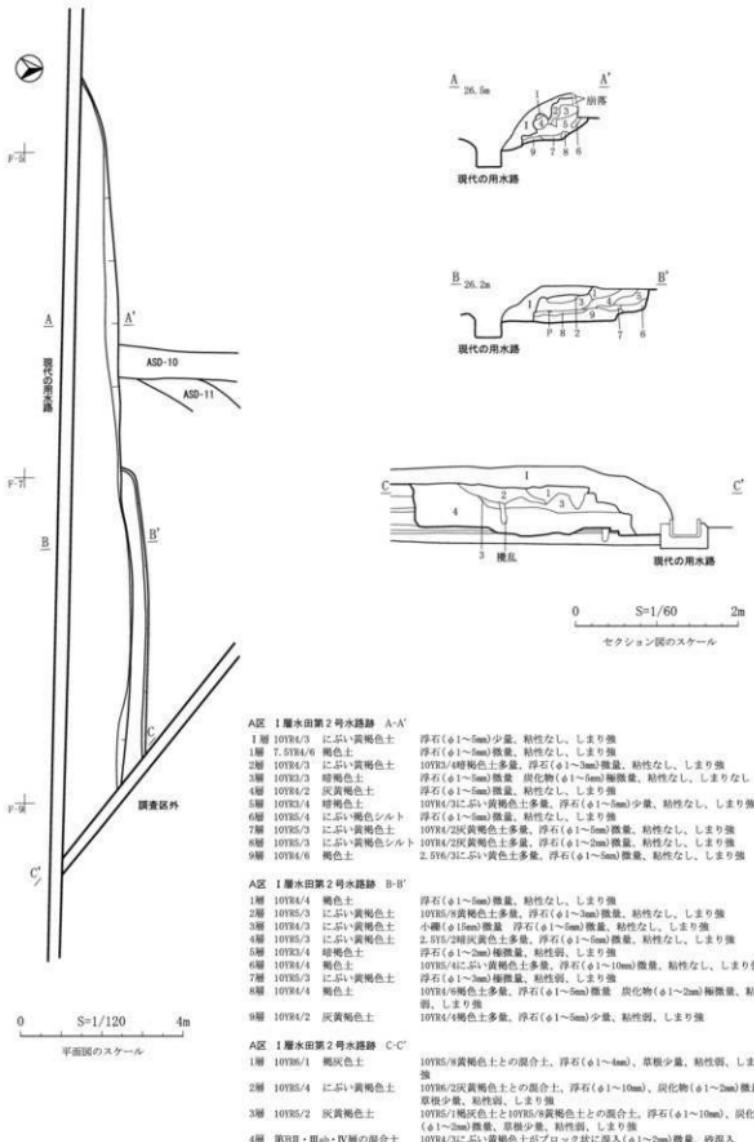


図188 I層水田第2号水路跡

## 第2節 B IV・B V層水田跡

### 1 B IV層水田跡（図189～200）

**【確認・覆土】**古代に造営されたと考えられるB IV層水田跡は、洪水層と考えられる基本層序第B III b層に覆われた状態で、調査区のA～C区にかけて合計49枚検出された。畦畔確認面での標高は最も高い所で25.8m(A区)、最も低い所で24.2m(B区)を測る。平成18年度調査時、A・B区で遭構検出面である基本層序第B III a・B III b層を掘り下げて行く過程で、畦畔や一部では水田面及び足跡が確認されている。基本的には第B III b層中で擬似畦畔Aで検出される傾向が多く見られた。次代の遭構や擾乱によって削平を受けている箇所も多数見受けられるが遺存状態は比較的良好であった。水田跡を覆う基本層序第B III b層の上には同じく洪水層と考えられる基本層序第B III a層が堆積している。層厚は第B III a層が15～55cm、第B III b層が16～50cmと場所によってはかなり厚く堆積している状況が確認できる。第B III a・B III b層共に下部には砂粒や比較的大きめの浮石が堆積する。第B III b層と第B III a層の堆積する間には多少の時間差があったものと考えられる。また、第B III b層と第B III a層の供給源は、それらを構成する物質の観察からほぼ同じ場所と推定され、分析結果は第9章第4節に掲載している。

**【畦畔の状況】**49枚の水田跡を区画する79条の畦畔が検出されている。畦畔のほとんどは隣り合う水田跡や水路跡と共有しており、記述に際しては「第〇号水田畦畔×（第△号水田畦畔□）」と表記している。例えば「第1号水田畦畔2（第2号水田畦畔4）」といった表記となっている。また、畦畔の呼称については北側を起点とし、時計回りに番号を付しているため、調査区外に存在する場合や削平等によって存在しない畦畔(番号)もあり得る。

**【畦畔の配列】**本遺跡から検出された水田跡の畦畔は、基本的には「T」字状で交差している特徴を持つ。確認された畦畔の交点は総計35カ所を数える。その内の1カ所、B区S-19・20グリッド付近に位置し、第6・7・8・9号水田跡の4水田が接する所では十字に近い状態で畦畔が交差している状況が確認できるが、これらはおそらく2カ所の「T」字状交差が極めて近い場所で造られ、結果として十字状に見えるものと判断される。

**【畦畔の構造と規模】**畦畔の大部分は、断面の観察によると、基本層序第B IV層を造り出し、一部では第B IV層やB IV層水田耕作土を盛って造られたものと考えられる。後述するA区から検出されたB IV層水田跡に伴う第1号水路跡脇の畦畔については、土層断面観察によると周辺の水田耕作土を何度も盛って高さを維持していた様子が見受けられる。洪水層やその上の堆積土の土圧によって畦畔の高まりは多少低くなっているものと思われるが、各畦畔ともかなりの残存高を持って検出されている。隣り合った水田は比高差を持ちながら造られていることから、当然畦畔と水田面もかなりの比高差を持って検出される例が多い。畦畔と水田面で最も比高差を持つものはA区L-12グリッド他に位置する「第19号水田畦畔2・第20号水田畦畔1」と第20号水田跡の水田面で、その差は36cmを計測する。畦畔の幅は、上端幅で12～70cm、下端幅で38～92cmを測る。下端幅でもっとも広いのはB区W-24グリッドに位置する水田37・38・39の畦畔が交差する付近で92cmを測る。また、B区第2号水路跡と第23号水田跡の下端幅も88cmと比較的広く造られている特徴を持つ。確認できた畦畔の中で最も長いものはA区E-6グリッド他に位置する「第27号水田畦畔2（第1号水路跡）」で14.86mを計測する。

調査区A区の一部では後世の耕作等に伴い深く削平を受けており遺存状態は全体の中では良くなく、A区F-9グリッド他に位置する「第22号水田畦畔5（第23号水田畦畔2）」・A区G-9グリッド他に位置する「第22号水田畦畔4（第24号水田畦畔2）」・A区F-8グリッド他に位置する「第23号水田畦畔3（第24号水田畦畔1）」等は本来の畦畔の下部に存在することの多い擬似畦畔Bでの検出となっている。各畦畔の規模等については各々表中に記している。

【水田の範囲】前述したようにBIV層水田跡は調査区のA～C区にかけて検出されている。地形的には現在圃場整備によって造られた水田が拡がっている沖積地部分にほぼ当てはまるものと考えられる。BIV層水田跡はC1区の微高地部分とD区からは検出されていない。水田造営には当時の地形や自然環境が深く関わっていた可能性が高いものと考えられる。

【水田の形状と規模】水田の形状には特に決まったものは見受けられない。基本的には不整な方形や亀甲形を呈するものが多く見られ、中にはC区IC-35グリッド他に位置する第31号水田跡のように極めて不整形なものも見受けられる。整然とした方形区画を呈するものは見られない。地形に逆らわない造りがなされていたものと判断される。

今回の調査区は県道の建設予定地で、長さは400mを超えるものの幅は最大でも20m程である。また、基本層序第BIIIa層上に構築された次代の遺構に削平されたり調査区内に調査することのできない農道部分もあることから、一区画を全て検出できたものは数枚にとどまる(全ての水田跡の畦畔や水田面が何かしらの影響を受けているため、厳密に言えば1枚もないことになるのだが)。区画全てを検出した水田跡の中で最大の面積を持つものはA区H-11グリッド他に位置する第21号水田跡の110.37m<sup>2</sup>、最小はB区O-18グリッド他に位置する第9号水田跡で48.78m<sup>2</sup>を計測する。推定面積ではC区IC-33グリッド他に位置する不整形の第31号水田跡が350.58m<sup>2</sup>を測り、100坪を超える広さを持つ。各々の水田の形状や面積等については表中に記している。

【耕作土】BIV層水田跡は基本層序第BIV層を搅拌して耕作土としている。耕作土の厚さは12～20cm前後を測る。耕作土の色調は2類に大別される。色調の比較的暗い褐灰色土と比較的明るいにぶい黄橙色・にぶい黄褐色土に分かれる。色調の暗い褐灰色土の耕作土は第1・2・3・4・39・40・41・49号水田跡に見られ、これらの水田跡は全て接している状況が確認できる。その他の水田跡の耕作土はほとんどが色調の明るいにぶい黄橙色や、にぶい黄褐色土で構成されている様子が見られる。耕作土の下にはマンガン粒や酸化鉄の集積が顯著に認められる箇所も見受けられる。連続して耕作されていた可能性が高いものと推察される。耕作土上面(水田面)には稲株の痕跡や足跡も残っており、稲が植えられていた状況や人々の歩列・方向も確認できる。稲株の痕跡や足跡については後述することとする。各々の水田跡の耕作土の情報については表中に記している。また、水田土壤のプラント・オーバル分析の結果は第9章第10・14節に掲載している。

【水田面の傾斜】各水田跡の水田面は、基本的に北→南方向への傾斜を示している。また、地形によって東→西方向、或いは西→東方向への傾斜を示している。ほとんどの水田跡は緩やかな傾斜を示しているが、B区L-16グリッド他に位置する第16号水田跡とC区IC-34グリッド他に位置する第31号水田跡、同じく第33号水田跡は部分的に特異な傾斜を示している。この3枚の水田跡の水田面は一部が畦畔より高い位置に存在しており、畦畔の際以外には水が張らない状態になっている。この水田面の傾斜が何を意味するかは不明な点が多い。自然の力が加わった結果の地形変化による可能性も考

えられるが判然としない。

隣り合う水田は基本的に数cmから10数cmの比高差を持って造られている。最大の比高差を持つ水田はB区L-16グリッド他に位置する第15号水田跡と第16号水田跡で、24cmの比高差を持って造られていた（第16号水田跡→第15号水田跡）。各水田跡の傾斜の具合や比高差は表中に示す通りである。時間的な制約もあり水田面のコンタ図の作成は一部を除いて行ってはいない。

【水口施設の状況】隣り合う水田に水を懸け流すための水口施設は計17カ所で検出されている。A区からC区まで順に見ていくと、第26号水田跡→第27号水田跡（水口13）、第21号水田跡→第29号水田跡（水口11）、第18号水田跡→第21号水田跡（水口10）、第17号水田跡→第15号水田跡（水口14）、第16号水田跡→第15号水田跡（水口15）、第12号水田跡→第15号水田跡（水口9）、第13号水田跡→第14号水田跡（水口12）、第9号水田跡→第13号水田跡（水口7）、第6号水田跡→第9号水田跡（水口8）、第6号水田跡→第7号水田跡（水口2）、第5号水田跡→第7号水田跡（水口1）、第37号水田跡→第38号水田跡（水口6）、第39号水田跡→第40号水田跡（水口3）、第39号水田跡→第41号水田跡（水口4）、第2号水田跡→第43号水田跡（水口5）、第31号水田跡→第32号水田跡（水口17）、第31号水田跡→第30号水田跡（水口16）の17カ所で、→方向へ水が落ちている状況を示している。B区Y-25グリッドに位置する第39号水田跡→第40号水田跡（水口3）では、下段の第40号水田跡の施設直下の水田面にすり鉢状の落ち込みが形成されており、水がかなりの勢いで落ちて抉られた状況が観察できる例である。第17号水田跡→第15号水田跡（水口14）、第9号水田跡→第13号水田跡（水口7）でも比較的浅いが、同様の落ち込みが形成されている。水口施設の形状は畦畔が途切れブリッジを形成するものが多く、特異なものは見られない。水口施設が見られない畦畔については水田耕作土を使い塞いでいた可能性も考えられるが、今回の調査ではそれらの痕跡を確認することはできなかった。ただ、第6号水田跡→第7号水田跡（水口2）では流路部分が高まりを持っており、耕作土を盛って水口を塞ぐ行為が行われたと思われる痕跡を見ることができる。各々の水口施設の計測値等については表中に記してある。

【稲株痕・足跡】稲株痕を確認できた水田跡は30枚である。稲株の痕跡については筆者の認識不足もあり、未検出の水田跡についても存在していた可能性が高い。足跡についてはほぼ全ての水田跡から検出されている。稲株痕と足跡の両方が検出された水田跡の中から第15・20号水田跡を図示している（図197）。第15号水田跡からは稲株痕と足跡が重複する箇所が多数見られ、また、稲株痕も整然と並んだ状態ではないことから、田植えによる移植栽培が行われていたかどうかを明確に判断することはできなかった。第20号水田跡では稲株痕と足跡が重複する箇所は比較的少なかった。しかし、稲株痕は第15号水田跡同様整然と並んでは検出されていないことから、こちらからも田植えによる移植栽培が行われていたかどうかを明確に判断することはできなかった。ただ、第20号水田跡におけるプラント・オ・パールの分析によると、育成初期段階の葉身中に含まれる形状の植物珪酸体が皆無であるとの結果が出ており、この水田においては稻の直播きではなく、田植えによる移植栽培が行われていたことを示唆する結果が得られている（第9章第10節参照）。

稲株痕と共に倒れた稻の痕跡も認められる。耕作土の直上層である基本層序第B III b層は洪水層と考えられる浮石が混入する土砂層である。この第B III b層中からは稻と考えられる植物の痕跡が見つかっている。断面観察によると土砂層中位で屈曲しているものや湾曲しているもの、水田面で根本か

ら折れているものも見られる。根本から折れているものは畦畔の水口施設に近いところに集中する傾向が見られた。場所によって土砂の流れの強弱や方向も違っていた様子が見られる。

足跡は前述したようにほぼ全ての水田跡から検出された。歩列が確認できる足跡も各水田跡から多数見つかっている。基本的には東西畦畔軸に沿うような東西方向（東北東→西南西・西南西→東北東）の歩列が多い傾向を示しているが、南北畦畔軸に沿った南北方向（北→南・南→北）も見られ、第6・9号水田跡のように多数混在するものも見られる。第5号水田跡では南北方向の歩列が多く見られる。第4・41・43号水田跡は東西方向のみの歩列が見られる例である。第13・14号水田跡は東西方向に混じって南北方向の歩列が数列見られる例である。畦畔際に沿った歩列は第10・14・19・21・37号水田跡で顕著に見ることができる。足跡は畦畔部分からは見つかっていない。畦畔下部に踵が滑った状況を数々所で確認することができることから、基本的には畦畔の上を歩いていなかったことが考えられる。第37号水田跡から第36号水田跡にかけては東西方向（東→西）に向かい畦畔をまたいで歩いている様子が見られ、B区W-22・23グリッドに位置する第36号水田畦畔2（第37号水田畦畔4）下部には左足の踵が滑った痕跡を見ることができる例である（写真70）。また、第31・33・34・43・41号水田跡にかけては広域に連続する歩列（東北東→西南西）が確認できる例である。歩列の表面的な観察からは前向きに歩いている傾向が多いように思われる。足跡の産みには基本層序第BⅢ b層の中でも砂や大きめの浮石が堆積しており、洪水時には泥等の堆積があまりなかったことが想定される。基本層序第BⅣ層そのものが泥が発生しにくい成分で構成されていた可能性も否定はできないが、水田に常時水を張っていた状況ではなかった可能性も考えられる。

各々の水田跡から検出された稲株痕・足跡の状況等については表中に記してある。また、稲株痕と足跡は共に分析を委託している。稲株痕から抽出されたDNA分析等の結果は第9章第15節に、足跡の分析結果は第9章第19節にそれぞれ掲載している。

**【出土遺物】**水田面から出土した遺物はそれ程多くはなかった。土師器壺の破片が数点出土しているにすぎない。図示することはできなかったが、内面に黒色処理が施される土師器壺の細片が、第23号水田跡に残る足跡の指先と考えられる産みから出土している（写真79）。洪水によって流されてきた遺物の可能性が高い。

**【小結】**今回の調査で検出された古代のBⅣ層水田跡は周辺の状況から、本調査区を含めかなり広範囲に拡がっていたことが推測できる。また、それらがたった1度の洪水によって壊滅的な被害を受けた状況も推定できる。BⅣ層水田跡を覆っている基本層序第BⅢ a・BⅢ b層は浮石を含む砂質土が主体で水田耕作土にはおそらく適さなかったこともあり、昭和46年度以降現在に至るまで計11度の米作反収日本一になったことがあるこの場所で、古代に発生した洪水以後再び水田が造られるようになるのは近世以降まで待たなければならなかったことが堆積土の状況や上面で検出された遺構から推測できる。

## 2 水路跡（図198・199）

**【確認・構造】**BⅣ層水田跡に伴うと考えられる水路跡は東西2箇所でそれぞれ1条づつ検出された。A区及びC区から検出されている。調査区の西側A区から検出された第1号水路跡（検出時は第2号水路跡として精査）は北東方向から南西方向へやや湾曲しながら調査区を横切るように検出されてい

る。長さは約20mを測る。上面幅90~100cm、深さは20~25cmを計測する。流路は北→南方向へ緩やかな傾斜を示している。水路の断面形状はやや深い皿状を呈している。堆積土は2層に分層された。1層は水田跡を覆っている基本層序第B III b層、最下層である2層は泥の堆積層で、水が流れたり溜まっていた痕跡を示している。最下層についてはプラントオパール・花粉・珪藻分析を行っている。詳細については第9章第9節に掲載しているので参照されたい。水路跡の両脇には畦畔が造られ、東側は第23・24号水田跡、西側は第26・27号水田跡と畦畔を介し接している。水路の最低面は両脇の水田面より低い位置にある。次代の遺構や擾乱によってかなり削平されており全容を伺い知ることはできなかったが、現存する水路跡の畦畔部分からは取水口と考えられるような施設は検出できなかった。水口施設同様水田耕作土を使い塞いでいた可能性も考えられるが、そのような痕跡も確認することはできなかった。水路跡の堆積土中や底面からは図示できるような遺物は出土していない。しかし、A区G-6グリッド付近の水路跡と第24号水田跡とを区画する畦畔の下部から須恵器壺(図200-17)が1点出土している。図200-17は底部のみで口縁へ体部のほとんどを欠失する。底部には回転糸切り痕が明瞭に見られる。外面の観察からは県外の須恵器窯で作られた製品の可能性が高いものと推定される。B IV層水田跡が造られたのはこの遺物の出現以降と考えられる。

調査区の東側C区から検出された第2号水路跡(検出時には第3号水路跡として精査)は大部分が次代の遺構によって削平されていた。調査区の南側で一部が検出されたことにとどまっている。確認できた部分の長さは最長で7.2m、上面幅52~68cm、底面幅38~50cm、深さは25~36cmを計測する。I I -39グリッド付近でY字状に東西二方向に分かれている様子が見られる。東側は次代の遺構である第8・9号溝跡により削平されているため明確には解らないが、袋状に閉じるか微高地に沿うように北東方向に延びていた可能性も考えられる。西側も次代の遺構である第6号溝跡により大部分が削平されているが、第1号水路跡同様、南北に調査区を横切るように構築されていたものと思われる。水路部分の断面形状はやや幅広のU字状を呈している。水路内の堆積土は2~3層に分層された。水路全体を覆っている層はB IV層水田跡同様基本層序第B III b層である。最下層はA区第1号水路跡のような明確な泥の堆積層ではないが、底面の様相は第1号水路跡に類似している。流路は第1号水路跡同様北→南方向へ緩やかな傾斜を示している。水路跡の西側には畦畔が造られ第30号水田跡と接している。大部分が次代の遺構(第6号溝跡等)により削平を受けており、調査区南側の一部を除けば調査区北側際・I E -39グリッド付近でしか水路西側の畦畔と思われる痕跡を見ることはできないが、周辺の状況から判断すると第31号水田跡とも畦畔を介し接していた可能性は高い。水路跡の東側では畦畔が見られない代わりに大畦と考えられる高まりが形成されている。Y字交差の先、I H -39グリッドより北側にも大畦が造られていた可能性は高い。この水路跡より東側にはC1区の微高地が形成されており、水田耕作土を構成する基本層序第B IV・B V層の堆積も認められないことから、水田は造られなかったものと考えられる。

**【出土遺物】**前述したように水路跡の堆積土中や底面からは図示できるような遺物は出土していない。  
**【小結】**2条の水路跡は北から南へ緩やかな傾斜をもって造られている。これらの検出状況から考えると、本遺跡のB IV層水田跡に伴う基幹となる水路跡は、調査区の北及び南側にそれぞれ東から西に傾斜をもって造られていた可能性が高い。現在遺跡の北側には前川堰という用水路が東から西に向かつて流れている。また南側には諏訪堂堰という用水路が同じく東から西に向かつて流れている状況が確

認できる。

### 3 大畦（図199・200）

【確認・構造】大畦はC区から検出されている。II-39グリッド他に位置し、第2号水路跡の東側に接している。C1区微高地部分の基本層序第C1IX・C1X層と基本層序第B IV・B V層を基盤とし、第B IV・B V層や一部微高地部分の土が混在して構築されている状況が確認できた。調査区南側の土層断面図の観察によると、大畦の下部も洪水層と考えられる第B III b層に覆われている状況が確認できる（図192・199参照）。上面部分は次代の遺構や1950年代に行われた大規模な圃場整備に伴う削平を受けており、当時使われていた路面や全体形状を伺い知ることはできなかった。大畦と第2号水路跡底面との比高差は、削平面までで最大50cmを計測する。土層断面の観察から、大畦は水路跡から比較的緩やかな立ち上がりをもって構築されている状況が見て取れる。第2号水路跡がY字に分かれた先の部分、IH-39グリッド付近より北側にも大畦が形成されていた可能性が高いが、その部分もほとんど削平されており、2カ所でわずかに盛土の痕跡を見ることができた程度である。

【出土遺物】大畦を構成している堆積土中から土師器・須恵器片を中心に石器等比較的多くの遺物が出土している他、炭化した堅果類も出土している。図200-21は須恵器長頸壺の頸～胴部片、図200-22は同一個体と思われる底部片。両須恵器の胎土の蛍光X線分析の結果からは、秋田県の日本海側に所在する海老沢窯で生産された製品の可能性を示す数値が得られている（第9章第20節参照）。また、堅果類の分析結果は第9章第17節に掲載している。

【小結】大畦を構成する土の中から比較的多くの遺物が出土しており、B IV層水田が造られた時期はこれらの遺物の出現以降と推定できる。大畦中から出土した炭化物は2点について放射性炭素年代測定を行っており、それぞれ $1320 \pm 30$ yrBP及び $1272 \pm 29$ yrBPという結果が得られている。詳細については第9章第2・3節に掲載している。

### 4 B V層水田跡（図200・201）

【確認】B V層水田跡はB IV層水田跡の下から検出された。調査区の全域ではなくB区の一部で検出されている。当初はB IV層第1・2号水田跡の擬似畦畔Bとも考えられたが、断面観察からは擬似畦畔Bの下部に存在し、内側にややずれた場所から畦畔状の高まりが確認されることからB V層水田跡として確認した。時間的な制約もあり調査区A～C区にかけて全面でのB V層水田跡の確認は行っていないが、部分的な深掘りの状況からはB IV層水田跡と同じような範囲で耕作が行われていた可能性は低いものと推定される。

【畦畔の状況】B区の一部での検出だったこともあり、確認された畦畔は3条である。位置的にはB区「第1号水田畦畔4（第2号水田畦畔2）」及び「第3号水田畦畔1（第2号水田畦畔4）」の内側や、「第4号水田畦畔3（第39号水田畦畔1）」で検出されている。上層の土圧の影響や後世の削平によってかなり削られている部分も多いため、部分的な確認にとどまった。本来の畦畔の下部に存在することの多い擬似畦畔Bのような検出状況であったが、高低差は比較的顕著に認められた。畦畔頂部と水田面との比高差は最大で数cmを測る。

【耕作土】耕作土は基本層序第B V層を搅拌していたものと思われる。耕作土の色調は比較的暗い褐灰

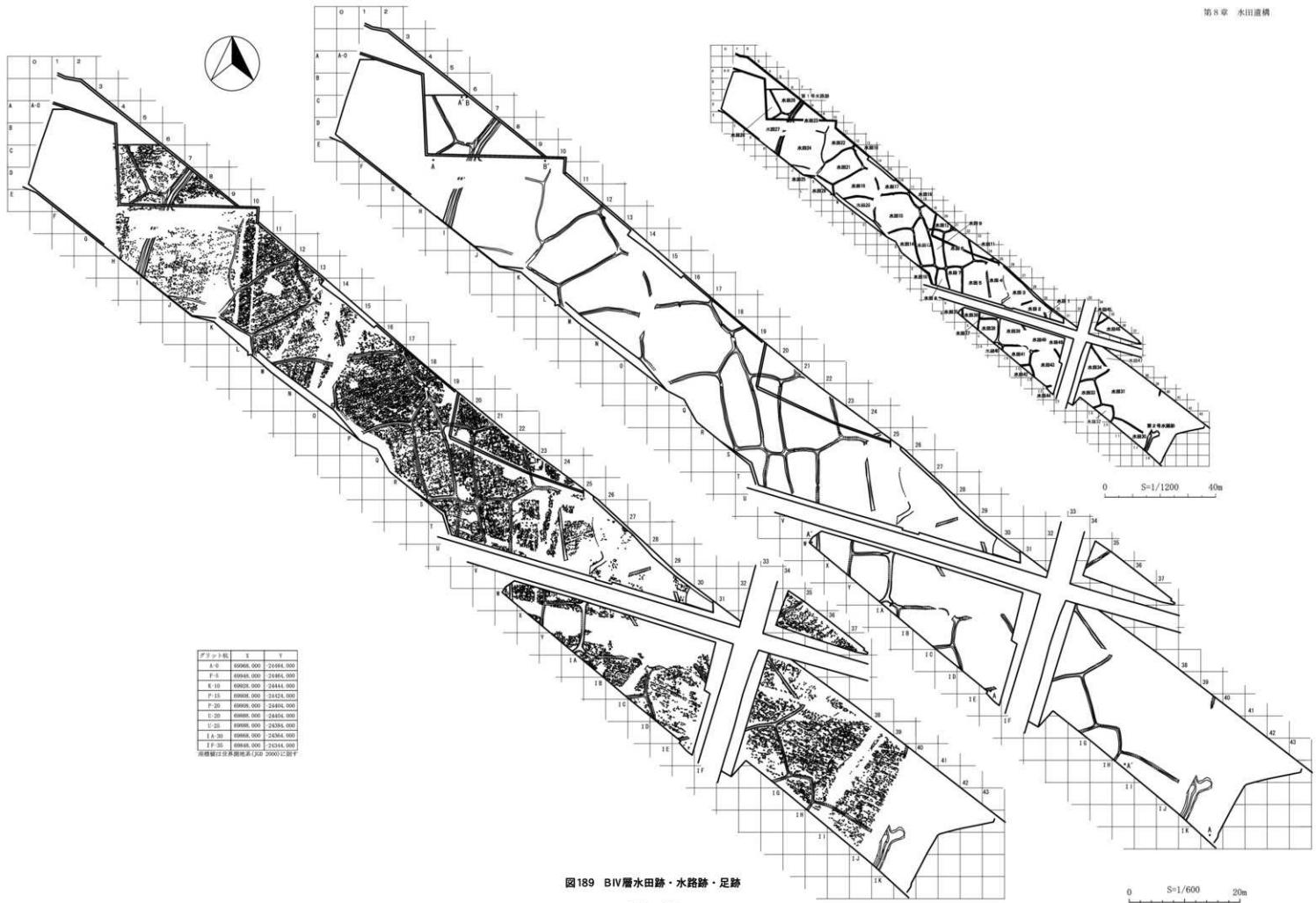
色を呈している。耕作土下部の酸化鉄やマンガン粒の集積は、場所によっては明瞭に形成されており、比較的長期間水田耕作が行われていた可能性も考えられる。いずれにしても当地における古代水田造営の初現であった可能性が高い。

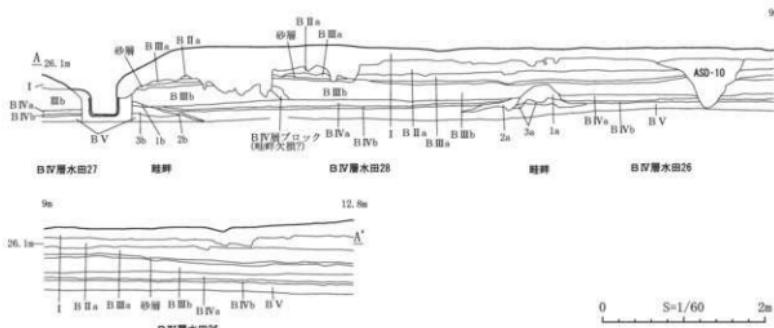
【出土遺物】水田面からの遺物の出土はなかったが、基本層序第B V層中から土師器の破片が1点出土している（図200-24）。図200-24は土師器坏の口縁～体部片で、体部に横走する沈線により段を形成し、内面には黒色処理及びミガキ調整が施されている。奈良時代の所産の可能性も考えられる。

【小結】B IV層水田跡が造られる前段階の水田遺構である。畦畔の検出状況から判断すれば、一区画はB IV層水田跡と同じような規模で造られていた可能性が高い。前述したように基本層序第B IV層の下部に存在する基本層序第B V層を攪拌して耕作土としていたものと思われるが、第B IV層に水田面を覆われたことにより耕作を中止せざる得なくなったものと判断される。基本層序第B V層やその下に存在する第B VI層も砂粒といった混入物に多少の差はあるものの基本的に第B IV層と土の質は変わらない。第B IV・B V層が水田耕作に適した土であることは、第B VI層も水田耕作にはある程度適していた土であったものと判断される。基本層序第B V層段階で始められた水田造営は、上層の第B IV層段階で飛躍的に発展したものと考えられる。周辺の自然・地理的条件等を水田造営に適した環境・状態に整える技術や労力を持っていた結果と考えられる。

(笹森)





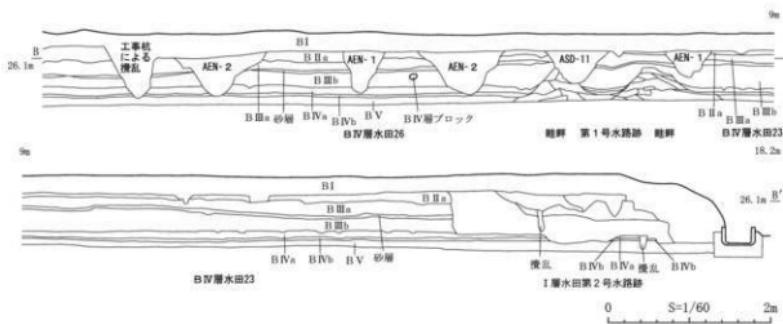


## A区ロングセクション A-A'

第B I 层	耕作土
第B IIa層	2次堆積層
第B IIIa層	10YR5/3 にぶい黄褐色土。浮石を多量に含む、粘性弱、しまり強 B IIIa層に由来する堆積層、浮石を含む
砂層	10YR5/2 灰黃褐色土。浮石を多量に含む、粘性弱、しまり強
第B IVa層	やや粘性的強い砂質粘土。水田耕作上、畦畔を構成する土
第B IVb層	10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、粘性強、しまり強 (BIV層水田耕作上)
第B V層	10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、マシガラ粒子少量、酸化鉄粒子多量混入、粘性やや強、しまり強 10YR5/3 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、酸化鉄粒子少量混入。粘性やや強、しまり強

## 畦畔部分

1a帯	10YR5/4 にぶい黄褐色土 マシガラ粒子マーブル状含、浮石φ2~3mm少量混入、砂質粘土、粘性やや強、しまり強
2a帯	10YR5/4 黄褐色土 マシガラ粒子マーブル状含、砂質粘土、酸化鉄粒子少量混入、砂質粘土、粘性やや強
3a帯	10YR5/4 にぶい黄褐色土 1層多くマシガラ粒子含、酸化鉄粒子多量含、浮石やや強、しまり強
4a帯	10YR5/4 にぶい黄褐色土 マシガラ粒子多量混入、砂質粘土、粘性やや強、しまり強
5a帯	10YR5/4 黄褐色土 マシガラ粒子多量混入、砂質粘土、粘性やや強、しまり強
6a帯	10YR5/4 にぶい黄褐色土 マシガラ粒子マーブル状に多量混入、酸化鉄粒子少量混入、砂質粘土、粘性やや強



## A区ロングセクション B-B'

第B I 層	耕作土
第B IIa層	2次堆積層
第B IIIa層	10YR5/3 にぶい黄褐色土。浮石を多量に含む、粘性弱、しまり強 B IIIa層に由来する堆積層、浮石を含む
砂層	10YR5/2 灰黃褐色土。浮石を多量に含む、粘性弱、しまり強
第B IVa層	やや粘性的強い砂質粘土。水田耕作上、畦畔を構成する土
第B IVb層	10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、粘性強、しまり強 (BIV層水田耕作上)
第B V層	10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、酸化鉄粒子少量混入、粘性やや強、しまり強 (BIV層水田不透水層)
第B VI層	10YR5/3 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体、酸化鉄粒子少量混入。粘性やや強、しまり強

図190 B IV層水田跡 A区ロングセクション

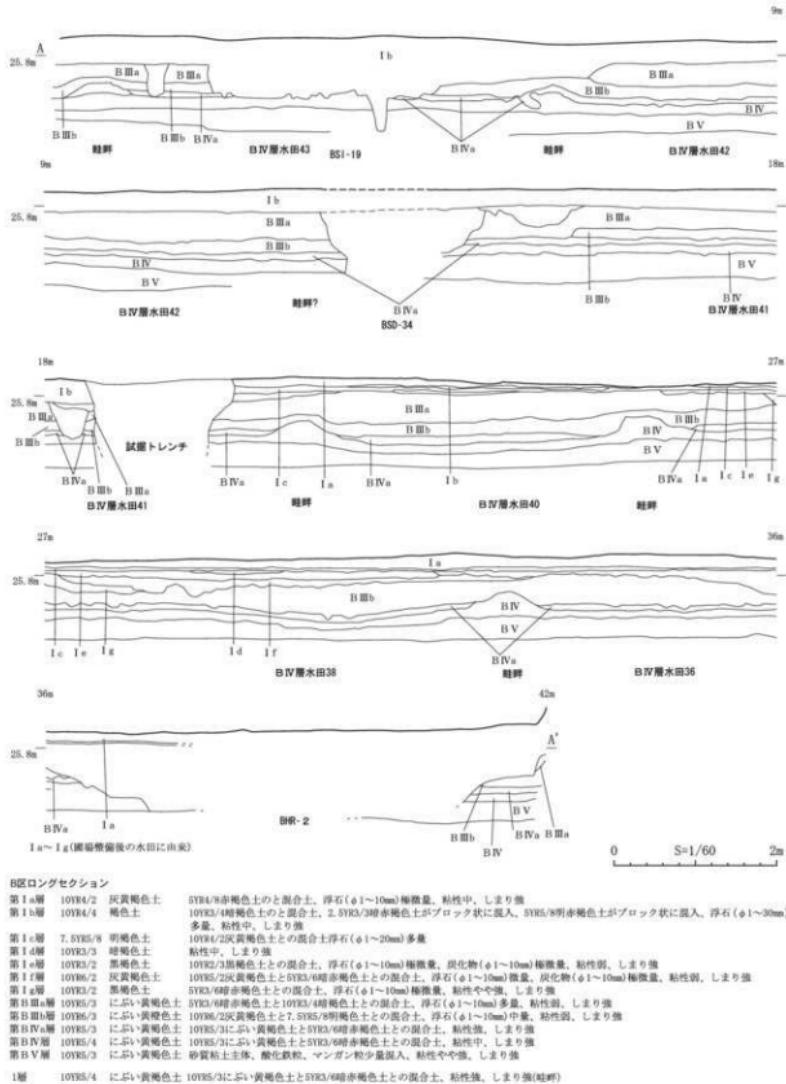
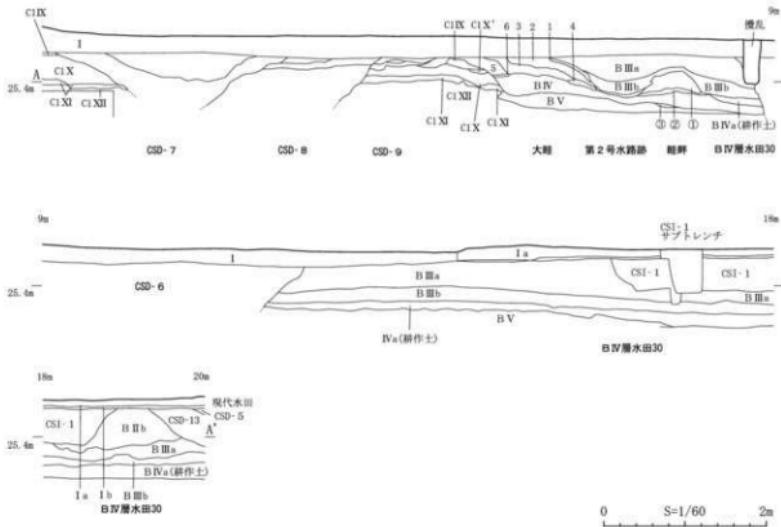


図191 B IV層水田跡 B区ロングセクション



## C区ロングセクション

第1層 トレンチ埋土

第1a層 現代水田耕作土

第1b層 現代水田不透水層

第2b II b層 10Y32/4 喀斯特土

第2b II a層 10Y36/3 にぶい黄褐色土

第2b III a層 10Y36/4 黄褐色土

第2b IV 層 10Y36/4 にぶい黄褐色土

第2b V 層 10Y36/1 楊灰色土

C IX 層 10Y36/2 黄褐色粘土

C X 層 10Y36/2 黄褐色土

C X' 層 10Y36/1 黑色粘土質

C XI 層 10Y36/2 楊灰色土

C XII 層 10Y36/3 にぶい黄褐色粘土

白色浮石微量混入。粘性弱。しまり中

白色浮石多量。少數mmの砂礫多量。粘性なし。しまり中

白色浮石少量。少數mmの砂礫多量。粘性弱。しまり中

白色浮石土体。粘性強。しまり強(B IV層水田耕作土)

同色粘土土体。粘分を微粒に含む。粘性強。しまり強

10Y34/4 楊灰色土の漂土層。粘性強。しまり中

10Y34/2 黄褐色土の漂土層。粘性強。しまり中

10Y36/6 例黄褐色土粘7%。所状に集積した下端部少量混入。粘性強。しまり中

10Y36/6 例黄褐色土粘5%。漂土物漂少枝3%。粘性強。しまり中

砂質粘土土体。マンガン粒子が縦上に多量混入。粘性強。しまり強

白色粘土土体。砂粒炭化物少量混入。粘性強。しまり中

白色粘土土体。粘性やや強。しまり中

B IV層主体。鉄分・炭化物少量混入。粘性弱。しまり中

B IV層主体。鉄分・マンガン・粘少多量混入。粘性強。しまり中

同色粘土上IV層が混入。鉄分多量に含む。粘性強。しまり強

同色粘土土体。鉄分少量混入。粘性強。しまり強

砂砂粒少量。マンガン粒子が縦上に多量混入。粘性強。しまり強

同色粘土土体。砂粒炭化物少量混入。粘性強。しまり中

E柱

1層 10Y34/3 にぶい黄褐色土

2層 10Y34/2 にぶい黄褐色土

3層 10Y36/2 黄褐色土

4層 2. 10Y36/1 黄褐色土

5層 10Y36/2 黄褐色土

6層 10Y36/1 楊灰色土

7層 10Y36/3 にぶい黄褐色土

8層 10Y36/3 にぶい黄褐色土

9層 10Y36/3 黄褐色土

細砂粒20%、浮石微量、炭化物微量混入。粘性弱。しまり中

細砂粒10%、浮石・炭化物微量、鉄分5%混入。粘性強。しまり中

細砂粒10%、全体的に部分混入。粘性強。しまり中

図192 B IV層水田跡C区ロングセクション

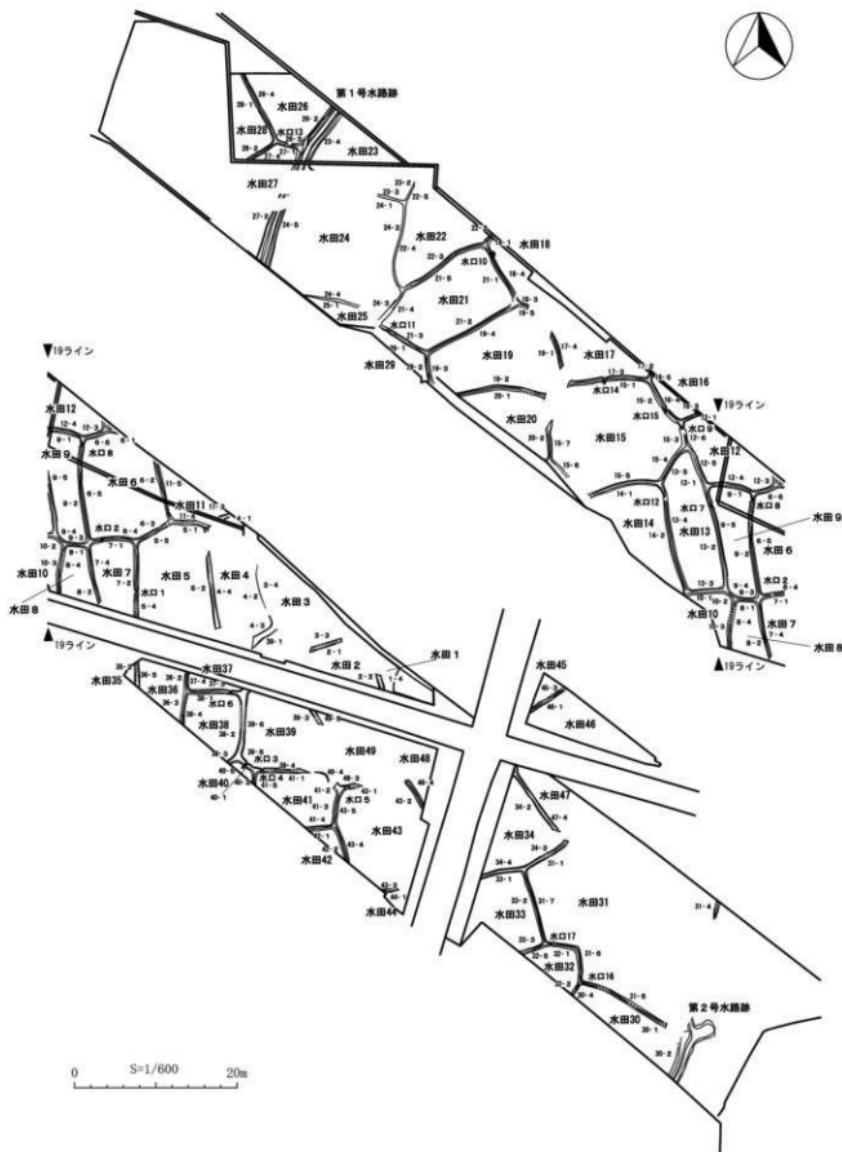


図193 B IV層水田跡・水口施設

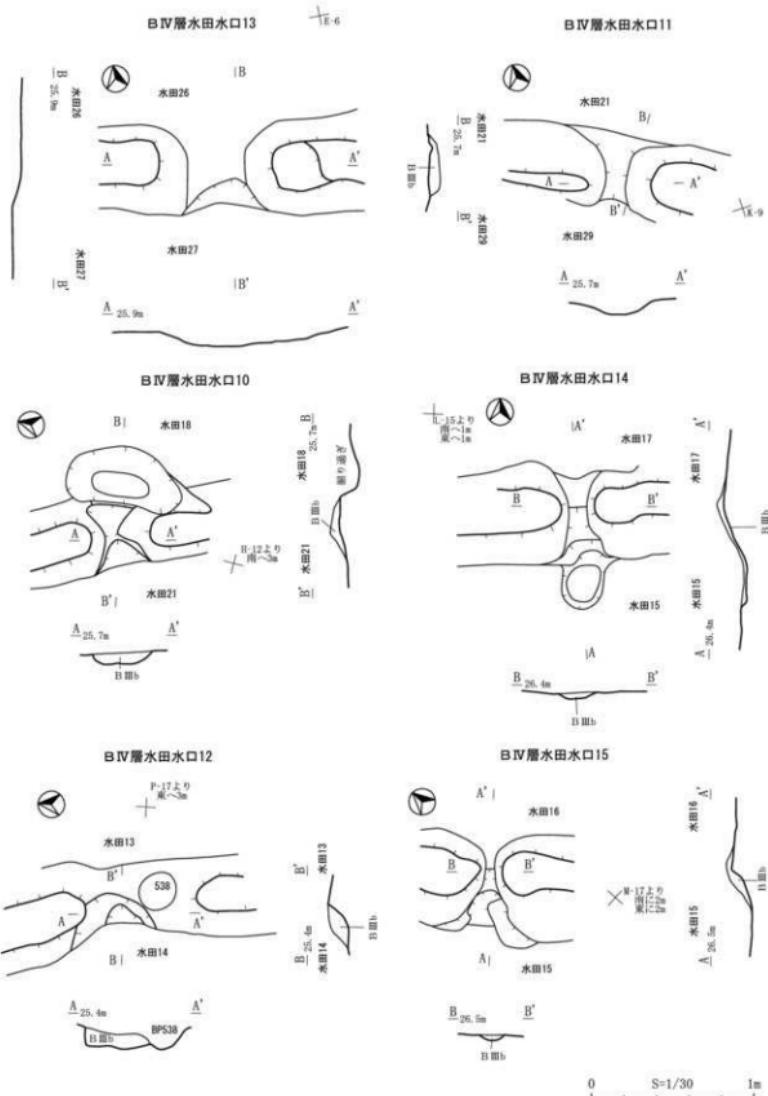


図194 B IV層水田水口施設(1)

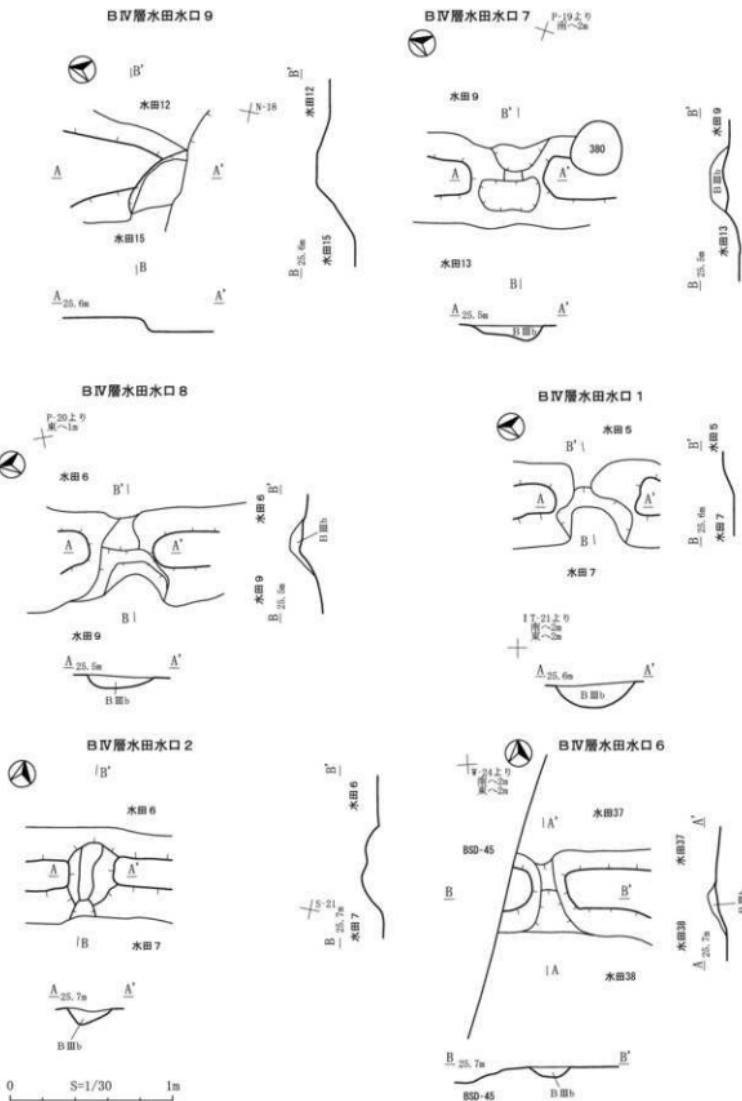


図195 B IV 層水田水口施設 (2)

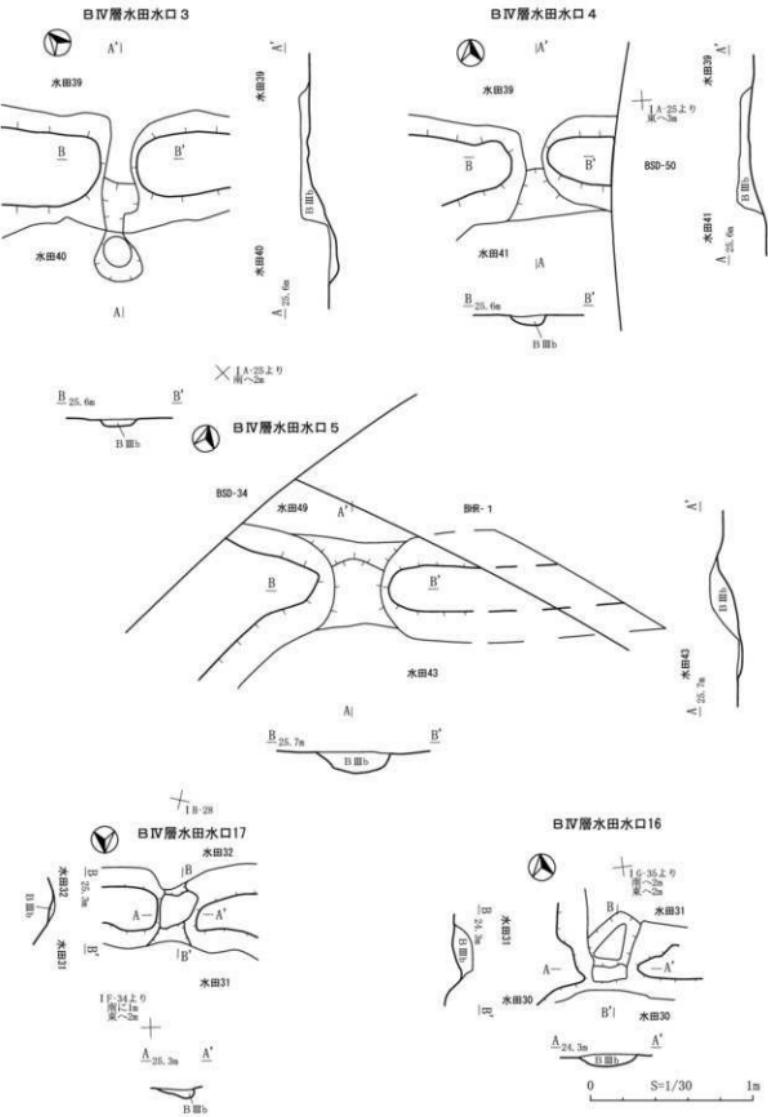


図196 B IV層水田水口施設 (3)

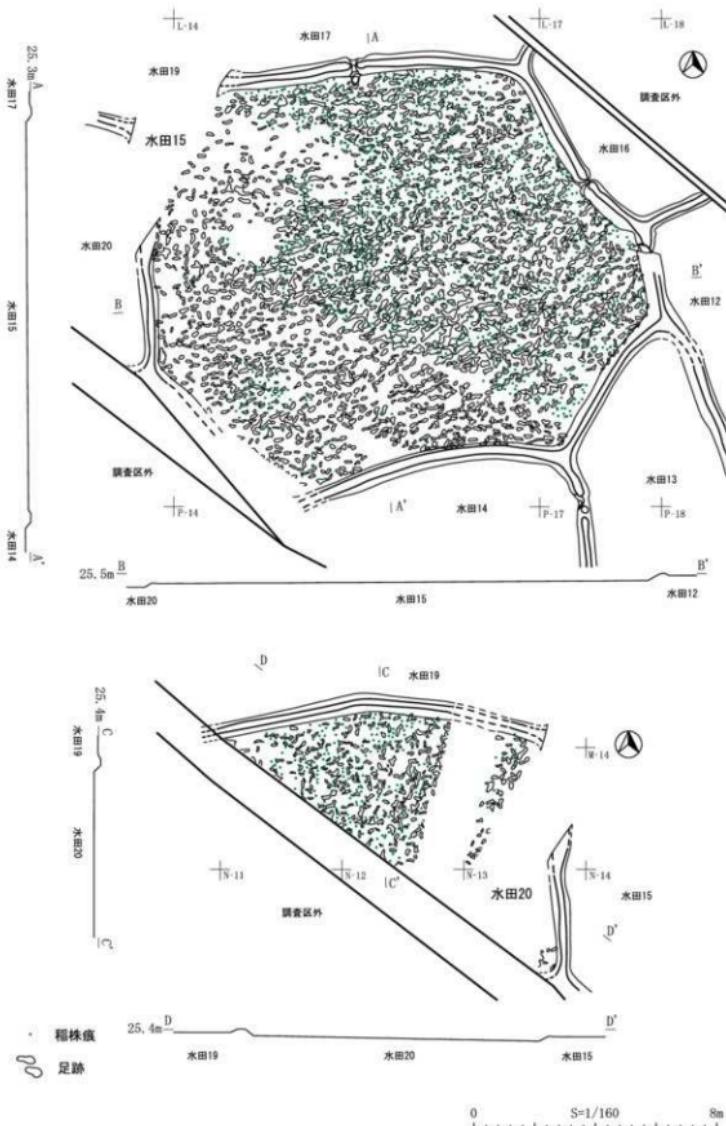


図197 B IV層水稻跡の稻株痕と足跡

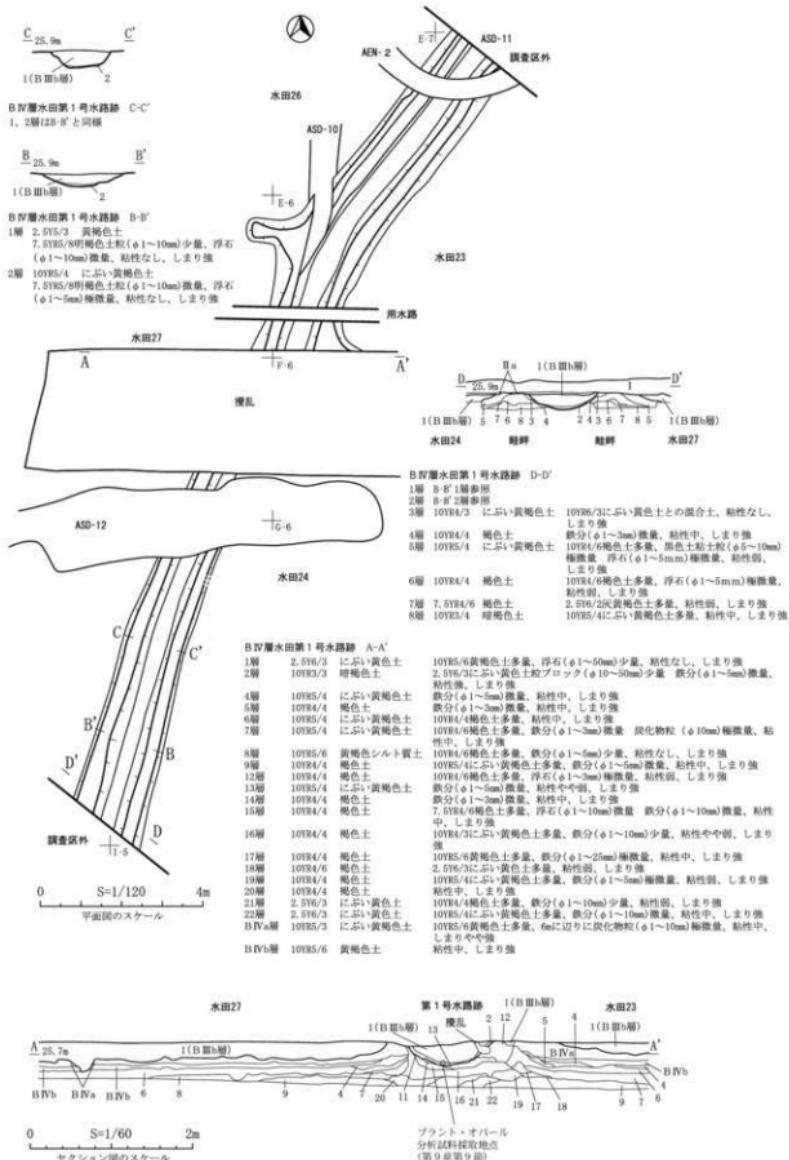
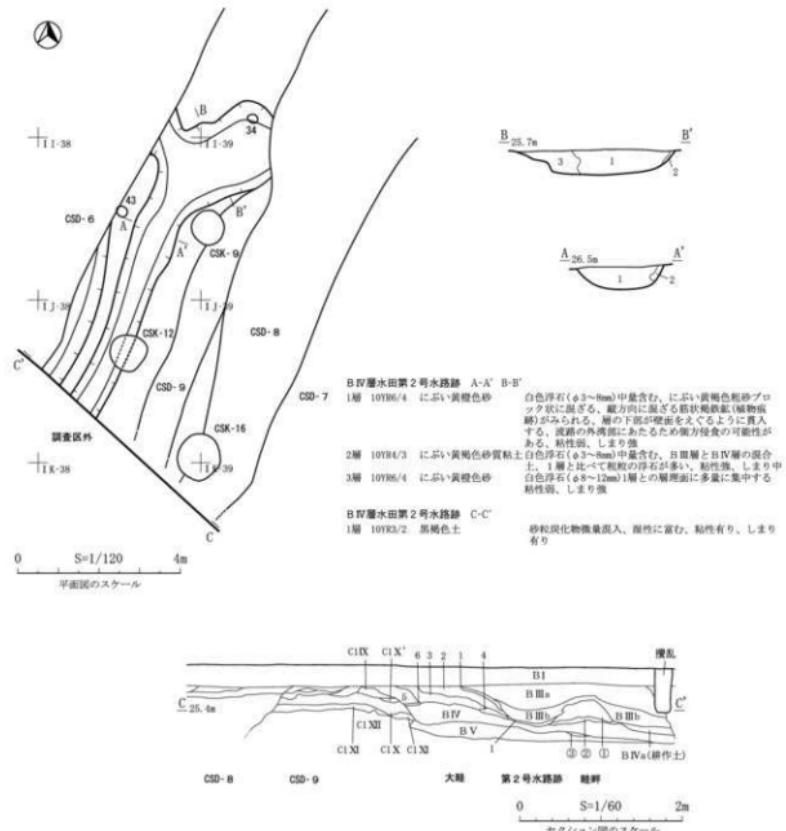


图 198 B IV 层水田第 1 号水路跡・畦畔



**大畦**  
①層 10YR6/3 に赤い黄褐色土 B IV 層主体。鉢分・炭化物少量混入。粘性や有り。しまり有り  
②層 10YR4/3 に赤い黄褐色土 B IV 層主体。鉢分・炭化物少量混入。粘性や有り。しまり有り  
③層 10YR5/3 に赤い黄褐色土 同色粘土主体。鉢分・炭化物少量混入。粘性や有り。しまり有り  
④層 2.5VS8/3 黄灰土 同色粘土主体。鉢分少量混入。粘性有り。しまり有り  
⑤層 10YR5/2 灰黃褐色土 粘砂粘土質。マンガニン粘土が根上に多量混入。粘性有り。しまり有り  
⑥層 10YR6/1 棕灰色土 同色粘土主体。砂粒炭化物微量混入。粘性有り。しまり有り

**畦畔**  
①層 10YR6/3 に赤い黄褐色土 粘砂粘土20%。浮石微量。炭化物微量混入。粘性や有り。しまり有り  
②層 10YR4/3 に赤い黄褐色土 粘砂粘土10%。浮石・炭化物微量。鉢分5%混入。粘性有り。しまり有り  
③層 10YR3/3 棕褐色土 粘砂粘土10%。全体的に鉢分混入。粘性有り。しまり有り

B IV 層 10YR6/3 に赤い黄褐色土 白色浮石20%。φ微2mm砂礫多量。粘性なし。しまり中  
B IV 層 10YR6/3 に赤い黄褐色土 白色浮石多量。φ微2mm砂礫少。粘性なし。しまり中  
B IV 層 10YR6/3 に赤い黄褐色土 同色粘土主体。鉢分・炭化物微量混入。粘性有り。しまり中  
B IV 層 10YR6/3 棕褐色土 同色粘土主体。鉢分少量混入。粘性強。しまり強  
B V 層 10YR4/4 棕褐色土 10YR4/4褐色土との接壤部。粘性強。しまり中  
C I 層 10YR4/2 灰黃褐色土 10YR6/6灰褐色土7%。根状の鉢根7%。根状に集積した下部少量混入。粘性強。しまり中  
C I 層 10YR4/2 に赤い黄褐色粘土 同色粘土主体。鉢分3%。粘性強。しまり中  
C I 層 10YR6/6 黑褐色土 砂質粘土主体。マンガニン粘土少量混入。白色粘土10%混入。粘性強。しまり強 (大畦盛土の一部)  
C I 層 10YR6/3 に赤い黄褐色粘土 10YR4/6褐色土がわずかに砂を含み下面に混入。点状・雲状の鉢根15%。粘性やや強。しまり中

図199 B IV 層水田第 2 号水路跡・大畦・畦畔

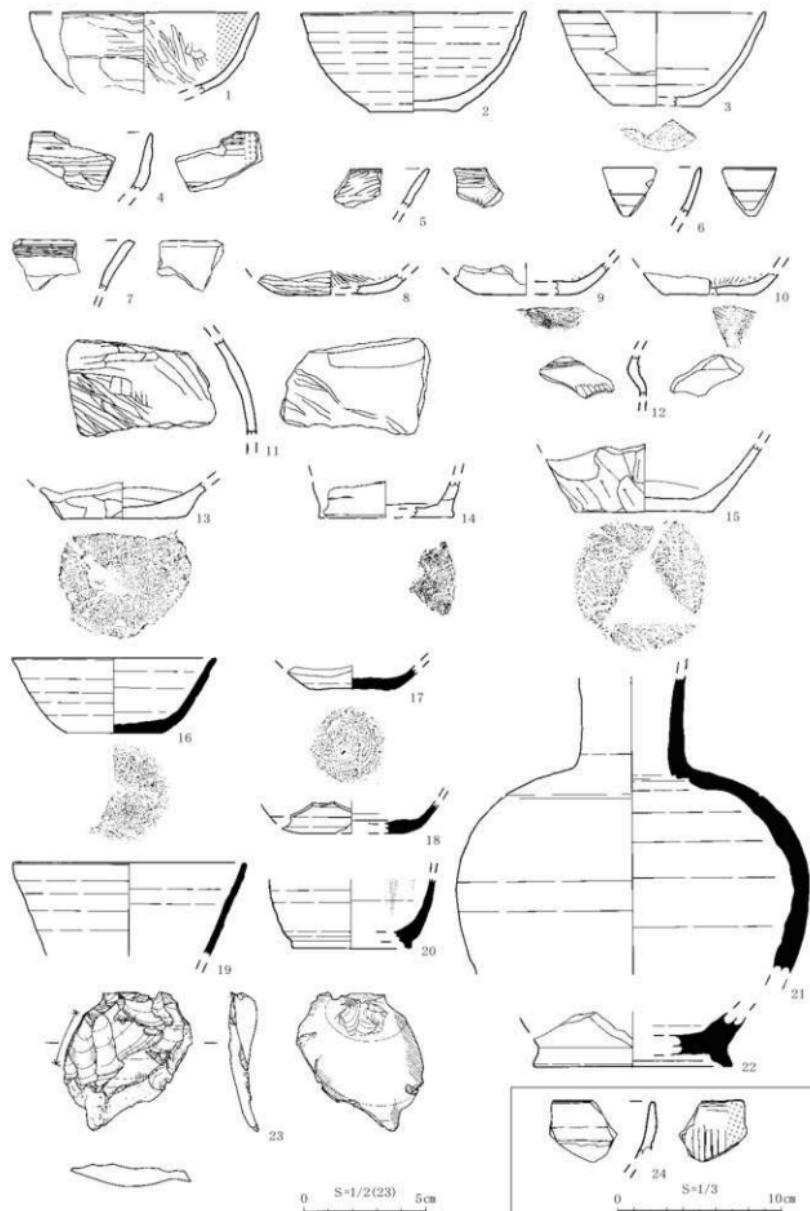


图200 BIV・BV層水田跡出土遺物

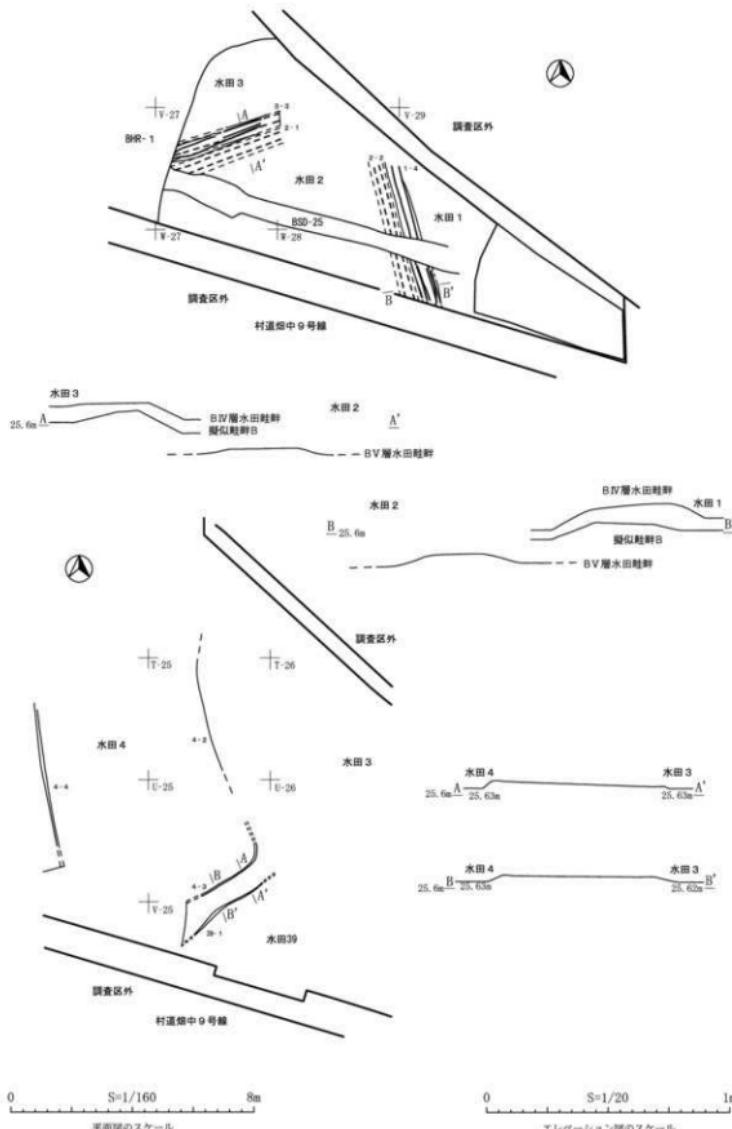


図201 BIV・BV層水田跡

B IV層水田区画計測表

水田名	平面形	標 高(m)	比高差(m)	推定面積(m)	推定面積(m)	耕作土の色調	構造する水田の高低	水田面の比高差(cm)	稻(株)の有無	足跡の有無	備 考
1	長方形	25.66	—	4.3×1.9	(8.19)	褐色	→水田2 →水田4 水田3→	5 5 4	×	○	
2	長方形	25.62~25.61	0.1	12.7×7.2	(31.49)	褐色	→水田2 →水田4 →水田5 →水田6 水田3→	4 2~3 8~11 — 2~3	×	○	
3	長方形	25.68~25.62	0.5	15.1×5.5	(64.24)	褐色	→水田2 →水田4 →水田5 →水田6 水田3→	4 2~3 8~11 — 2~3	×	○	
4	長方形	25.63~25.58	1.5	13.6×8.7	(81.14)	褐色	→水田2 →水田4 →水田5 →水田6 水田3→	4 2~3 8~11 — 2~3	×	○	
5	龜甲形	25.55~25.40	2.5	16.0×12.5	(104.81)	にぶい黄褐色	→水田7 →水田4 水田11→ 水田6→	6~12 8~11 2~6 3~4	×	○	
6	龜甲形	25.51~25.39	1.2	13.0×9.5	(105.94)	にぶい黄褐色	→水田5 →水田7 →水田9 水田11→ 水田12→	3~4 5~8 3~8 7~9 2~3	○	○	
7	長方形	25.45~25.33	1.2	9.1×5.3	(40.43)	にぶい黄褐色	→水田8 →水田5 水田6→	4~13 6~12 5~8	○	○	
8	長方形	25.37~25.27	1.0	6.3×3.6	(22.21)	にぶい黄褐色	→水田10 →水田7 水田9→	9~10 4~13 5	○	○	
9	長方形	25.42~25.29	1.3	13.6×3.3	48.78	にぶい黄褐色	→水田8 →水田10 →水田13 水田6→ 水田12→	5 10 7~10 3~8 1~6	○	○	
10	長方形	25.28~25.17	1.1	6.6×6.4	(16.19)	にぶい黄褐色	→水田8 →水田9 水田13→	9~10 10 6~7	○	○	
11	龜甲形	25.59~25.53	0.6	6.2×6.1	(26.54)	にぶい黄褐色	→水田4 →水田5 →水田6	1~2 2~6 7~9	○	○	
12	龜甲形	25.45~25.34	1.1	12.0×5.7	(49.45)	にぶい黄褐色	→水田6 →水田9 →水田13 →水田15 水田16→	2~3 1~6 11~13 14~15 2	○	○	
13	長方形	25.34~25.07	2.7	17.1×5.3	76.95	にぶい黄褐色	→水田10 →水田14 水田9→ 水田12→ 水田15→	6~7 7~9 7~10 11~13 4~5	○	○	
14	長方形	24.16~24.08	0.8	12.6×7.8	(52.66)	にぶい黄褐色	→水田13 →水田15	7~9 9~10	○	○	
15	不整形	25.29~25.04	2.5	16.0×12.5	(168.64)	にぶい黄褐色	→水田20 →水田13 →水田14 →水田X 水田12→ 水田16→ 水田17→	10 4~5 9~10 — 14~15 20~24 10~18	○	○	水田面の一部が距離より高い位置(標高)に存在する
16	長方形	25.40~25.28	1.2	6.3×2.1	(10.19)	にぶい黄褐色	→水田12 →水田15 →水田17 →水田15 水田16→	2 20~24 7 10~18 1~2 7	○	○	
17	長方形	25.30~25.23	0.7	10.3×9.4	(66.20)	にぶい黄褐色	→水田15 →水田19 水田16→	10~18 1~2 7	○	○	

水田名	平面形	標 高(m)	比高差(m)	推定堤幅(m)	推定面積(m <sup>2</sup> )	耕作土の色調	備 案	水田面のうねりが 著しく、畔より高い位置(標高)に 存在する部分も見 受けられる
18	長方形	25.53~25.49	0.4	9.1×40	(248.6)	にぶい黄褐色	○ ○	
						→水田19 14 →水田21 3~4 水田22~ 10		
19	長方形	25.38~25.29	0.9	15.1×7.5	(115.72)	にぶい黄褐色	○ ○	
						→水田20 13~14 →水田29 10 水田17~ 1~2 水田18~ 14 水田21~ 9~13		
20	長方形	25.23~25.07	1.6	9.5×7.9	(48.34)	にぶい黄褐色	○ ○	
						水田19~ 13~14 水田15~ 10 →水田19 9~13 →水田29 1~2		
21	長方形	25.53~25.44	0.9	14.0×8.0	110.37	にぶい黄褐色	○ ○	
						水田18~ 3~4 水田22~ 9~10 水田24~ -		
22	亀甲形	25.63~25.58	0.5	11.8×10.9	(81.31)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田18 10 →水田21 9~10 水田23~ - 水田24~ -		
23	長方形	25.70~25.69	0.1	12.0×6.4	(73.65)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田22 - →水田24 - →水田21 - →水田22 -		
24	不整形	25.70	-	15.6×13.8	(200.49)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田25 - 水田23~ -		
25	長方形	-	-	9.5×2.5	(15.50)	にぶい黄褐色	×	○
26	不整形	25.71~25.69	0.2	9.3×6.8	(55.51)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田27 1~2 →水田28 5~6		
27	不整形	25.70~25.60	0.8	13.7×5.5	(66.63)	にぶい黄褐色	×	○
						水田26~ 1~2 水田28~ 1~2		
28	長方形	25.65~25.60	1.0	10.8×4.3	(44.91)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田27 1~2 水田26~ 5~6		
29	亀甲形	-	-	7.6×1.8	(14.25)	にぶい黄褐色	×	○
						水田19~ 10 水田21~ 1~2 →水田32 4		
30	長方形	25.24~25.05	1.9	14.4×3.3	(41.46)	にぶい黄褐色	○ ○	
						水田31~ 3~5 →水田30 3~5 →水田32 7~14 →水田33 2~3 水田34~ 1~2		
31	不整形	25.36~25.04	3.2	21.9×14.5	(350.58)	にぶい黄褐色	○ ○	
						水田39~ 4 水田31~ 7~14 水田33~ 7~8		
32	不整形	25.11~24.96	1.5	6.4×3.4	(15.33)	にぶい黄褐色	○ ○	
						→水田32 7~8 水田31~ 2~3 水田34~ 4~5		
33	長方形	25.24~25.06	1.8	9.7×6.1	(53.34)	にぶい黄褐色	○ ○	
						→水田31 1~2 水田33 4~5 水田47~ 1~4		
34	亀甲形	25.35~25.25	1.0	7.7×6.5	(58.57)	にぶい黄褐色	○ ○	
						水田36~ 7~8 →水田35 7~8 水田37~ 5~6 水田38~ 4		
35	長方形	25.32~25.31	0.1	1.9×1.2	(1.86)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田36~ 7~8 →水田35 7~8 水田37~ 5~6 水田38~ 4		
36	長方形	25.45~25.39	0.6	5.6×4.8	(26.63)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田36~ 5~6 水田38~ 4		
37	長方形	25.51~25.49	0.2	5.2×1.6	(7.62)	にぶい黄褐色	×	○
						→水田36~ 5~6 水田38~ 2~5 水田37~ 2~5 水田39~ 1~9		
38	長方形	25.50~25.39	1.1	6.7×7.0	(43.27)	にぶい黄褐色	×	○

水田No.	平面形	標 高(m)	比高差(cm)	推定規様(m)	推定面積(m <sup>2</sup> )	耕作土の色調	準ずる水田の高低	水田面の比高差(cm)	稻(株)底の有無	足跡の有無	備 考
39	不整形	25.54~25.40	1.4	17.0×7.7 (124.27)		褐灰色	→水田38	1~9	×	○	
							→水田40	10~11			
							→水田41	4~11			
							水田4→	—			
							水田49→	2~3			
40	不整形	25.37~25.28	0.9	3.3×1.0	(268)	褐灰色	水田38→	5	○	○	
41	長方形	25.42~25.34	0.8	9.2×6.7 (46.36)		褐灰色	水田39→	10~11	○	○	
							水田41→	7			
							→水田40	7			
							→水田42	13~14			
							水田39→	4~11			
42	長方形	25.24~25.15	0.9	2.9×2.0	(6.19)	にぶい黄褐色	水田43→	1~9	○	○	
43	亀甲形	25.39~25.23	1.6	13.1×10.3 (112.05)		にぶい黄褐色	水田41→	13~14	○	○	
							水田43→	1~9			
							→水田41	1~2			
							→水田42	1~9			
							水田44→	6			
44	長方形	25.26	—	3.1×2.7 (5.34)		にぶい黄褐色	水田43→	6	○	○	
45	長方形	25.34~25.25	0.9	3.1×1.9 (5.31)		にぶい黄褐色	水田46→	2~3	○	○	
46	長方形	25.33~25.31	1.2	7.5×4.4 (44.75)		にぶい黄褐色	水田45→	2~3	○	○	47と同一の性能有
47	長方形	25.37~25.26	1.1	8.8×3.4 (28.31)		にぶい黄褐色	→水田34	1~4	○	○	46と同一の性能有
48	長方形	25.41~25.40	0.1	5.5×3.4 (17.82)		褐灰色	→水田43	4~6	○	○	
49	長方形	25.58~25.48	1.0	8.9×6.6 (58.47)		褐灰色	→水田39	2~3	×	×	田面は畦幹部の一部のみで、稻(株)底と足跡は未検出
							→水田41	—			
							→水田43	8~9			

\*水田No.は第〇号水田・水田○と同一

\*推定規様は標高で記載と短軸・推定面積は畦幹の内法で算出( )は残存値

\*→の左が空欄の場合は当該水田が高位。→右が空欄の場合は当該水田が低位の水田になっている

\*稻(株)底の有無については、×(未検出)の水田についても存在していた可能性が高い

\*は計測不能

## B IV層水田水口計測表

水口No.	水口の存在する畦畔	水流通方向(高→低)	比高差(cm)	最狭幅(cm)	最狭幅(cm)	備 考
1	第5号水田畦畔4(第7号水田畦畔2)	水田5→水田7	4	10	50	
2	第6号水田畦畔4(第7号水田畦畔1)	水田6→水田7	2	7	30	
3	第39号水田畦畔4(第40号水田畦畔1)	水田39→水田40	10	12	28	下部水田面に落ち込み有
4	第39号水田畦畔3(第41号水田畦畔1)	水田39→水田41	7	14	32	
5	第43号水田畦畔1(第49号水田畦畔2)	水田49→水田43	5	22	47	
6	第37号水田畦畔3(第38号水田畦畔1)	水田37→水田38	4	5	27	
7	第9号水田畦畔4(第13号水田畦畔2)	水田9→水田13	6	12	50	
8	第6号水田畦畔5(第9号水田畦畔2)	水田6→水田9	8	9	39	
9	第12号水田畦畔6(第15号水田畦畔3)	水田12→水田15	—	—	—	亂れのため計測不能
10	第18号水田畦畔4(第21号水田畦畔1)	水田18→水田21	2	11	40	
11	第21号水田畦畔3(第29号水田畦畔1)	水田21→水田29	2	8	38	
12	第13号水田畦畔4(第14号水田畦畔2)	水田13→水田14	5	10	68	
13	第26号水田畦畔3(第27号水田畦畔1)	水田26→水田27	4	34	63	
14	第15号水田畦畔1(第17号水田畦畔3)	水田17→水田15	6	6	25	
15	第15号水田畦畔2(第16号水田畦畔4)	水田16→水田15	6	5	14	
16	第30号水田畦畔1(第31号水田畦畔3)	水田31→水田30	4	20	34	
17	第31号水田畦畔4(第32号水田畦畔1)	水田31→水田32	5	13	28	

\*第〇号水田と水田〇は同一

\*比高差は水口部分の差であって広域な水田面の差ではない

\*は計測不能

## B IV 淀水田畦畔計測表

畦 畦 No.	輪 方 向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	水田面の高低 高位水田～低位水田	水田面からの高さ(cm) 高位水田 低位水田	備 考
第1号水田畔(4第2号水田畔2)	N-14°-W	0.899	34	63	水田1～水田2	5 9	
第2号水田畔(4第3号水田畔2)	N-63°-E	0.779	26	46	水田3～水田4	7	
第3号水田畔(4第4号水田畔2)	N-63°-E	0.777	62~70	76	水田5～水田6	1~2 3~4	
第4号水田畔(3第49号水田畔1)	N-61°-E	0.527	—	—	水田4～水田39	—	
第4号水田畔(4第3号水田畔2)	N-10°-W	0.977	26~34	46~53	水田4～水田5	4~8 10~18	
第4号水田畔(1第11号水田畔3)	N-70°-E	0.251	—	78	水田11～水田4	0~1 8	
第5号水田畔(1第1号水田畔4)	N-83°-W	4.23	16~24	38~57	水田11～水田5	11~14 14~16	
第5号水田畔(4第7号水田畔2)	N-1°-W	0.241	16~22	46~56	水田5～水田7	10~11 16~20	水口1
第5号水田畔(5第6号水田畔3)	N-60°-E	5.02	20~28	46~52	水田5～水田6	10~14 11~18	
第6号水田畔(2第6号水田畔5)	N-15°-W	0.751	18~20	56~55	水田11～水田6	6 11	
第6号水田畔(4第5号水田畔1)	N-88°-E	5.73	18~21	49~52	水田6～水田7	9~10 15~17	水口2
第6号水田畔(5第6号水田畔2)	N-5°-W	1.28	14~18	38~56	水田6～水田9	9~11 11~20	水口8
第7号水田畔(4第7号水田畔2)	N-70°-E	0.223	22~23	51~58	水田12～水田10	1~2 15~17	
第7号水田畔(4第8号水田畔2)	N-71°-W	0.711	16~18	38~48	水田9～水田8	6~10 13~19	
第8号水田畔(1第9号水田畔3)	N-85°-W	5.73	18	46	水田9～水田8	11 16	
第8号水田畔(4第10号水田畔3)	N-10°-E	0.611	16~24	48~66	水田8～水田10	6~15 15~24	
第9号水田畔(4第10号水田畔2)	N-37°-W	1.68	16	56	水田9～水田10	13 22	
第9号水田畔(4第12号水田畔3)	N-80°-W	5.89	20~23	46~57	水田12～水田9	10~14 10~16	
第9号水田畔(5第13号水田畔2)	N-11°-W	1.299	19~27	44~53	水田9～水田13	6~9 15~19	水口2
第10号水田畔(1第3号水田畔3)	N-85°-E	4.66	26~28	57~58	水田13～水田10	10~14 17~19	
第12号水田畔(1第6号水田畔3)	N-66°-E	0.243	20	42	水田12～水田16	8 12	
第21号水田畔(6第5号水田畔3)	N-6°-W	3.2	16~26	54~58	水田12～水田15	9~10 23~24	水口9
第33号水田畔(4第4号水田畔2)	N-14°-W	1.381	16~24	52~56	水田13～水田14	10~11 18~20	水口12
第34号水田畔(5第5号水田畔2)	N-30°-E	5.61	16~18	52~54	水田13～水田15	10~12 14~15	
第35号水田畔(4第6号水田畔2)	N-14°-W	0.514	26~26	58~60	水田14～水田15	6~9 20~25	
第35号水田畔(1第5号水田畔3)	N-78°-W	0.894	24~26	53~58	水田15～水田14	9~11 18~21	
第35号水田畔(1第7号水田畔3)	N-84°-E	0.981	21~26	55~60	水田17～水田15	9~12 19~30	水口4
第35号水田畔(2第6号水田畔3)	N-38°-W	6.67	16~24	50~56	水田16～水田18	6~8 24~32	水口15
第15号水田畔(6第5号水田畔1)	N-45°-W	0.291	—	—	水田15～水田X	—	
第15号水田畔(7第20号水田畔2)	N-4°-W	0.449	—	—	水田15～水田20	0~1 9~10	
第16号水田畔(5第7号水田畔2)	N-22°-E	0.741	26	49	水田16～水田7	4 8	
第17号水田畔(4第19号水田畔3)	N-30°-W	0.421	17	48	水田17～水田19	11 14	
第18号水田畔(3第19号水田畔3)	N-72°-W	1.163	18	64	水田18～水田19	6 20	
第18号水田畔(4第21号水田畔3)	N-30°-W	7.93	16~18	48~50	水田18～水田21	9~10 14~15	水口10
第18号水田畔(5第22号水田畔3)	N-40°-E	1.633	20	66	水田22～水田18	11 22	
第19号水田畔(4第23号水田畔2)	N-90°-E	0.057	17~22	48~58	水田19～水田20	5~10 18~36	
第19号水田畔(3第29号水田畔2)	N-25°-W	0.159	17	50	水田20～水田21	5~10 18~36	
第19号水田畔(4第21号水田畔2)	N-62°-E	1.769	16~17	49~56	水田21～水田19	7~14 16~26	
第21号水田畔(3第29号水田畔3)	N-61°-W	0.711	23~25	43~44	水田29～水田21	6~9 2~6	水口11
第21号水田畔(5第22号水田畔3)	N-41°-E	0.508	—	—	水田24～水田21	—	
第22号水田畔(4第24号水田畔2)	N-2°-E	1.131	—	—	水田24～水田22	—	
第22号水田畔(5第3号水田畔2)	N-26°-W	0.232	—	—	水田23～水田22	—	
第23号水田畔(4第24号水田畔1)	N-71°-W	0.35	—	—	水田23～水田24	—	
第23号水田畔(4第1号水田路)	N-35°-E	0.814	30	69	—	—	
第24号水田畔(4第5号水田畔1)	N-78°-W	0.911	—	—	水田24～水田25	—	
第24号水田畔(5第6号水田畔2)	N-25°-W	1.111	28~30	47~64	—	—	
第25号水田畔(3第29号水田畔2)	N-38°-E	0.159	—	64	—	—	
第20号水田畔(3第27号水田畔3)	N-7°-W	3.28	26~28	52~63	水田26～水田27	7~8 11~12	水口13
第20号水田畔(4第28号水田畔3)	N-27°-W	0.241	18~22	50~54	水田26～水田28	10~12 14~16	
第27号水田畔(2第1号水田路)	N-20°-E	1.486	29~35	67~72	—	—	
第27号水田畔(4第28号水田畔3)	N-58°-W	0.416	17~20	44~46	水田27～水田28	9~12 9~13	
第30号水田畔(1第31号水田畔5)	N-65°-W	1.185	18~26	45~48	水田31～水田30	5~10 12~14	水口16
第30号水田畔(2第2号水田路)	N-18°-E	0.452	36~42	86~88	—	—	
第30号水田畔(4第3号水田畔2)	N-35°-E	1.191	12	38	水田30～水田32	10 14	
第31号水田畔(1第34号水田畔3)	N-55°-E	0.261	24~32	46~52	水田31～水田34	10~14 10~11	
第31号水田畔(4第2号水田路)	N-4°-E	0.055	22	47	—	—	
第31号水田畔(6第32号水田畔1)	N-7°-W	0.397	16~20	42~53	水田31～水田32	6~14 15~21	水口17
第31号水田畔(7第33号水田畔3)	N-1°-E	0.111	—	—	水田31～水田33	10~13 11~15	
第32号水田畔(5第33号水田畔3)	N-62°-E	0.325	15	46	水田33～水田32	9 16	
第33号水田畔(4第34号水田畔3)	N-79°-E	0.546	24~33	48~52	水田34～水田33	6~9 7~15	
第33号水田畔(2第47号水田畔3)	N-30°-W	0.862	26~32	45~54	水田47～水田34	7~12 10~13	
第35号水田畔(2第36号水田畔3)	N-1°-W	0.288	22~32	50~54	水田36～水田35	6~9 15~16	
第36号水田畔(2第37号水田畔3)	N-1°-E	0.241	16~20	42~52	水田37～水田36	7~10 12~15	
第36号水田畔(3第38号水田畔4)	N-9°-E	0.412	15	50	水田38～水田36	12 16	
第37号水田畔(3第38号水田畔3)	N-89°-W	0.911	20~28	44~54	水田37～水田38	4~11 5~15	水口6
第38号水田畔(2第39号水田畔6)	N-4°-E	7.9	25~28	61~92	水田39～水田38	5~15 12~16	
第38号水田畔(3第40号水田畔6)	N-58°-E	0.442	38	68	水田38～水田40	6 15	
第39号水田畔(4第41号水田畔3)	N-90°-F-W	0.664	24~36	55~66	水田39～水田41	0~1 5	
第39号水田畔(5第40号水田畔3)	N-50°-W	0.567	24~44	52~61	水田39～水田40	4~6 13~18	水口3
第40号水田畔(2第49号水田畔4)	N-42°-W	0.066	—	—	水田41～水田40	—	
第41号水田畔(3第43号水田畔3)	N-10°-E	0.461	16~22	50~54	水田43～水田41	11~12 7~12	
第41号水田畔(4第26号水田畔1)	N-85°-E	0.637	16~30	44~54	水田41～水田42	4~6 18~21	
第42号水田畔(2第31号水田畔4)	N-18°-W	0.482	15~16	48~54	水田43～水田42	9~13 13~19	
第43号水田畔(1第49号水田畔3)	N-78°-E	0.299	28	62	水田49～水田43	7 16	水口5
第43号水田畔(2第48号水田畔5)	N-30°-W	0.866	18~20	52~54	水田48～水田43	10~12 14~16	
第43号水田畔(3第49号水田畔3)	N-79°-E	0.184	22	46	水田43～水田44	9 16	
第45号水田畔(3第46号水田畔3)	N-56°-E	0.211	18~20	42~44	水田45～水田46	8~12 12~14	

★第10号水田と水田10(同一)

★畦畔の直前輪軸、長さは曲線の長さを用い( )数値は残存値を示す

★水田面からの高さは畦畔頂部での數値

★高位水田面からの数値がその水田の水位の最大値と考えられる

※=計測不能

### 第3節 C1VII層水田跡

#### C1VII層水田跡（図202・203・204・205・206）

【位置・確認】現地形では、微高地状の高まりをなすC1区に位置する。現地表面から約1.2m下位、基本層序第C1VIIa層と第C1VIIb層の層理面で東西方向に主軸を有する1条の溝跡（第1号水路跡）と約120枚の小区画水田を確認した。遺構の標高は25.9～26mで、北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜する。畦畔の検出には、高まりが弱く、色調の差が不明瞭で、検出までに時間を要した検出困難な箇所（Dブロック）と、上層とのコントラストが明瞭で比較的容易に検出できた箇所（A・B・Cブロック）とがある。

【層位と土地条件】C1区の基本土層は、火山灰質の粘質シルトが卓越しており、水流によって運搬された土層が断続的に埋積したものとみられる。これら堆積層中には斑鉄の粒子が顕著に認められ、第C1VI層では、草本植物の痕跡が確認されている。また、第C1V層中には、筋状の流水痕跡がみられ、この場所が河川からの氾濫にさらされ、地下水位の高い状態におかれていたことを伺わせる。C1VII層水田跡を覆う第C1VIIa層は浅瀬石川上流からもたらされた十和田八戸火山灰の再堆積層と鑑定されており（第9章第4節）、河川の氾濫によって運ばれてきた洪流水土層と考えられる。本層はA・B・Cブロックで2～4cm程度の厚さで確認されるものの、Dブロック付近では全く確認されなくなる。尚、これより北東約1.4kmに位置する垂柳遺跡とは、上下方向における堆積層の連続性に共通する部分が多く、両遺跡の土地条件が近似したものであることが示唆される。下層から上層にかけて連續採取した土壤分析によると、C1VII層水田跡が形成される以前の環境については、アシの繁茂する低湿地であったと推定されている（第9章第11節）。

【畦畔の状況】南北軸はN-19°-E、東西軸はN-66°-Wに傾く。畦畔上面から耕作土上面の比高差は約1～4cmである。基本層序第C1VIIb・c層は耕作土に相当し、畦畔に連続する。畦畔検出の経過としては、水路に隣接する水田60・61・62北側部分が最初に現れ、続いて東西軸の畦畔がこれに並行する形で現れた。これらに直交する南北軸の畦畔は、更に数mm下がった耕作土直上部分に達した時点で確認される傾向がみられた。

【畦畔の配列】調査区内を東西に貫く水路付近において、不定形な区画が一部にみられるが、基本的に東西および、南北軸の畦畔がそれぞれ直交して連なる。

【畦畔の規模】畦畔の上端幅は約3～12cm、下端幅は約12～36cmである。確認できた畦畔は、耕作土上面からの比高差が1～4cm以内に収まるものが大半を占める。その一方で、畦畔状のラインとして認識できるものの、周囲の耕作土と同レベルに達した時点ではじめて確認されるものも存在する。

【水田の範囲】第2章第2節で述べたように、遺跡全体の基本土層はA～C区、D区、C1区で様相が異なる。弥生時代の水田跡が検出された範囲は第C1VII層の範囲と一致しており、調査区内ではC1区に限定される。但し、C1区の基本層序はC区との境界部分では不整合の関係にあり、西側の面的な広がりについては不明である。また、東側（D区側）についても擾乱を受けた範囲が続き、同様に不明である。このため、当時の水田域の広がりについては明確ではないが、区画規模や水路の形状に大きな変化がみられないことを考え合わせるといずれの方針についても水田跡が連続していた可能性が高いとみられる。

【水田の形状と規模】不定形の区画（水田17・44・54・74・89）、長方形の区画（水田78・79・93・94・95・96等）、正方形の区画（61・64・65・84等）がみられる。これらは、一辺約2～2.6m

で、区画内の面積は概ね3～4m<sup>2</sup>である。水田17、74、89の周辺では、区画の面積が不揃いで、区画を形成する畦畔が部分的に欠けた状態で検出されている。また、耕作土上面の状態は、第1号水路跡の北側部分で凹凸が著しく、これと比べて南側は平坦である（図202土層図Aライン）。南東側Dブロック部分については、北西側に比べて土壤化した第C1VIIb・c層の厚さが薄く、畦畔の検出は困難であった。また、プラント・オバールの定量分析では、イネの検出量が相対的に乏しく、調査区内では耕作頻度の低い場所であった可能性が指摘されている（第9章第12節）（図204）。

【耕作土】第C1VIIb・c層から多量のプラント・オバールが検出されており、耕作土と考えられる（第9章第11節）。第C1VIIa層の土質は火山灰質でI J-40～46、IK-40～45、IL-39～45、IM-39～45、IN-42～45、IO-43～44付近では明瞭である。本層については、イネのプラント・オバールが検出されているものの第C1VIIb・c層に比べるとその割合は低く、上面で畦畔を検出することはできなかった。尚、第C1VIIa層とC1VIIb層の層理面には、火山灰質土がブロック状に介在しており、特に第1号水路跡の北側では、土層断面からも顕著な凹凸と火山灰を確認することができる。

【水口】水口は検出されなかった。

【水路】北東側が上流部、南西側が下流部と考えられる。断面形状は浅い皿状を呈しており、最深部は約30cmを測る。底面には火山灰質土壤の詰まった足跡状の痕跡がみられた。

【出土遺物】第1号水路跡堆積土および、水田耕作土中から弥生時代中期の土器（図206-1～34）が出土している。これらは第C1VIIb層以下で、畦畔に近接して見つかるものが多く、出土点数は86点を数える。器種は甕（図206-1～24,26,27）、高杯（図206-25）、壺（図206-28・29）からなり、いずれも細片状である。石器は第1号水路跡堆積土上部から微小剥離痕のある剝片5点（図206-35～39他）、不明石製品1点（図206-40）、自然礫3点が出土している。剝片は水田22の南側にまとまった状態で出土しており、同一母岩に由来するものとみられる。

【水田面の傾斜】畦畔上端検出面の起伏の状態を見ると、北東から南西にかけて、緩やかに傾斜しており、水の流れもこれに従っていたとみられる（図202）。畦畔検出面の東西（水田10-20、水田28-44、水田67-85）および南北（水田19-105、水田43-111）ラインにおける標高計測値を度数分布図にまとめ、図205に示した。これによると、調査区東側から西側にかけての傾斜が認められる一方で、水田37～40にはわずかな窪みがみられる。また、水田78・79・93・94にある窪みはIP・Q-46グリッドにかけて筋状に延びていることが確認できる。

【稲株・足跡】稲株の痕跡は確認されなかった。第C1VIIb層の直上有る火山灰質土を除去すると、足跡状の痕跡が検出されたが、降雪等の悪条件が重なり、十分な精査、記録を行うことができなかった。

【年代】平安時代の豈穴住居跡の検出層位である第C1II層から第C1VII層までの比高差は約1mに達する。この間堆積した土層中には炭化物を含む層があり、その年代測定結果は第C1III層で2000±30yrBP、第C1IV層直上で1880±30yrBP、第C1V層下部で2060±30yrBP、第C1VIIc層で2210±30yrBP、第C1VII層直上で3000±30yrBPであった。また、第1号水路跡堆積土中から出土した炭化物は2180±30yrBP、2210±30yrBP、2170±30yrBPである（第9章第2節）。第C1III層の値を除けば上層から下層にかけての年代値は層位的な上下関係とも整合し、出土遺物の年代観とも矛盾なく、本遺構の帰属時期は弥生時代中期中葉（2200yrBP前後）とみられる。

（齊藤）

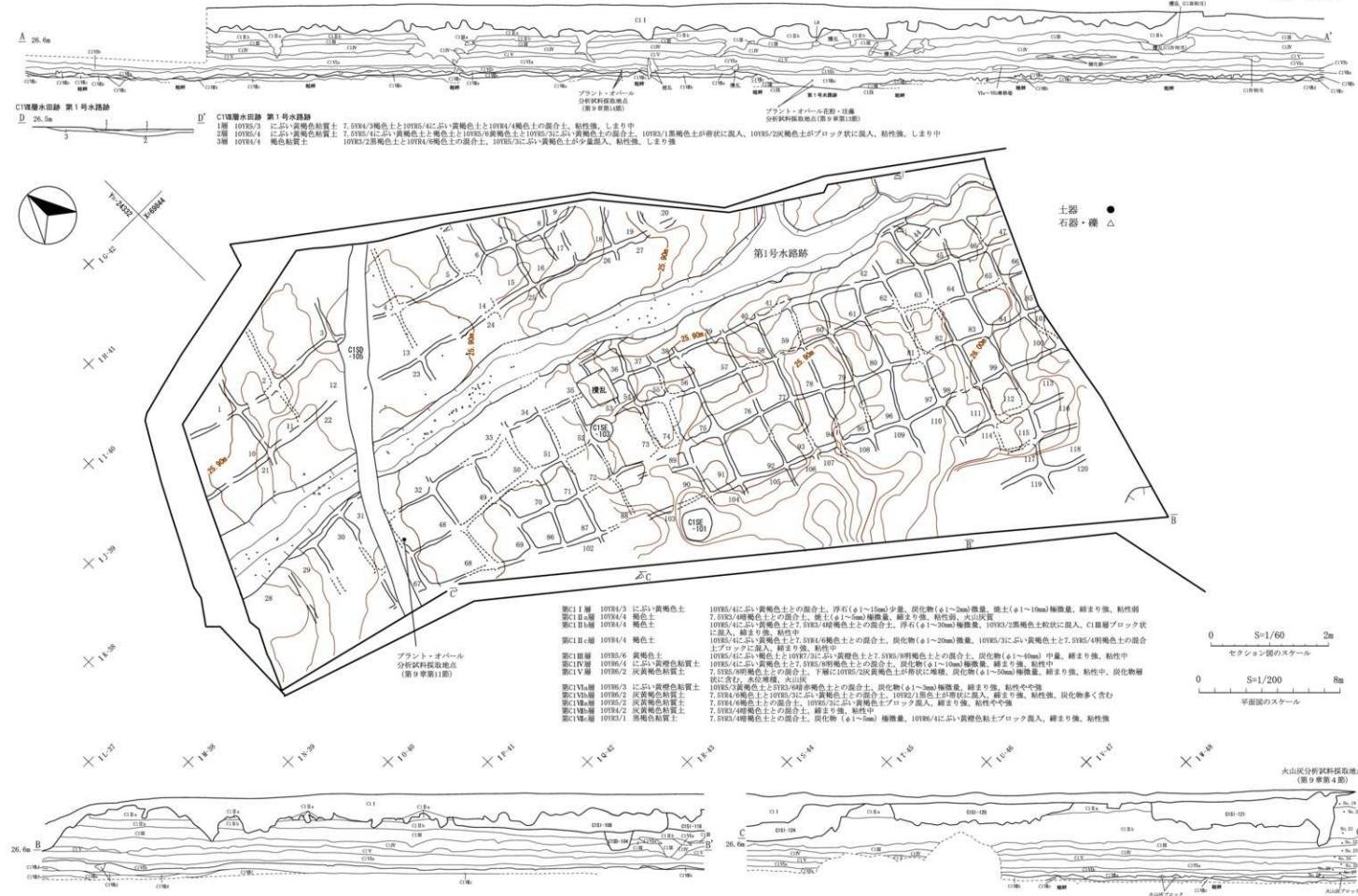


図202 C1VII層水田跡



图203 C1W1層水田跡出土遺物分布図

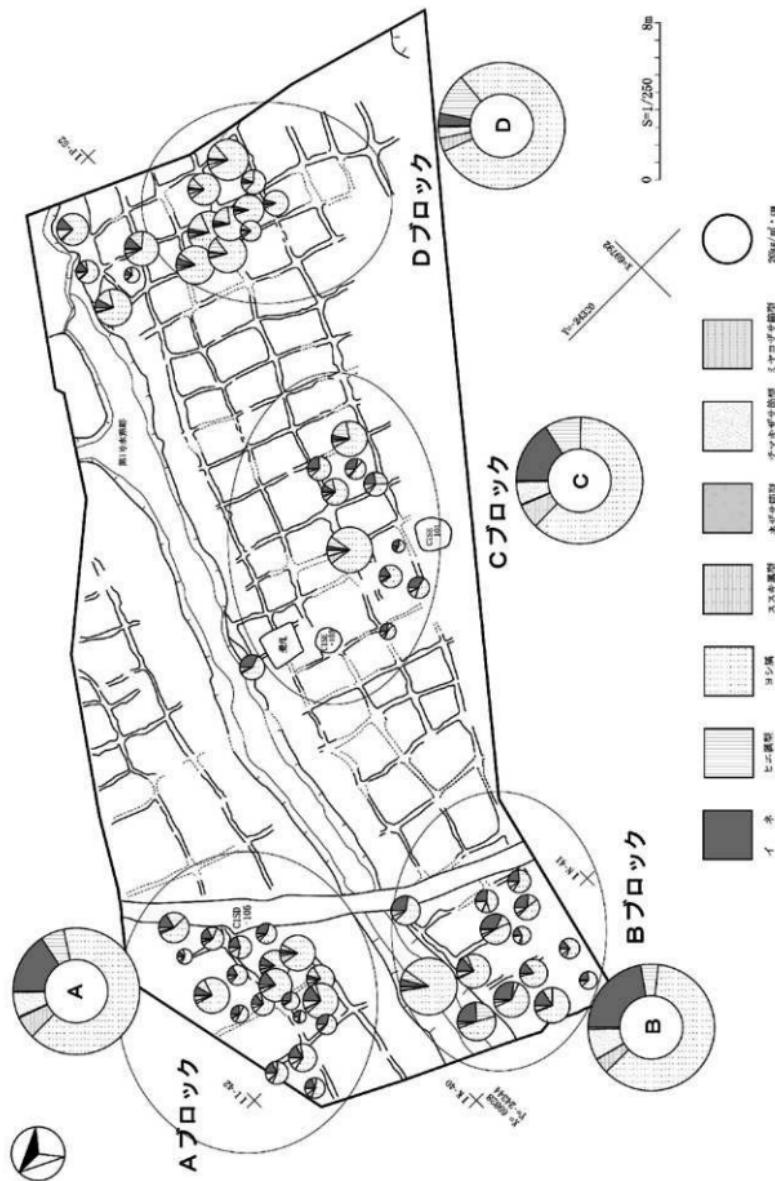


図204 C1V1圃水田跡におけるプラント・オハール推定生産量の平面分布

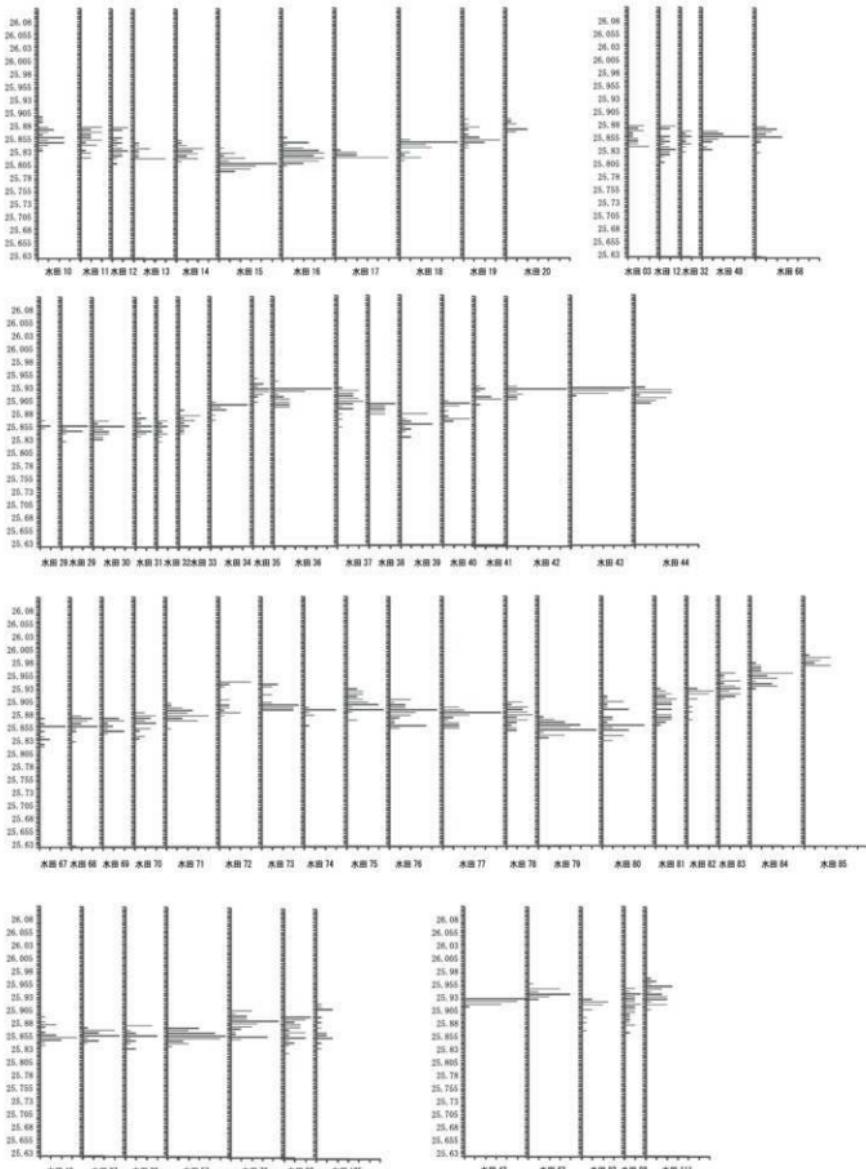


図205 C17V層水田跡標高値ヒストグラム

## C1VII層水田跡 觀察表

水田名	面積 (m)	平均標高値 (m)	隣接区画との高低	ブロック
水田1	*	25.876	>2, >10	A
水田2	*	25.858	<1, >8, >11	A
水田3	*	25.857	>4, >12, >2	A
水田4	*	25.845	>5, >13, >3	A
水田5	*	25.831	>6, >14, >4	A
水田6	*	25.798	<7, >15, >14, >5	A
水田7	*	25.813	>8, >15, >6	A
水田8	*	25.836	>9, >17, >16, >7	A
水田9	*	25.832	<18, >17, >8	A
水田10	*	25.861	<1, >11, >21	A
水田11	(5.459)	25.865	<2, >12, >22, >10	A
水田12	*	25.845	<3, >13, >22, >11	A
水田13	*	25.829	<4, >14, >23, >12	A
水田14	(12.445)	25.832	>5, >16, >15, >24, >13	A
水田15	(5.307)	25.809	<7, >16, >25, >14, >6	A
水田16	(3.943)	25.826	<8, >17, >26, >15	A
水田17	(2.136)	25.822	<9, >9, >26, >18, >16	A
水田18	(5.960)	25.839	<9, >19, >26, >17	A
水田19	*	25.859	<20, >27, >18	A
水田20	*	25.877	>27, >19	A
水田21	*	25.852	>22, >10	A
水田22	*	25.831	<11, >12, >23, >21	A
水田23	*	25.831	<13, >24, >22	A
水田24	*	25.837	<14, >25, >23	A
水田25	*	25.826	<15, >26, >24	A
水田26	*	25.841	<16, >17, >18, >27, >25	A
水田27	*	25.859	>26, >19, >20	A
水田28	*	25.860	>29	B
水田29	*	25.851	<28, >30	B
水田30	*	25.851	>29, <31, >36	B
水田31	*	25.857	<32, >48, >36, >30	B
水田32	*	25.852	C3, <48, >31	B
水田33	*	25.867	C4, <50, >49, >32	C
水田34	*	25.892	C5, >51, >33	C
水田35	*	25.926	>36, >53, >52, >34	C
水田36	(2.819)	25.916	>37, >54, >35, >53	C
水田37	(2.186)	25.904	>38, >55, >36	C
水田38	*	25.889	>39, >56, >37	C
水田39	*	25.860	<40, >57, >38	D
水田40	*	25.883	<41, >58, >39	D
水田41	*	25.915	<42, >59, >40	D
水田42	*	25.925	>43, <62, >61, >60, >41	D
水田43	(3.173)	25.923	>44, >45, >63, >42	D
水田44	1.712	25.914	<45, >43	D
水田45	(2.705)	25.928	>44, >46, >64, >43, >63	D
水田46	(3.292)	25.930	<47, >45, >65	D
水田47	*	25.937	<46, >66	D
水田48	(6.892)	25.856	>32, >49, >58, >31	B
水田49	(6.343)	25.857	C3, <50, >59, >48	B
水田50	(4.630)	25.876	>33, >51, >70, >49	C
水田51	(4.955)	25.892	<34, >52, >71, >50	C
水田52	(4.468)	25.922	>35, >53, >73, >72, >51	C
水田53	(3.188)	25.914	>35, >56, >54, >73, >52	C
水田54	(1.149)	25.918	>36, >55, >73, >53	C
水田55	(2.715)	25.895	C37, >56, >74, >54	C
水田56	(2.677)	25.880	C38, >57, >75, >55	C
水田57	4.833	25.858	C39, <58, >76, >56	D
水田58	(3.941)	25.877	<40, >59, >77, >57	D
水田59	(3.913)	25.907	<41, >60, >78, >58	D
水田60	(3.228)	25.906	<42, >61, >79, >59	D

水田名	面積 (m)	平均標高値 (m)	隣接区画との高低	ブロック
水田61	3.525	25.922	<42, >62, >80, >60	A
水田62	(2.450)	25.928	<42, >63, >81, >61	A
水田63	(3.588)	25.941	<43, >45, >64, >82, >62	A
水田64	(3.445)	25.952	<45, >65, >83, >82, >63	A
水田65	(3.451)	25.956	<46, >66, >84, >64	A
水田66	*	25.969	<47, >65, >84, >65	A
水田67	*	25.847	C31, >68, >30	A
水田68	(6.394)	25.851	<48, >69, >67	A
水田69	(8.243)	25.860	<49, >70, >86, >68	A
水田70	(3.688)	25.864	C50, >71, >86, >69	A
水田71	2.860	25.880	C51, >72, >70, >87	A
水田72	(3.751)	25.912	C52, >73, >88, >71	A
水田73	(8.407)	25.903	C53, >54, >74, >89, >72, >52	A
水田74	(3.129)	25.883	C55, >75, >89, >73	A
水田75	(4.088)	25.901	C56, >76, >91, >74	A
水田76	6.331	25.881	<57, >77, >92, >75	A
水田77	(4.453)	25.876	C58, >78, >93, >76	A
水田78	(4.020)	25.877	<59, >79, >94, >77	A
水田79	4.350	25.852	<60, >80, >95, >78	A
水田80	5.349	25.867	<61, >81, >96, >79	A
水田81	(5.582)	25.893	C62, >82, >97, >80	A
水田82	(4.195)	25.912	<63, >64, >83, >98, >81	A
水田83	(3.617)	25.931	<64, >65, >94, >92	A
水田84	(4.324)	25.951	<65, >66, >85, >100, >83	A
水田85	*	25.981	<66, >68, >101	A
水田86	2.923	25.879	<70, >87, >79	A
水田87	3.557	25.874	C71, >88, >86	A
水田88	(4.685)	25.858	<72, >89, >90, >87	B
水田89	*	25.900	<73, >74, >91, >90, >88	B
水田90	*	25.894	<89, >91, >88	B
水田91	4.983	25.894	C75, >92, >104, >90, >89	B
水田92	7.067	25.874	C76, >93, >105, >91	B
水田93	(5.396)	25.877	<77, >94, >106, >92	C
水田94	(4.401)	25.884	<78, >95, >107, >93	C
水田95	(4.688)	25.886	<79, >96, >108, >94	C
水田96	(4.832)	25.879	<80, >97, >109, >95	C
水田97	(5.641)	25.888	<81, >98, >110, >96	C
水田98	(5.254)	25.915	<82, >99, >111, >97	C
水田99	3.613	25.954	<83, >100, >112, >98	D
水田100	(5.649)	25.976	<84, >101, >113, >99	D
水田101	*	25.965	<85, >100	D
水田102	*	—	—	D
水田103	*	—	—	D
水田104	*	25.885	<91, >105	D
水田105	*	25.880	<92, >106, >104	D
水田106	*	25.870	<93, >107, >105	D
水田107	*	25.894	<94, >108, >106	D
水田108	*	25.912	<95, >109, >107	B
水田109	*	25.898	<96, >110, >108	B
水田110	*	25.907	<97, >111, >109	C
水田111	(3.908)	25.939	<98, >112, >110	C
水田112	(3.414)	25.960	<99, >113, >111	C
水田113	*	25.978	<100, >116, >112	C
水田114	*	—	—	C
水田115	(3.310)	—	—	C
水田116	*	25.938	<113	C
水田117	*	—	—	D
水田118	*	—	—	D
水田119	*	—	—	D
水田120	*	—	—	D

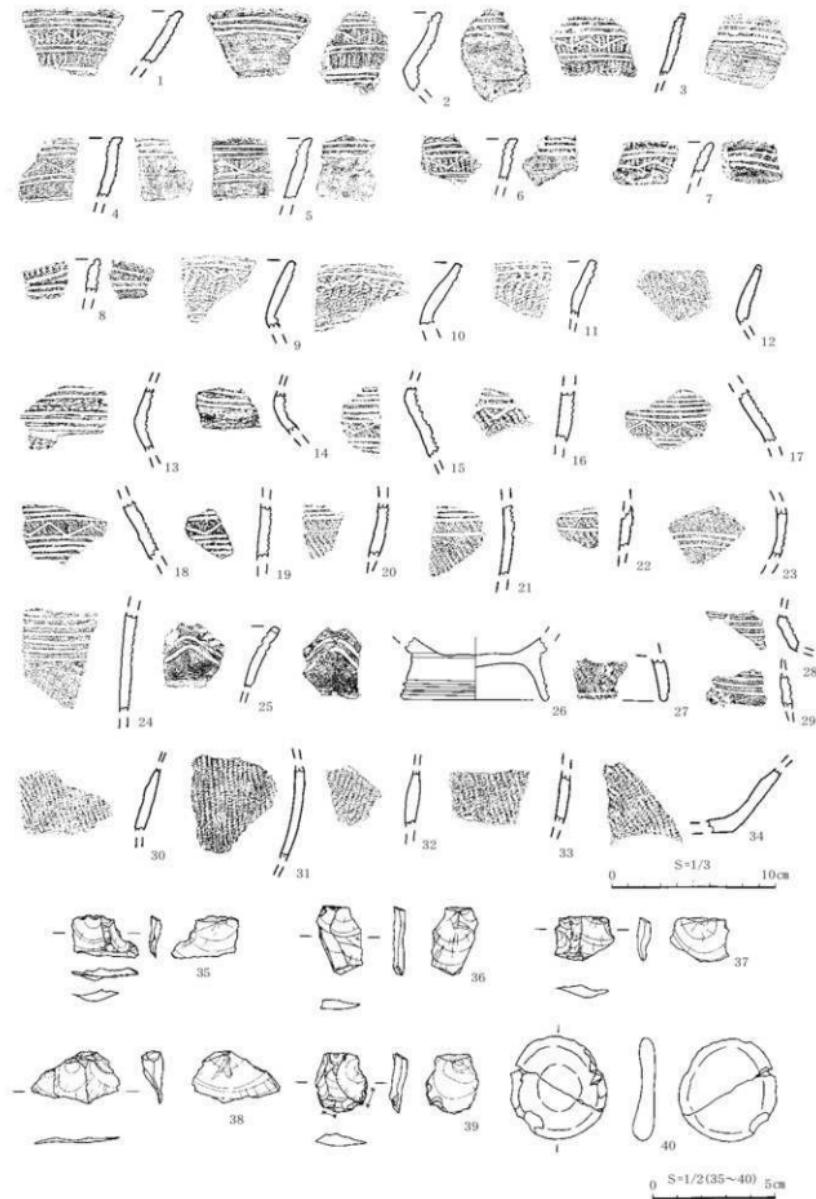


图206 C1VII層水田跡出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	まえかわいせき							
書名	前川遺跡							
副書名	県道弘前田舎館黒石線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第475集							
編著者名	笠森 一朗・工藤 忍・齊藤 廉史							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2009年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	世界測地系 (WGS2000)				
まえかわいせき 前川遺跡	あおもりけん 青森県 みなみつちのくん 南津軽郡 いわむちだてむら 田舎館村 おおだておおむね 大字田舎 おおむねまえかわ 笛字前川 201-1外	02367	32003	北緯	東経	20060424 ～ 20061122	8,600m <sup>2</sup>	県道弘前 田舎館黒 石線道路 改良事業 に伴う事 前調査
				40°	140°			
				37'	32'			
				36"	51"			
				北緯	東経	20070424 ～ 20071122		
				40°	140°			
				37'	32'			
				46"	38"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前川遺跡	生産域	弥生	水田	120枚	弥生土器・石器 土師器・須恵器・土製品・金属製品 石製品・木製品
			水路	1条	
			大畦	1条	
			堅穴住居跡	24軒	
			堅穴遺構	21基	
		平安	掘立柱建物跡	17棟	高槻(3)遺跡、垂柳遺跡のさらに西側から弥生時代の水田遺構が検出されたことにより生産域のさらなる拡がりが確認された。
			土坑	99基	
			井戸跡	5基	
			溝跡	53条	
			濠跡	8条	
		墓域	円形周溝	3基	本県では初例となる平安時代の水田遺構が検出された。
			焼土遺構	1基	
			性格不明遺構	3基	
			水田	49枚	
			水路	2条	
		中世	大畦	1条	陶磁器・石製品・金属製品・木製品 古銭
			堅穴遺構	12基	
			掘立柱建物跡	4棟	
			ピット	多数	
			土坑	29基	
		近世以降	土坑墓	1基	平安時代に起こった洪水以降、再び生産域としての土地利用が始まる。
			井戸跡	4基	
			溝跡	28条	
			濠跡	5条	
			道路跡	1条	
要 約	交通	近世以降	溝跡	1条	陶磁器・木製品・古銭
			水田	3枚	
			水路	2条	
			道路跡	1条	
			沼・河川跡		
		交通			弥生土器・土師器・須恵器・木製品・古銭

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第475集

## 前川遺跡

—県道弘前田舎館黒石線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告書—

(第一分冊)

発行年月日 平成21年3月30日

発 行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15

TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702

印 刷 青森コロニー印刷

〒030-0943 青森市幸畑字松元62-3

TEL.017-738-2021 FAX.017-738-6753

---







